2022 年度

東洋大学

SDGs 実践講座　活動報告

2022 年度「SDGs 実践講座~17 ゴールへの第一歩~」活動報告

Ⅰ. はじめに…… 1
Ⅱ. 運営委員…… 2
Ⅲ. 運営委員会の開催…… 2
Ⅳ. 広告宣伝…… 2
Ⅴ. 募集…… 2
Ⅵ. 受講者数一覧…… 3
Ⅶ. 「総合」履修者数…… 3
Ⅷ. 予算執行報告…… 3
Ⅸ. 骨子およびプログラム…… 4
Ⅹ. 講義プログラム…… 7
ⅩⅠ. 講義要旨…… 8
ⅩⅡ. 受講前・受講後アンケート結果…… 16
ⅩⅢ. 最終レポート…… 24

「SDGs 実践講座」は、2022 年度より初年度開講として、全 15 回の講義を教員および外部講師に担当いただき、対面・オンライン講義として比較的円滑に運営することができた。

以下、今年度の活動報告を行う。

Ⅰ. はじめに

全学総合講義「SDGs 実践講座 －17 ゴールへの第一歩－」をふり返って

代表担当者：東洋大学副学長/生命科学部 川口 英夫

SDGs（Sustainable Development Goals）は、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された、2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。この SDGs は発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサルなものであり、皆が日々行っている諸活動の中で SDGs に取り組むことが求められています。さらに、2020 年に「行動の 10 年」がスタートしたという宣言がありました。2015 年に公表された目標に対し 5 年間の予備期間を経て、2020 年から 10 年間をかけて目標を実現しようという、次のフェーズに移ったことが宣言されたということです。

これらの状況を鑑み、本学でも今年度から全学部を対象とした講義「SDGs 実践講座 －17 ゴールへの第一歩－」を立ち上げました。本講義の目的は下記の 3 つです。

①SDGs に関し、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学ぶ。

②この学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に変化させて行く」。

③在学中あるいは卒業後に国内外の社会で活躍できる人材に成長する。

これらの目標に対し、受講生の講義の最終発表や最終レポートから、「行動の 10 年」に相応しい、SDGs をベースとした「行動変容を伴う学び」がある程度実現できたと考えています。
学祖井上円了先生の言葉である、本学の建学の精神は「諸学の基礎は哲学にあり」ですが、これに「他者のために自己を磨く」「活動の中で奮闘する」という言葉を纏めると、「深く考え、実行する」ということになります。この井上円了哲学の実践版として本講義を実施したわけですが、全受講生が将来、「深く考え、実行する」人材として、国内外で大いに活躍してくれるものと確信しています。

Ⅱ.運営委員

教学担当常務理事	金子 光一
学長	矢口 悦子
教務部長(副学長)	東海林 克彦
社会貢献センター長	髙山 直樹
講座運営担当責任者	川口 英夫(生命科学部教授)
講座運営担当者	小瀬 博之(総合情報学部教授)
講座運営担当者	清水 宏(法学部教授)
講座運営担当者	堀本 麻由子(文学部准教授)

Ⅲ.運営委員会の開催

第 1 回: 2022 年 1 月 11 日 (火)
第 2 回: 2022 年 2 月 3 日 (木)
第 3 回: 2022 年 5 月 30 日 (月)

Ⅳ.広告宣伝

学内掲示、本学公式アプリ、ToyoNet-G、ToyoNet-Ace による配信等で広報活動を行なった。

Ⅴ.募集

申込期間:	2022 年 7 月 11 日(月)～9 月 2 日(金)
申込総数:	38 名
書類選考:	①選考期間 9/6(火)～9/12(月) ②選考結果発表 9/15(木)
書類選考(延長):	①選考期間 9/16(金)～9/17(土)正午まで ②選考結果発表 9/17(土)午後
	※選考担当者:川口 英夫、小瀬 博之、清水 宏、堀本 麻由子
受講決定者数:	31 名

受講手続期間:　　秋学期履修登録期間までに「履修希望申請書」を提出のうえ各学部教務課で履修登録を行う。
授業開始:　　9/23(金)　A101　教室(10 号館 1 階)

Ⅵ.受講者数一覧

単位:人数

申込者数	38
受講者数	31

● **受講者数(学部・学年別)**

単位:人数

学部/学年	1 年	2 年	3 年	4 年	合計
文学部	1		1		2
経済学部 1 部	1		3		4
経済学部 2 部			1		1
法学部第 1 部		1			1
社会学部第 1 部	3	1		2	6
社会学部第 2 部	1				1
国際学部	4		1		5
国際観光学部			2		2
情報連携学部		1			1
理工学部		2			2
総合情報学部		2	2		4
生命科学部	2				2
合計	１２	7	１０	2	３１

Ⅶ.「総合」履修者数

1、履修登録者数
「総合ⅢB / 全学総合 J」 24 名 (白山・板倉キャンパス)
「総合ⅡB / 全学総合 J」　1 名 (赤羽台キャンパス)
「総合 B / 全学総合 F」　6 名 (川越キャンパス)

2、単位修得者数
31 名

Ⅷ.予算執行報告

支出

予算目的	予算件名	予算額	執行額	残額
授業・講座等運営	SDGs 実践講座	186,000 円	128,634 円	57,366 円

IX.骨子およびプログラム

2022 年度　SDGs 実践講座「17 ゴールへの第一歩」の骨子（シラバス）

1．講座の目的・内容

「SDGs（Sustainable Developmental Goals）」とは、2015 年 9月に国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された、2030 年までに持続可能でより良い世界を目指す、17 項からなる国際目標である。本講義の目的は、この SDGs について、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学ぶことである。さらに、この学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に変化させて行く」ことで、在学中、あるいは卒業後に国内外の社会で活躍できる人材に成長することを目指す。なお、本講義受講期間中に SDGsに繋がる活動をスタートしていただく。社会貢献センター(ボランティア支援室)等で実施する活動、若しくは自身での活動を通じて、本講義の学びを「自分ごと」にする。これらの活動を踏まえ、グループでの最終発表および各自の最終レポートをまとめる。
また、本講座終了後、受講者には東洋大学 SDGsアンバサダーへの登録を推奨します。

2．本講座の名称

本講座は「SDGs 実践講座」を正式名称とする。

3．本講座の募集人員、応募方法等

1）募集人員：40 名程度
2）対　　象　：本学の学部生
3）授業期間：秋学期（9 月 23 日～1 月 20 日まで）
4）応募方法：グーグルフォームより応募する。記載の志望理由等により選考を行う。

4．学修到達目標

受講生は、以下の力を涵養し獲得することが期待される
1．SDGs の理念と具体的な取り組みを「自分ごと」として理解する力
2．「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力
3．課題・問題を発見する力
4．他者と関わりチームとして成果をあげる力

5. 講義スケジュール

Ⅰ. 1)学長講義(矢口 悦子 学長)

2)本学、他大学の SDGs取り組み状況説明等

(川口 英夫 生命科学部教授、副学長、東洋大学 SDGs推進委員長)

3)アイスブレイク(清水 宏 法学部教授)

Ⅱ. ワークショップで考える SDGs「「世界がもし 100 人の村だったら」」から考える SDGs

(外部講師 NPO Dear)

Ⅲ. 世界と日本の子どもの貧困について考えよう(小野 道子 社会学部准教授)

Ⅳ. 見える飢餓と見えない飢餓ー植物科学からの挑戦ー(廣津 直樹 生命科学部教授)

Ⅴ. 移民・難民と私たち:共生社会へのカギ(南野 奈津子 ライフデザイン学部教授)

Ⅵ. 気候変動対策とエネルギー・陸域生態系の保全(小瀬 博之 総合情報学部教授)

Ⅶ. うまい棒から考える「パートナーシップで目標を達成」する意味と意義(外部講師 JICA 高田 健二)

Ⅷ. 対話的な深い学びへのアプローチ(堀本 麻由子 文学部准教授)

Ⅸ. 開発途上国の生活環境改善に向けて(北脇 秀敏 国際学部教授)

Ⅹ. 学校の中のジェンダーと子どもの権利(内田 塔子 ライフデザイン学部准教授)

Ⅺ. 人工知能と人間社会(佐野 崇 情報連携学部講師)

Ⅻ. 海の豊かさを守ろう～イルカ、クジラの世界から見つめる SDGs～ワークショップ

(外部講師 アイサーチ・ジャパン)

XIII. 住み続ける社会のデザイン(水村 容子 ライフデザイン学部教授)

XIV. 日本人の働き方と働きがいはこれからどうなるのか(久米 功一 経済学部教授)

XV. 最終グループ発表

上記プログラムを受講したまとめとして、グループ毎に受講生が、口頭および文書により発表する。予め書面を作成し、当該書面に基づいて口頭報告をさせることで、プレゼンテーション能力の涵養を図る。口頭報告については、教員が講評を行い、さらに思考を深化させるように指導する。

6. 成果の公表について

授業の成果については、運営、プログラム内容、最終報告書などをまとめた活動報告書として公表する。

7. 授業科目としての提供

授業科目「総合」(半期 15 回　2 単位)として提供し、単位認定を行う。

8. 録画収録および ToyoNet-Ace の活用

講義ついては、録画収録して講義記録として保存する。また、ToyoNet-Ace を活用して、授業運営に関する管理を行う。

X．講義プログラム

2022年度　東洋大学SDGs講座

秋学期・金曜日5時限	日　時	授業内で扱う17目標No（＊4は共通）	授業形式	内容詳細（例）	講師	所属・肩書き
第1回	9月23日	全体	ハイフレックス	（16：30～17：10）学長講義	矢口　悦子	学長
				（17：15～17：25）本学、他大学のSDGs取り組み状況説明等	川口　英夫	副学長/SDGs推進委員長
				（17：30～18：00）アイスブレイク	清水　宏	法学部教授
第2回	9月30日	全体	Web/対面	「世界がもし100人の村だったら」から考えるSDGs	外部講師　NPO　Dear	特定非営利活動法人　開発教育協会講師
第3回	10月7日	1・5・11	ハイフレックス	世界と日本の子どもの貧困について考えよう	小野　道子	社会学部准教授
第4回	10月14日	2	ハイフレックス	見える飢餓と見えない飢餓ー植物科学からの挑戦ー	廣津　直樹	生命科学部教授
第5回	10月21日	3・10・16	ハイフレックス	移民・難民と私たち：共生社会へのカギ	南野　奈津子	ライフデザイン学部教授
第6回	11月4日	7・13・15	ハイフレックス	気候変動対策とエネルギー・陸域生態系の保全	小瀬 博之	総合情報学部教授
第7回	11月11日	17	ハイフレックス	うまい棒から考える「パートナーシップで目標を達成」する意味と意義	外部講師（JICA高田健二）	外部講師
第8回	11月18日	4	ハイフレックス	対話的な深い学びへのアプローチ	堀本　麻由子	文学部准教授
第9回	11月25日	3・6・11	ハイフレックス	開発途上国の生活環境改善に向けて	北脇　秀敏	国際学部教授
第10回	12月2日	4・5	ハイフレックス	学校の中のジェンダーと子どもの権利	内田　塔子	ライフデザイン学部准教授
第11回	12月9日	9・12	ハイフレックス	人工知能と人間社会	佐野　崇	情報連携学部講師
第12回	12月16日	14	ハイフレックス	海の豊かさを守ろう～イルカ、クジラの世界から見つめるSDGs～（ワークショップ）	外部講師（アイサーチ・ジャパン）	外部講師
第13回	12月23日	11	ハイフレックス	住み続ける社会のデザイン	水村　容子	ライフデザイン学部教授
第14回	1月6日	8	ハイフレックス	日本人の働き方と働きがいはこれからどうなるのか	久米　功一	経済学部教授
第15回	1月20日	全体	ハイフレックス	最終グループ発表	運営担当教員	

＊プログラム内容・授業形式については変更する場合があります。

1：貧困をなくそう　2：飢餓をゼロに　3：すべての人に健康と福祉を　4：質の高い教育をみんなに　5：ジェンダー平等を実現しよう　6：安全なトイレを世界中に　7：エネルギーをみんなにそしてクリーンに　8：働きがいも経済成長も　9：産業と技術確認の基礎を作ろう　10：人の国の不平等をなくそう　11：住み続けられるまちづくりを　12：つくる責任、つかう責任　13：気候変動に具体的な対策を　14：海の豊かさを守ろう　15：陸の豊かさも守ろう　16：平和と公正をすべての人に　17：パートナーシップで目標を達成しよう

SDGs17 目標よりテーマを設定し、講義を行った。毎回の講義では、グループを設定し、グループワークやディスカッションを重視し、意見を出し合いながらグループ毎の意見をまとめ、発表した。

XI. 講義要旨

SDGs 実践講座第 1 回　講義要旨

9 月 23 日（金）

講師名：矢口　悦子（文学部教授）
テーマ：東洋大学の歩みと SDGs、そして現在の取り組み

本学の歴史を振り返り、創立者井上円了先生の思想に基づく建学の精神の中に、すでに現在の SDGsに通じる考え方が示されていることを明らかにした。創立直後からの講義録の送付による通信教育や当時の専門学校として初の女子学生の受け入れなど具体的な事項で説明した。講義の後半では、夜間部の教育による歴史の継承や男女共同参画によるキャンパス文化の存在を背景として、2021 年 6 月に制定された「学校法人東洋大学 SDGs行動憲章」を読み直した。現在の具体的な取り組み事例として、学生 SDGsアンバサダーを中心とした多様で主体的なムーブメント、教員による重点研究としての探求、そして大学としての平和にかかわる取り組みとなるウクライナからの学生の受け入れなどを取り上げながら、受講者と共に SDGsに関する問題意識を持つこと、行動することの重要性を確認することができた。

SDGs 実践講座第 2 回　講義要旨

9 月 30 日（金）

講師名：NPO 法人 Dear　八木　亜希子
テーマ：「世界がもし 100 人の村だったら」から考える SDGs

インターネット上で、拡散することによって世に知られることとなった、「世界がもし 100 人の村だったら」は、世界をひとつの村にたとえ、人種、経済状態、政治体制、宗教などの差異に関する比率はそのままに、人口だけを 100 人に縮小して説明している。受講者には、気になった文章をグループ内で共有し、なぜその部分が気になったのか、どういう感情を抱いたのかを考え、グループごとに発表を行った。2030 年までに達成すべき開発目標として掲げられている「SDGs」。受講者はこの年に世界がどうなって欲しいか、あるいはどうなっていると思うかを話し合い、それまでに自分たちができることは何かについて考え、地球社会に住む自分たちのあり方、未来について考えるきっかけとなった。

SDGs 実践講座第 3 回　講義要旨

10 月 7 日（金）

講師名：小野　道子（文学部准教授）
テーマ：「世界と日本の子どもの貧困について考えよう」（第 3 回）

この講義では、SDGs 目標 1 の「貧困をなくそう」の内容やターゲット、絶対的貧困と相対的貧困の違いについて説明できるようになること、世界と日本の子どもの貧困の現状や対策について自分なりの考えを持つことができるようになることを目的とした。まずは「子どもの貧困」のイメージについ

て考えてもらった。講義を聴くだけでなく、世界で極度の貧困状況にある子どもの数は減っているのか、マイクロファイナンスは子どもの貧困削減に役立っているのかなど、グループで話し合い発表した。子どもの貧困だけでなくおとなの貧困も自己責任ではないこと、災害などが起きれば誰でも脆弱層になり得るため、レジリエンスの構築が大切であること、今、貧困の状況にある子どもだけでなく、「すべての子ども」への支援が大切であることなどを伝えた。日本政府は 2030 年までに貧困を減らせるのか、どのようにしたら減らせるのか、この授業を通して世界や日本の子どもの貧困について考え続けてもらいたい。

SDGs 実践講座第 4 回 講義要旨

10 月 14 日(金)

講師名: 北脇 秀敏(国際学部教授)
テーマ: 開発途上国の生活環境改善に向けて

講義では、まず MDGsから SDGsへ世界的な開発目標が移り変わった過程を紹介した。先進国から途上国への国際協力が中心課題であった MDGsと比較し、「誰一人取り残されない」SDGsに変わり多くの人に受け入れられたことを述べた。次に途上国の生活環境を守る重要な要素として水供給、し尿・排水処理、廃棄物処理の 3 つの公共事業が途上国住民の健康に関係する要素であり、健康的な生活を送るためには、これらが破綻のない形で実施されていることが必要なことを述べた。講義において特に強調した点は、これらの不備があるとどのような健康上の問題点があるかという点に加え、途上国において生活環境を改善する上でどのような適正技術を導入すれば良いかという点にも考察を加えた。また東洋大学の卒業生が途上国の環境改善に青年海外協力隊員として活躍している様子も紹介し、聴講生がどのようにこうした活動に関われるかの議論も行った。

SDGs 実践講座第 5 回 講義要旨

10 月 21 日(金)

講師名: 南野 奈津子(ライフデザイン学部教授)
テーマ: 移民・難民と私たち:共生社会へのカギ

本講義では、SDGsの目標3, 10、16 をテーマとして、1)世界での人の移動と難民・移民の実情、2)移動する人々が経験する事. 彼らの経験、3)日本で起きていること、4)共生に向けて:私たちは何ができる?という 4 項目について学んだ。
世界における難民・移民の数や地域、人が移動をする/強いられる要因や背景をデータから学んだのちに、「自分の大切なもののほとんどを急に手放す」という経験を感じるための個人ワーク、グループワークを行った。そして、日本で移住者がどのような状況にあるのかを、日本で起きている外国人差別に関する資料を通じて学んだ。最後に、グループワークにて、「共生社会のカギとは何か」について話し合った。「自分たちが実情を知ること」「身近な移住者との関わりを積極的にもっていくこと」「自分事としてとらえること」等が最後の共有の場で報告された。

SDGs 実践講座第 6 回 講義要旨

11 月 4 日(金)

講師名: 小瀬 博之(総合情報学部教授)
テーマ: 気候変動対策とエネルギー・陸域生態系の保全

SDGs(持続可能な開発目標)のうち「7.エネルギーをみんなに そしてクリーンに」「13.気候変動に具体的な対策を」「15.陸の豊かさも守ろう」の 3 つの目標について、現状ではトレードオフになっている関係を、事例を示しながら説明した。次に、1 回目のグループワークでこれらの目標を中心とした持続可能な開発の課題をまとめ、グループごとに発表してもらい情報共有した。続いて、取組事例として講師が関わっている「かわごえ環境ネット」、「東洋大学川越キャンパスこもれびの森・里山支援隊」、「NPO 法人かわごえ里山イニシアチブ」の取組を紹介した。その上で、2 回目のグループワークで 3 つの目標を中心としたグループや大学で実施できることのアイデアをまとめ、発表してもらい情報共有した。最後に「行動しながら学ぶことも大切」、「人に広めること」、「好きこそものの上手なれ」の 3 点を総括として講義をまとめた。

SDGs 実践講座第 7 回 講義要旨

11 月 11 日(金)

講師名:高田 健二 島根県立大学客員教授/海士町グローカル・フロンティア大使
テーマ:うまい棒から考える「パートナーシップで目標を達成」(SDGs 目標 17)

SDGs 目標 17 は、国家間の制度改善や資金調達といったターゲットを軸としており、大学生の肩幅を超えた取り組みである。ただ、いまは大学生でも、東洋大学卒業生としてこれからの生涯をとおして取り組むことはありえるため、そのために必要となる考え方(6 次の隔たり、スチュエーショナル・リーダー、想像力、3 つのカン等)について講義前半で取り上げた。
講義後半では、東洋大学卒業生が代表取締役社長をしている「やおきん」の代表商品である「うまい棒」を事例にして、「パートナーシップでも目標を達成」ということについて、講義前半の考え方も大いに関連して実践していることを伝えた。
2022 年 11 月時点で大学生である受講生たちは、これから平均寿命でも 60 年近くの未来があることから、これから希望のある世界観を描いて、世界の多くの課題にチャレンジして、変革をする人材になっていくことを、受講生たちに期待している。

SDGs 実践講座第 8 回 講義要旨

11 月 18 日(金)

講師名: 堀本 麻由子(文学部准教授)
テーマ: 「対話的な深い学びへのアプローチ」

本講義は、SDGs 17 ゴールに関し、「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力を育むこと、さらにこれまでの授業内容を振り返りつつ、対話的なディスカッショ

ンを通して、問題・課題（SDGs17 ゴール）への取り組み方を考えることをねらいとした。はじめに、「対話的なディスカッション」に関する講義を行い、その後グループ演習を実施した。各グループは 17 ゴールの中で関心の近い学生同士による5名程度の編成とした。各自の問題関心を深めるため、質問中心の話し合いによる自己紹介ワークなどを活用し、グループメンバーの互いを理解することで、共通関心を探る機会とした。また最終回のグループ発表に向けて、今回のグループ演習をキックオフミーティングの場として位置付けた。

SDGs 実践講座第 9 回 講義要旨

11 月 25 日（金）

講師名：廣津 直樹（生命科学部教授）
テーマ： 見える飢餓と見えない飢餓−植物科学からの挑戦−

本講義では、SDGs の目標 2「飢餓をゼロに」に焦点を中心に講義を行った。まず、世界で地域的な偏りが大きい飢餓人口の分布など世界の飢餓状況について説明した。このような食料問題の原因と解決策についてグループワークを実施しところ、学生からは、社会的手段としては気候変動対策やフードロス対策など、技術的手段としてはストレス耐性作物や昆虫食の普及など数多くの意見が出された。次に、ビタミン A や鉄や亜鉛などのミネラルの不足といった目に見えない飢餓“hidden hunger”の状況と今後の予測について紹介し、「”hidden hunger”の対策と予想される問題点」についてグループワークを実施した。学生からは、栄養素を増やした穀物の育種や、目に見えない栄養素についての啓蒙活動や食育の必要性などの意見が出された。様々な学部の学生が集まる本講義では、グループワークにより様々な視点の意見が出された点が特徴的であった。最後に、文理融合の重要性や、教育を受けている者の責任として学生個々人の第一歩の必要性について総括し、講義を締めくくった。

SDGs 実践講座第 10 回 講義要旨

12 月 2 日（金）

講師名： 内田 塔子（ライフデザイン学部准教授）
テーマ： ジェンダーギャップと学校―ジェンダーギャップを解消するために自分にできることとは―

本講義では、 SDGs の 17 の目標の中の 4 「質の高い教育をみんなに」と 5 「ジェンダー平等を実現しよう」を取り上げ、学校におけるジェンダーギャップの問題を自分事として捉えることをねらいとした。はじめに、セクシュアリティという概念や、セクシュアル・マイノリティの多様性について理解した上で、ジェンダーステレオタイプに関わる自己の体験についてグループで共有した。次に、ジェンダーステレオタイプに関する子ども意識調査の結果、ジェンダーギャップ解消に向けた国の施策や学校の取り組みを学んだ。最後に、学びを踏まえて、自分に できることについてグループで話し合い、多様な意見があることを知り、自己の考えを深める場とした。

SDGs 実践講座第 11 回 講義要旨

12 月 9 日(金)

講師名: 佐野 崇(情報連携学部講師)
テーマ: 人工知能と人間社会

SGDs 講座の第 11 回として、「人工知能と人間社会」というテーマで講義を行った。この講義では、人工知能の技術的側面だけではなく、社会への影響についても話した。非理科系の学生も聴講していることを考慮し、技術的な側面よりも、人工知能を作成、使用する際の倫理に重点をおいて、最新の話題提供を行った。
人工知能という言葉の使われ方の変遷を説明した後、ニューラルネットワークの簡単な技術的内容を紹介した。ここでごく簡単な計算の例題を提示し、実際に解いてもらうことで、講演へ集中してもらう工夫をおこなった。後半では人工知能を使う際の問題点や、倫理について話した。特に、一見高性能に見える人工知能も、人間と同じようには問題を理解していないことを指摘し、それゆえに予想できない振る舞いをすることを説明した。さらに、人工知能を作成したり利用したりする場合は作成者や利用者の責任が問われることを説明し、倫理的問題にどう向き合えばよいかの示唆を行った。講演中に、一部最新の人工知能のデモンストレーションを行うことで、学生の興味を引くことができたのではないかと考えている。
最後に学生の考えを発表してもらう機会を設けたが、介護や地方支援といった、こちらが想定した以上の内容があり、驚くとともに、私としても非常に参考になった。

SDGs 実践講座第 12 回 講義要旨

12 月 16 日(金)

講師名:アイサーチ・ジャパン
テーマ: 海の豊かさを守ろう ～イルカ・クジラの世界から見つめる SDGs～

SDGs 目標 14 番目、「海の豊かさを守ろう」について、海に起きている現状を、イルカ・クジラの生態、海洋ゴミよる被害に関することをふまえて伝えた。海洋ゴミによって、イルカやクジラの体内にプラスティックゴミが消化されずに残されてしまったり、浜辺に打ち上げられたゴミの多さを写真で見ることにより、海洋汚染の深刻さを知る。グループディスカッションでは、SDGs14 を“自分ごと”として考えられるよう、自分たちに何ができるのか、どんな取り組みをしていけば良いのかを話合い、各グループから様々なアイディアが出された。SDGs 目標 14 番目を考えることは、その他の目標にも繋がっているということを実感し締めくくった。

SDGs 実践講座第 13 回 講義要旨

12 月 23 日(金)
講師名: 水村 容子(ライフデザイン学部教授)

テーマ: スウェーデンにコレクティブハウスにおける共食活動の運営と環境
本講義は、ヨーロッパ諸国において古くから継承される共同性の高い集合住宅「コレクティブハウ

ス」に関してスウェーデンでの取り組み事例を紹介した。「コレクティヴハウス」は広義には「コ・ハウジング」とも表現される、18 世紀後半からは中～低所得階層に対して家事労働が合理化された住宅として建設が進んだ。スウェーデンでは、1970 年代以降は女性の社会進出を支える居住形態として定着し、現在スウェーデンモデルと称される家事労働分担協働モデルは、スウェーデン国内の各地に建設されている。スウェーデンモデルの特徴は、集合住宅に暮らす住民が平日の夕食の食事当番を担当し、住民皆で夕食を取るコモンミールという活動に代表される。講師が 2019 年に実施した調査では、こうした活動は住民同士の連携に大きな効果をもたらしており、単身世帯の孤独の払拭にも寄与している状況が明らかになった。またフードロスの削減や個人への経済的負担の軽減など、持続可能な居住形態として近年注目されている。

SDGs 実践講座第 14 回 講義要旨

1 月 6 日（金）

講師名： 久米　功一（経済学部教授）
テーマ： 日本人の働き方と働きがいはこれからどうなるのか

SDGs 目標8「働きがいも経済成長も」をテーマとして、日本人の働き方と働きがいについて議論した。はじめに、少子高齢化が進む日本経済の課題は、多様な人材の活用と生産性の向上であることを共有した。その上で、労働市場の変化は、企業に対して、従業員とどう距離をもつか（副業やフリーランスをどう活かすか）、どう対話するか（どのような人材をどう育成するか）、信頼関係を築くか（「職場」の力をどう再生するか）を問うものであることを提示した。こうした変化の中で働きがいをもつためには、従業員のポジティブな心理状態であるワーク・エンゲイジメントの向上や自律的な行動である組織市民行動の促進が望ましいことを提示した。これらの議論を経て、30 分ほど、副業意向、能力開発、ジョブ型 vs.メンバーシップ雇用、働きがいの向上、不正告発の各テーマに関するグループディスカッションを行い、その内容を全体共有した。

XII. 終わりに

運営担当教員
小瀬 博之　（総合情報学部教授）
清水 宏　（法学部教授）
堀本 麻由子（文学部准教授）
髙山 直樹　（社会学部教授）

小瀬　博之（総合情報学部教授）

「SDGs 実践講座 ―17 ゴールへの第一歩―」をサブタイトルとした全学部を対象とした総合科目であり、ディスカッションを中心に据え、志望理由を事前に提出してもらったことにより、SDGs の達成と実践に対して意欲の高い学生が多数履修できたと思う。また、SDGs 学生アンバサダーなどのすでに実践活動をしている学生の刺激もあって、履修者全体が学習到達目標にある『SDGs の理念と具体的な取り組みを「自分ごと」として理解する力』と『自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力』をおおむね身につけることができたと思う。授業運営の課題としては、ディスカッションを中心に据えたことにより、講義の時間と情報がかなり限定されてしまった。また、学部横断のグループを作ることは有意義であるが、非対面の学生はかなり情報量が限られてしまっているとレポートを見て感じた。次年度はこれらのことについて改善の余地がある。

清水　宏（法学部教授）

本講座は、実践を謳っているところ、最終レポート等では、日々の生活において、本学の SDGsアンバサダーとして、あるいは、学内または外部の様々な団体においてSDGsの理念の実践に取り組んでいる旨が報告された。社会および大学がポスト・コロナへと完全には移行できていないことを考えると、大きな成果であると評価できよう。もっとも、今後コロナ以前の状態に戻った場合に、今以上の実践活動に従事できるように環境を整備していくことを考えておくべきではないかと思われる。身近に実践活動をしている人がいる者、自らがリーダーとして実践活動を立ち上げることのできる者がいる一方で、そうではない者もいるため、後者に属する者が円滑に実践活動に従事できるようにする道筋をつけておくことが、この講座の設置の趣旨に適うものであると思われる。そして、将来的には、そうして実践活動に従事している者が、講座の講師あるいはアドバイザー等としてフィードバックを行うようになれば、なおよいものと思われる。

堀本　麻由子（文学部准教授）

学修到達目標の 4 項目は、おおむね達成できたと考えている。受講生は、「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげることができていた。SDGsの 17 項目を知識として理解するだけでなく、学生自身が、様々なアクションプランを考え、実践していることが、最終回のグループ発表や最終レポートの中で述べられていた。
本講座の成果は、学内外における様々な専門分野における講師陣の充実した講義だけでなく、講座の流れとして、学生が同じ問題意識をもつ「仲間」と議論し、共に行動を考える仕組みができていたことによる。また、運営担当教職員による打ち合わせを何度か実施し、講座のねらいや課題を共有したうえで、講座運営ができたことも要因としてあげられる。

一方で、本講座だけでなく、講座終了後の積極的な社会活動を学生に促す仕組みの構築という課題は残った。しかし、オンライン環境を活用したキャンパス間をつなぐ新しい講座のあり方を探究できた点は、グループ演習を含んだ全学講座のモデルになるのではないかと考える。

髙山 直樹（社会学部教授）

「SDGs 実践講座 ―17 ゴールへの第一歩―」の授業は、SDGs を「我がこと」としてとらえていくことを目的として、発信につなげていく方向性をつくることであった。その目的は概ね達成できたことは、学生のプレゼンテーションやレポートから認識できた。

持続可能な開発目標（SDGs）とは、すべての人々にとってよりよい、持続可能な未来を築くための青写真であり、価値である。貧困や不平等、気候変動、環境問題、平和と公正など、どれをとっても「その通り」の事象である。しかし「我がこと」としてとらえてみようとするとそこには、大きな乖離があったり、また無意識の偏見（Unconscious bias）があるのではないか。そこの内在する矛盾に関して葛藤し、対話していく必要がある。そのためには、対話する仲間が必要不可欠である。その対話づくりの起点となり、「我がこと」をより深化させ、仲間を拡げ、17 ゴールへの第一歩から第二歩を、踏み出すことに至った授業となったと考える。

以上

Ⅻ. 受講前・受講後アンケート結果

運営担当教員からのメッセージ（法学部　清水教授）
～受講前・ 受講後 アンケートから～

講座の受講を通じて、SDGsの目標全体に対する理解が促進されているとともに、関心ある目標がメジャーなものから、本当に自分が興味を抱いたものへと変化していることが見て取れます。
その上で、最も重要な事として、目標の実現に向けた実践を計画しているさらには、それに着手している者が増加しています。この講座は、単なる知識の習得に終わるのではなく、実践できる人財の養成をも目標として掲げていたのであり、その文脈では、大いに目標を達成できているものと考えることができます。
さらに、各自が単独で活動するのではなく、お互いに協力し合い、仲間をつくって活動していることから、SDGs実践のための活動が組織化され、より実効的なものとなることが期待されます。
このように、本講座は、本学における学生によるSDGs活動の促進に大きく寄与しており、今後さらに活動の輪が広がっていくことを願っております。

★SDGs実践講座　受講前/受講後アンケート結果
回答者数：受講前 31名　受講後 27名

1.1 SDGsの項目をいくつ知っていますか。

受講前

知っている目標の個数	回答
3	2
4	3
5	7
6	2
7	3
8	3
10	2
12	1
17	8
	31

受講後

知っている目標の個数	回答
5	2
6	2
10	1
11	1
14	1
17	20
	27

1.2　SDGsの目標のうち、現在あなたが最も関心を持っているものを一つ上げてください。

受講前

最も関心を持つ目標	回答
1:貧困をなくそう	1
2:飢餓をゼロに	2
4:質の高い教育をみんなに	2
5:ジェンダー平等を実現しよう	8
7:エネルギーをみんなに そしてクリーンに	1
8:働きがいも経済成長も	3
11:住み続けられるまちづくりを	3
12:つくる責任つかう責任	5
13:気候変動に具体的な対策を	1
14:海の豊かさを守ろう	5
	31

受講後

最も関心を持つ目標	回答
2:飢餓をゼロに	2
4:質の高い教育をみんなに	1
5:ジェンダー平等を実現しよう	3
6:安全な水とトイレを世界中に	3
8:働きがいも経済成長も	1
11:住み続けられるまちづくりを	3
12:つくる責任つかう責任	4
14:海の豊かさを守ろう	6
17:パートナーシップで目標を達成しよう	4
	27

1.3　あなたは、設問２で挙げた目標の実現に向けて、何かを実践しようと計画していますか。

受講前

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	12
2	1
3	3
4	4
5	10
7	1
	31

受講後

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	2
3	1
4	5
5	10
6	1
7	8
	27

1.4　あなたは、設問２で挙げた目標の実現に向けて、既に計画の実践の段階に入っていますか。

受講前

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	14
2	4
3	5
4	3
5	4
7	1
	31

受講後

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	2
2	2
3	5
4	2
5	9
6	4
7	3
	27

1.5　設問３と４のいずれかでSDGsの目標実現に向けた実践を計画している、または、既に実践段階に入っていると回答した人（５～７のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのようなことを実践しようと、あるいは、既に実践していますか。自由に記述してください。

受講前

・SDGsアンバサダーとして企画を検討していたり、その活動に参加していたりする。
・神奈川県茅ヶ崎市と湯河原町で居場所づくりのボランティアに関わり、その地域の人が安心して過ごせるようなまちづくりに関わっている。
・これからの計画は未定なのですが、過去にインターンで、オンラインで中高生に学びを届けるという仕事をしていました。オンライン会議ツールを使用して、全国の中高生がプレゼンやデザイン、イベント企画などの方法について学ぶプログラムの運営に関わっていました。時にプログラムの講師をすることもありました。無償かつオンラインでの実施なので、デザインなどを学べる場所が身近にないなどの教育環境に恵まれていない地方の子どもや、有料で学ぶのは難しいという子どもにも学びを届けることができたことから、「質の高い教育を『みんな』に」という目標の達成に近づくことができていたのではないかと考えます。
・食品ロス削減の為に家庭で出来る事として、賞味期限の近い調味料や食材から使用し、出来るだけ廃棄を無くす取り組みをおこなっている。また料理をする際に、普段捨ててしまう野菜の茎など、アレンジをして食べる事を心がけている。
・環境問題に関わるボランティア活動に積極的に参加しようと計画していて、最近だと清掃ボランティアに参加しました。
・食品ロスを減らすべく、食べ残しはないようにしている。
・SDGsに興味関心のある団体や法人だけでなく個人や学生で単発の地域密着清掃活動や広告を出せると面白そうだと思えた。
・個人的な小さな取り組みにはなってしまうが、ご飯を残さず食べたり、文具を最後まで使い切ったりしている。
・これからになってしまうが民間などの団体の活動などに参加したいと思っている。
・「質の高い教育をみんなに」という目標に対する取り組みとして、東洋大学は誇らしい実績を誇っていますが、私もその東洋大学の学生としてできることはないか模索中です。今日、小中学生の放課後や長期休暇のあり方が変化し、親や家族に宿題や勉強を見てもらえなかったり、不登校等で学校へ行く意欲を失ってしまうケースが見受けられると聞きます。そこで、勉学に勤しむという点で共通点がある我々大学生が行うサポートボランティアに参加し、ゆくゆくは地元でそういった団体を設立してみたいと考えています。
・まちづくりについて学ぶため、いろいろな街や施設を巡っている。
・いま参加しているビジコンで、食品ロスの問題にフォーカスして生産者、販売者、消費者が情報できる場を提供するアプリの制作をしている。例えば販売者側が、消費期限が近くて割引になっている商品があることを消費者側に伝えるなど。
・春学期の授業でゴミ箱の位置情報やゴミの蓄積量を把握し、管理するシステムについてのRFPを作成した。このシステムは、管理者はゴミ回収を効率よく行え、利用者はいつでもごみを捨てられる、という利便性だけでなく、SDGsの達成にもつながる。このような人にも地球にも優しいシステムを作成してみたいと考えている。

受講後

・性別に対する偏見や差別的な言葉を言わない。
・これから、SDGsアンバサダーに応募しようと考えている。そこで、ジェンダー平等としての案を上げようかと考えている。
・飲料水を買わないことを実践しています。また、SDGs14とは関係ないですが、お手洗いを使用した後に便座の蓋をしてから流すことも徹底しています。
・パートナーシップを確立するためのワークショップや組織活動の実践(SDGsアンバサダー内での)
・SDGsアンバサダーとして、メンバーのSDGsに対してどのように取り組めばよいか、好きなこととSDGsをつなぎ合わせて考えるワークショップを企画し、実行に移している。
・授業内で提案したウォーターサーバーの件と、海岸の清掃活動
・つくる側の責任として産業廃棄物を少しでも減らすために、アルバイト先のアップルパイ専門店で、形の悪いパイを焼かずに廃棄していたが、それらを焼いて割引で販売してはどうかと社員に提案した。
・海で問題となっている海洋プラスチックを減らすために、ペットボトル消費量削減、そしてマイボトルを推進することができるウォーターサーバー設置を実行することを計画しようとしている。
・食品ロスをなるべく出さない。
・ペットボトルの使用を避けること、不要な服を捨てないこと
・ウォーターサーバー(注ぐタイプ)の設置
・アンバサダーに入って今回学んだことを実践したい
・本当に身近なことから始めています。例えば、シャワーに入る時は、なるべく節水を心がけたり、石鹸を使うようにしています。
・大学に設置されている給水機をマイボトルへの詰め替え専用で使用再開する案や、衛生面を考慮しウォーターサーバーを新たに設置してもらう案をグループで要望書にまとめ、提案しました。マイボトルの持参を普及させることでプラゴミの削減を目指すねらいがあります。
・食品ロスに気を付けるために計画的に買い物をし、食べ残しは持ち帰って食べるなどしている。
・SDGsアンバサダーへの志願を計画中である。また、「SDG-6:安全な水とトイレを世界中に」に合わせ、特定非営利活動法人ウォーターエイドジャパン(認定NPO)のウォーターエイド・スピーカークラブにも参加し、水の問題をパートナーシップで考えるきっかけを作り広めていくことも計画している。
・近い内容の活動や研修に参加をする
・ごみを出さないようにマイボトルやマイバックを持ち歩くようになった。また、普段の生活で最低限以上のごみを出さないように心がけるようになった。
・ごみ拾いのボランティア活動に参加する
・100円均一などの安くてもろい物を使い捨てるのではなく、良いものを長く使う。

1.6　あなたには、SDGsの目標のうち、設問２で挙げたもの以外にも、大きな関心を抱いているものがいくつありますか。
個数を選択してください。(選択必須)

受講前

設問２で挙げたもの以外に関心を抱く目標の個数	回答
1	3
2	5
3	5
4	6
5	5
6	2
7	2
16	2
特になし	1
	31

受講後

設問２で挙げたもの以外に関心を抱く目標の個数	回答
2	10
3	5
4	1
6	1
7	1
9	1
11	2
12	1
13	1
16	2
特になし	2
	27

1.7　設問６でひとつでも「ある」と回答した方に尋ねます。設問２で挙げたものと設問６で挙げたものを、
あなたなりに関連付けて考えていますか。（考えていない）1←3—5→7（考えている）

受講前

（考えていない)1←3—5→7(考えている)	回答
1	2
2	2
3	10
4	6
5	6
6	1
7	4
	31

受講後

（考えていない)1←3—5→7(考えている)	回答
1	0
2	1
3	3
4	5
5	6
6	2
7	8
	25

1.8　あなたは、SDGsの目標のうち設問２で挙げたものについて、自分の考えを社会に強く発信していますか。
（発信していない）1←3—5→7（発信している）(選択必須)

受講前

（発信していない)1←3—5→7(発信している)	回答
1	19
2	2
3	4
4	2
5	2
6	1
7	1
	31

受講後

（発信していない)1←3—5→7(発信している)	回答
1	5
2	4
3	8
4	5
5	1
6	2
7	2
	27

1.9　設問７で、SDGsの目標のうち設問２で挙げたものについて、自分の考えを社会に強く発信していると回答した人
（５～７のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのようなことを発信しようと、あるいは、既に発信していますか。
自由に記述してください。

受講前

・ジェンダーレスの映画やドラマなどをSNSを使って発信している。 例えば、BLなど。個人的にそのようなストーリーが好きなので色々見たり、友人におすすめしている。
・ボランティア支援室のサポートスタッフとして、イベントの運営に関わり、他学生にSDGsの活動を広めている。
・「きっかけ格差」を問題だと感じていて、卒業論文(研究)のテーマにもしています。具体的には、子どもの教育や体験、人との出会いなど、子どもに関する様々な「きっかけ」や「機会」が、生まれ育った地域や環境、災害などによって左右されてしまうことに問題意識を持っています。発信の仕方としては、自分の考えをまとめた卒業論文を執筆したり、インターンやボランティア活動などで出会った大人に自分の考えについて話したりしてきました。自分の考えを発信して何かを変えたりすることはできていませんが、このような自分の意見を人に伝えることで、キャリア教育に関するボランティアの機会をいただくこともでき、社会貢献や経験を積むことができたので、やはり自分の考えややりたいことを発信することは非常に重要だと感じています。
・SNSを活用してイベント活動やボランティア日常のSDGsを動画や写真形式にして頻繁に投稿している。
・私は現状としてはこれとして行なっていることはありませんが、これから「4:質の高い教育をみんなに」については設問5にあるようにボランティア等に参加したり、本講座を受講する上で気づいたことを踏まえ、ブログやSNS等を正しく活用する上で社会に発信したり、市民意見交換ワークショップ等に参加した際に行政や民間団体、企業に対してアピールしたいと考えています。

受講後

・SNSを通じて、自分が読んだSDGsに関する記事をそこに張って、自分の意見を載せている。
・SDGsの達成のためにはパートナーシップの構築が必要不可欠であることを広め、実際に自分自身が人、もの、ことをつなげる役割を担うこと。 例えば、ボランティア支援室サポートスタッフとして、南三陸ツアーなどのボランティアを企画し、他学生に魅力を伝える活動や、個人的な活動拠点である湯河原の居場所づくりや単発のボランティアを友人を誘って一緒に参加するということをやっている。
・アルバイト先の社員とどうしたら少しでも産業廃棄物を減らせるか話し合うようになった。今後は就職先で食品ロスを減らす為の工夫を提案したり、過剰包装を控える、使い切りサイズでの販売の検討など自ら根拠を持って提案していきたいと考えている。
・これから開始することになるが、SDGsアンバサダー、ウォーターエイド・スピーカークラブともにSDG-17を意識して周囲に発信すべく活動を計画しているものである。特にSDGsの達成のためには自分ごととして受け止め、アクションし、周りに広げていくというフローを各ステークホルダーで繋げていき、強力なパートナーシップを構築することが必要不可欠であることは間違いないと考えている。その中で、SDG-17やパートナーシップの持つ意味合いはどういうものかという点を特に強く発信していきたいと考えている。
・自分自身が得た知識をわかりやすく発信する。 例:セクシャリティやジェンダーはグラデーションである。アセクシュアルについて。

1.10　あなたは、SDGsの目標の実践が社会をより良いものにすると思っていますか。
（思っていない）1←3—5→7（思っている）（選択必須）

受講前

（思っていない)1←3—5→7(思っている)	件数
1	0
2	0
3	3
4	6
5	8
6	5
7	9
	31

受講後

（思っていない)1←3—5→7(思っている)	件数
1	0
2	0
3	0
4	6
5	4
6	3
7	14
	27

1.11　あなたは、SDGsの目標の実践があなた自身を成長させると思っていますか。
（思っていない）1←3—5→7（思っている）（選択必須）

受講前

（思っていない)1←3—5→7(思っている)	回答
1	0
2	1
3	2
4	3
5	10
6	3
7	12
	31

受講後

（思っていない)1←3—5→7(思っている)	回答
1	0
2	0
3	1
4	3
5	7
6	3
7	13
	27

1.12　設問11で、SDGsの目標の実践があなた自身を成長させると思っていると回答した人（５～７のいずれかを選択した人）は、
具体的に、どのような点で成長できると思いますか。自由に記述してください。

受講前

・SDGsの目標達成のために、一つ一つのことをひとごとではなく、自分のこととして捉え、自分自身が社会に貢献し、未来をすることができるという点で、成長にもつながると思う。
・SDGsで出てきた問題が明確になり、影になっていた大きな問題に焦点を当てられる。それがその問題で悪影響を受けている人が助かるかもしれない可能性があることに大きな意味を持つと考える。さらに自分がそれを知ることで情報を発信して世界の人と解決策を作れるかもしれない。さらに今まで考えてこなかった考え方が出てくる。これが自分の思考の視野が広がると思う。
・問題意識を持って課題解決に取り組む活動をすれば、目標を達成するために試行錯誤するので思考力や行動力、能動的に動く力がつくと思います。
・SDGsの目標に自ら取り組むことで、社会問題の解決に貢献してる感覚を持つようになり、自信を持てるようになる。
・社会への関心を絶やさないという点において、大学生活から始められるので、成長できているのではないでしょうか。
・今まで気にしていなかったことに意識が向く為、物事の視野が広がると思いました。また、新たな発見や学びをすることで、自分が今できることにより正確に向き合え、社会問題の貢献に取り組めると思いました。
・これまで行ってきた自分自身の活動は、「SDGsの目標を達成したい」というような大きな思いからではなく、自分の純粋な「やってみたい」「面白そう」という思いから行ってきましたが、自分の知見が広がった点やコミュニケーション能力が高まった点、人脈が広がった点などから成長できたと思っています。また今後も活動を継続することで、成長し続けられると思っています。
・SDGsの目標実践を心がける事によって、身近な生活だけで無く、広く社会問題や環境問題にまで視野を広げることが出来、思考の幅が広がるという点で成長出来ると考えている。更に就職した際にSDGsの知識と活動経験を活かす事で、消費者だけで無く環境へなど、多方面にメリットのある商品開発のように、これまで自分自身が持ち得なかった新たな視点でアイデアを発揮出来る可能性があると考える。

・まず、自国の社会状況を客観的に見る力がつくと思う。深く考えずに過ごしていても、時より違和感を感じる問題がSDGsの17の目標には織り込まれていると感じる。水を出しっぱなしで手指を洗っている人を見ると、世界では飲み水すら満足に確保できない人もいるのに、と思ったりする。そういった身近に感じているのに、解決できていない事案が詰まっているSDGsの目標を知り、解決策を模索していくことが自身の成長につながると思う。
・世界全体で関わっている問題を自分ゴトとして考え、行動していく点で成長できると思います。
・SDGsについて知ることは、社会について知ることだと考えている。17のゴールに社会が解決しなければならない、考えていかなければならない問題が集まっているからだ。それらの問題について考えることで、社会の一員として自分がやらなければならないことが見えてくると思うので、それは成長につながると考える。
・国際社会への理解を深め、国際理解力の向上につながると思う。
・現状から課題を見つけ、改善しようと考え、学ぶことは私自身の成長につながる十分なきっかけになると考えている。
・SDGsは17個の目標に大きく分けることができるが、世の中で起きていることの因果関係を探っていくと、複数のGoalを融合していることがほとんどだと感じている。 世の中の問題を解決するためには広い視野から考えることが必要不可欠であると考える。そのため、SDGsの目標の実践に取り組むことでその結果の良し悪しはさておき、社会に出て本格的に問題を解決する側に立った際に必要になる、様々な観点から物事を考える力を十分に鍛えることが可能であると考える。
・自分の将来の目標であるインフラ関係の職業にSDGsは深いかかわりを持っているため、実践経験を得ることで社会人になった際にその知識と経験を活かせると思った。
・SDGsの実態や、その活動に対して、自分自身がどう社会と向き合っていくべきかを考えられる力を付けられるのではないかと思っています。
・自分も社会の一員であるという意識を持ち行動に移すことで、周りに目を向けられる人間になると思います。
・SDGsの目標を知るだけでも、日常の生活の中で気に留めることが多くなり、その気付きや関心が行動に繋がると思います。
・何か目標を決めてそれに向けて実践することは、成功or失敗に関わらず、良い経験になると思ったから。また、実践するためにはそれまでの思考の過程があると思うので、それがまた、身の回りの様々なことを考え直す良いきっかけになると思うから。
・SDGsにおける目標を実践するには、現状として起こっている諸問題を的確に認識し、考察し、意見交換やワークを通じて行動のベースを作るという一連のフローが不可欠かと思います。その過程で認識力、言語力、考察力、行動力の増強に繋がるのではないかと考えています。
さまざまな考えを取り入れることができる
・実際に自分たちで考えてSDGsの目標の実践をすることで、受け身だけの時では気づかなかった新たな発見があると思うから。
・世界各国でどのようなことが問題なのか学ぶことで世界の状況を知り、その問題に対して日常生活で意識することができると思ったからです。
・地球や、社会全体の問題について考えることで、本当に自分のやりたいことや、自分の意思を再確認することができると思うから。
・環境問題や、平等などの問題はまずはその問題に対する知識を得ることが必要であり、その知識を行動に移すことで自分化して考えることができると考えています。自分化して考えることで自分自身の在り方を考えることができるのではないかと考えています。

受講後

・SDGsの目標はどれも容易に達成できるものではないからこそ、努力が必要。そして、それは1人だけの努力ではなく、社会全体で協力し動き出す必要があるため、自分がSDGsに対する行動によって、四苦八苦しながらも、変化をもたらせた時、成長が実感できると思う。
・普段生きている中で、深くかかわらないものであるから。なので、授業を受けたことで、SDGsに対する理解度も上がり、より社会をよりよくするためにはどうしたらよいか考えるようになったから。
・SDGsについて学ぶことで知識を得られる点、同じ志を持っている人同士で集まってイベントに参加したり企画したりすることで新たな知見や発見を得られる点。
・目標を何かに向かって行動できるということ。SDGsは目的ではなく、手段であり、そのコミュニケーションツールとを使いながら、いかに社会に貢献できるかを考えられるようになった。
・SDGsを実践することで、自身の人生の充実感につながると思う。先日アイサーチの講師の方の講義を受けた後、その団体が主催するビーチクリーンのボランティアに参加した際に、人との交流があることが実践の大きな魅力だと感じた。そこからさらに別のボランティアに一緒に参加してみようなど輪が次第に大きくなり、SDGsの達成だけではなく、自身の充実感も満たされていくのを感じることができた。
・学生のうちから考えておくことで、将来の行動変容につながるという点
・社会問題を自分事に捉え、自身からできることを自ら進んで始めるようになる。
・「質の高い教育をみんなに」という目標に関連して私がこれまで行ってきたことは、教育系NPOでのインターンや海外の子どもたちに学びを届ける海外研修である。これらの実践を通じて、主に3点で成長できた。1点目に日本や海外の子どもたちがどのような学習状況なのか、どのような子どもたちなのかを知ることができたことである。2点目に多様な子どもたちと関わる中でコミュニケーション能力が向上したことである。3点目に、どのようなアクションでも共通するが、自らの意思で挑戦して「うまくいった」「挑戦して良かった」という成功体験を積めたことである。
・SDGsの目標の実践をする事でこの社会で生きる人間としての責任をもてるようになり、なんとなく生きる状態から脱し、自ら考える力、人に伝える為に言語化する力、行動力などが養う事が出来ると考える。
・日本や世界の現状を知り、改善案などを考える力がつく点。
・SDGsの問題を自分ごととして考え、取り組むことで自分の考え方やSDGsの活動を通して知り合った仲間とパートナーシップを築くことができる点で成長できると思う。
・地球にやさしい生活がおくれるようになること。

・平和で不自由も無く、安全・安心に暮らせる日本で生活しているだけだと気付けない多くの問題が世界には沢山あるということ、日本のような国の方が世界全体でみると少ないということを改めて知ることができる。また、どうすればそのような問題を解決できるか考えるきっかけに繋がり、実行することで社会をより良く、自身も成長できると考える。
・より良い社会づくりを目指すために11は必要不可欠であるから
・地球にやさしい生活を自分なりに実行していくことで、後々無駄のない生活ができるようになると考えたから。
・SDGsの目標達成のために周りの人と協力して取り組むことで協調性や主体性を身につけることができると考えています。
・SDGsに対するアクションには複雑な課題を的確に洗い出し、考察して行動を起こすことが必要不可欠である。そのためまず課題発見力、考察力、行動力といった点が成長すると思う。また、考えや行動を周りに広めていこうとする発信力、パートナーシップを持って課題に取り組むパートナーシップ力の成長も期待できると考えている。そしてなにより、SDGsの達成のために必要なパートナーシップやアクションの根源として重要な、何事も自分と関連付けて捉える「自分ごと」の意識の成長が期待できると考えている。
・消費するだけの現状を変えようとすることで、社会の一員にとしての自覚を芽生え、先のことまで見通す力を養うことができると考えるため。
・SDGsの目標達成のために行動することで、課題解決のために自分で考える力や、実行力、広い視野をもって物事を見れるようになると思う。
・世界の問題を知ることで世界への関心につながり、自分が恵まれていることの大切さを知ることが出来る。実施することで、行動力向上にも繋がる。
・自分勝手に行動するのではなく、社会を考えて環境に良いものを選ぶことでより環境について考えるようになる。
・多くの人の価値観を学ぶことができ、それに感銘を受けたりして自分の心も豊かにできると考えいる。

1.13　あなたは、SDGsの目標の実践を通じ、仲間たちと連携しながら社会に貢献しようと考えていますか。（考えていない）1←3—5→7（考えている）（選択必須）

受講前

(考えていない)1←3—5→7(考えている)	回答
1	0
2	1
3	3
4	7
5	9
6	5
7	6
	31

受講後

(考えていない)1←3—5→7(考えている)	回答
1	0
2	1
3	1
4	5
5	6
6	6
7	8
	27

1.14　あなたは、SDGsの目標の実践に際して、仲間たちと連携しながら社会に貢献していますか。（していない）1←3—5→7（している）（選択必須）

受講前

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	10
2	10
3	3
4	2
5	2
6	2
7	2
	31

受講後

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	2
2	2
3	7
4	4
5	9
6	0
7	3
	27

1.15　設問13と14のいずれかで、SDGsの目標の実践を通じ、仲間たちと連携しながら社会に貢献しようとしている、あるいは、既に貢献していると回答した人（５～７のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのような貢献をしようと、あるいは、既に貢献をしていますか。自由に記述してください。

受講前

・差別問題について仲間と議論し、そこで出たユニークな着眼点を世の中に発信し、より多くの人がその問題を知ることで差別というものが社会に伝わる。直接差別問題に大きなけ影響を与えることは難しいが、一人でも多くの人がこの問題に気づくことで今までとは違う思考を持ち、行動できるのではないかと考える。
・SDGsに関連したアプリを作るビジネスコンテストに参加しています。まだ考えはまとまっていませんが10月下旬に選考がある予定です。
・SDGsアンバサダーとして企画の参画のみならず、実際外部と連携したフィリピンの若者とSDGsアクションに学生リーダーとして関わらせてもらったりしている。海外と連携してSDGsを考える活動も経験している。確実に歩み始めている。
・自分1人でできるような課題であっても、あえて仲間を巻き込んだり、仕事を任せたりすることで、周りの人が少しでもSDGsに関心を持てるように意識している。
・大学の企画のフィリピンボランティアで学んだことを、友達に話したりしたことで、学びに貢献した。
・例えば、海のゴミ拾いを実際に自分達の手で取り組み、そこから学べることを次にどのように発展、繋げられるか考え合い、まだ知らない人に発信出来るようにしたい。
・SDGsとも関連しているボランティア活動を通じて、仲間たちとともに社会貢献ができていると考えています。ボランティア活動は所属しているサークルの活動やボランティア支援室が実施している活動に参加してきました。これまでの活動としては、お祭りの運営ボランティア、プレーパークの運営ボランティア、ゴミ拾い、キャンパスツアーのガイドなどを行ってきました。お祭りやプレーパークの運営ボランティアは、「11:住み続けられるまちづくりを」に関連する活動だと考えています。また、プレーパークは遊びを通じて子どもたちの自主性や冒険心を伸ばしたり、大人と出会い肯定してもらうという経験をすることで自己肯定感を高めたりすることができる場所なので、そういった意味で「4:質の高い教育をみんなに」にも繋がるところがあるのではないかと考えます。ゴミ拾いは、「11:住み続けられるまちづくりを」「14:海の豊かさを守ろう」「15:陸の豊かさも守ろう」などに繋がる活動だと考え、公園や河川敷でのゴミ拾いを実施してきました。高校生向けキャンパスツアーのガイドも「4:質の高い教育をみんなに」と関連する活動だと考えます。

・私はジェンダー平等に興味があるので、不平等な扱いを受けることなく生きていける社会づくりに貢献したいと考えている。現在LGBTGの人々は肩身の狭い思いをして、生活に不便もあると思う。また女性は家庭に入り男性が仕事に出向く、社会的風潮があまりにも定着し過ぎているため、性別役割分業が進んでいるのも、私は違和感を感じる。そういった自分の中にある感覚や感じていることを元に貢献できることを探していきたいと思っている。
・SDGsの目標の達成に少しでも関わる貢献をしたいと考えています。
・NPO法人チームクジラ号さんの深海のプラスチックごみについての小学生向けのイベントがあり、そのお手伝いに行った際、実験中の子供の『なぜ?』に対し一緒に考え学び時にアドバイスを送ることができ今後SDGsを学び始める子供たちに少しでも楽しんでもらえたのではないかと思っているため既に貢献できたといえる。
・この講座に参加しているからには、「SDGsの目標の実践を通じ、仲間たちと連携しながら社会に貢献しようとしている」のスタート地点には立てており、実際に個人で心掛けていることもあるため、貢献しようとしていると言えると考える。 しかし、具体的に貢献してることが自信をもって言えることがないため、説明でもあったように今後SDGsに関連するイベントに参加していきたい。
・やっぱり一人だと自分に何ができるかわからないし、同じようにSDGsに興味を持っている人たちと意見の交換とかしながら活動できたらいいなと思います。
・高校3年生の夏休みにボランティアプラットフォームという団体のオンラインSDGs 研修に参加して、SDGsの17の目標1つ1つについて学び、自分に何ができるのかを考えました。また、オンライン上でカンボジアの子どもと話したり、日本語や日本の文化を教えました。
・現時点では、これといった実践は思いつかないが、せっかくこの講義を受講したからには、グループで意見を出し合い、数ある目標の中から何をどのように取り組んでいくのが良いかを熟考した後に実践していきたい。
・知識がない中でSDGsの目標の実践のための行動を行うことは難しいので、大学生が参加できる様々なボランティアに参加し、実際に行動を起こす上で知識を得たいと考えています。
・1人では成し遂げられないことなので、関心のある人と一緒に取り組みたい。
・いま参加しているビジコンのチームで開発途中のアプリが実際に世間で活用される日が来れば、食品ロス問題を少しでも良い方向へと前進させ、社会に貢献できると思う。
・SDGsに関するボランティア活動などに積極的に参加して、社会に貢献したいです。

受講後

・SDGsについて、この講義で学んだことや知ることのできた現状を他者に伝えたり、発信すること。そして、その課題に向かって、自分達にできることを実行する。
・SDGsアンバサダーになって主体的に目標実践に携わりたいです。
・まだまだ未熟ではあるが、自分だけではなく、仲間のSDGsに対する取り組みも応援し、サポートし、実践に向かって一緒に取り組んでいくことを大切にするだけでも十分に意味があると思う。
・ボランティアやワークショップなどを通して、一度つながった人とその場限りで終わらせないようにすることを意識し実践している。一度知り合った人とは連絡を取り続け、相手に自分の名前を覚えてもらえるようにして、自分からも次のボランティアなどのイベントに誘うようにしている。私の場合、湯河原での活動をSDGsアンバサダーやその他の団体、個人に向けて、知り合った人に紹介し、魅力を発信し続けている。
・授業内で提案した要望書の提出など、給水機の件で大学に提案をしたことは一種の社会貢献なのではないかと考えています。
・海岸のゴミ拾い、フードバンク、リサイクルショップに使わなくなった物を出す
・4月から小売業の会社に勤めるため、仲間(同僚)と連携して、地域のお客様の生活を支えていくという点で社会貢献をしていきたいと考えている。
・アルバイト先での産業廃棄物削減への提案をするにあたり、「もったいない」という意識を持っていなかったバイト仲間に意識を持ってもらい、後ろ盾してもらった。今後は自分自身が当たり前に実践を日常生活の中で行う事で少しずつ周囲の人間の当たり前にし、同じ疑問を持ってもらい仲間を広げていきたいと考える。
・ボランティア活動をしたり、SDGsを仲間に伝える活動をしたいと考えている。
・SDGsアンバサダーでの活動を通して、アンバサダーの仲間とSDGs目標の達成に関わる活動をし、貢献をしようと取り組んでいる。
・まずはSDG14「海の豊かさを守ろう」に着目して、ウォーターサーバー(注ぐタイプ)の設置、SDGsポイント制度の導入、空のペットボトル回収時の返金制度を実現させたいと考えている。
・自分たちの考えを述べ、まだ行動に移せていないのでアンバサダーになったり、今度の救助活動の講習などで行動で示していきたい
・ゴミの分別を意識する。また、プラスチック製品をなるべく使わず紙製品に移行したり、マイボトルを持ち歩いたりしている。
・SDGsに対して、本講座で培った見解や経験等を自分だけのものとするのではなく周りに広げていくためという意味合いも込めてアクションを起こそうと考えている。そのためSDGsアンバサダーやウォーターエイド・スピーカークラブを通して、ただSDGsを紹介するのではなく、誰もが自分も何か行動を起こしてみたい、と心から思えるように情報発信していこうと計画している。
友人も一緒にボランティア活動を探して、実際に参加している。
・町のゴミ拾いに参加した。
・ジェンダーのステレオタイプを打ち砕くような製品の開発をしたいと考えている。玩具を作る企業で働きたいと考えているが、玩具においてもジェンダー関係なく遊べるものが普及することでその考え方も広がるのではないかと私は考えている。

1.16　その他、何かあれば自由に記述してください。

受講前

・この講義を非常に楽しみにしています。
・よろしくお願いいたします。
・自分の今の考え 私は現在、SDGsの目標の実践をしていると言い張れる自信がありません。このSDGs実践講座を通して、SDGsのそれぞれの目標について自分の考えや意見を言えたり、積極的にボランティア活動に参加して、SDGsの目標の達成に貢献したいと考えています。また、SDGsについて自分の考えを社会に強く発信できるような人になりたいと思っています。
・よろしくお願いいたします。
・SDGsの中身を知るために、この講義を履修させていただいたので、とても楽しみにしています。
・私が関心を持っているジェンダー平等の実現は、一人一人の心に訴えることが目標達成に繋がると思うので、行動に起こすことが他の目標に比べて難しいと思いますが、私が主観的に見てジェンダー平等を実現させているこの東洋大学で、具体的な解決方法を探っていこうと思います。
・SDGsの到達目標がこれだけある中で、今僕たちが身近に始められることは何かをこの講義を通して学び、実践に移していけるように頑張りたい。
・SDGsに関心はあれど、今はまだ持つ知識が少なすぎることから、本講義を受けてこれからSDGsにどう関わり、そのためにどう行動できるのかを考えられるようになりたいと思います。 その上で、SDGsそのものが社会にどう影響を与えるのかを含めじっくりと考察しながら受講したいと思います。
・広い視野で良いシステム開発をしていけるよう、この講義でインプットとアウトプットを同時に行い、多くのことを学んでいきたいです。

受講後

・私は、持続可能な社会に向けて、世界が変わるベストなタイミングは、今であると思う。これまで蓄積してきた環境問題や労働問題、人権問題、様々な課題を少しでも減らしていかなくては、この世界は続かなければ、発展も見込めない。だからこそ、日本は先進国として他の国をリードしていける存在になってほしいし、そのためにも日本の今ある課題から、私たち国民も目を逸らさず、向き合わなくてはならないのである。
・アンバサダーとして来年もやらせていただくつもりです。この講座で見つけた仲間とぜひ一緒に何かに取り組みたいと考えております。初めての講座でしたが、とても充実していたものであったと感じております。勧誘含めて頑張っていきたいと考えております。
・15回の講義を通じて、自分の本当に取り組みたかったSDGsの活動を知ることができました。まさに私は17番目のゴールである「パートナーシップ」という言葉をキーワードに、人と人をつなげ、誰もがやりたいことをやれる場所、機会の創出という活動がしたいということがわかりました。それによって、今後の就職活動や残りの大学生活の具体的なプランを立てることができ、自分の人生にとても大きな影響を与えた講座だったと思います。 これからは、ここで出会った仲間と関係を終わらせるのではなく、最終プレゼンで発表した、それぞれのプランをみんなで取り組んでいけたらよいと思います。 約半年間ありがとうございました。
・半年間ありがとうございました。SDGsについて詳しくなることができました。将来の行動変容につなげたいと思います。
・学びのある講座をありがとうございました。学生最後に大学生らしい(=真剣に講義を聞く、ディスカッションをする、発表をする、レポートを書く)授業を取りたいと思い、見つけたのがこの講座でした。ありがとうございました。
・全15回を通し、とてもよい勉強の機会になりました。ありがとうございました。
・特になし。
・本講座でSDGsがどういったものかを理解しただけでなく、SDGsに対する自分の考えを持つことができたと感じている。特に自分ごとの意識、パートナーシップの大切さについては周りに発信していきたいと思い、実際にSDGsアンバサダーへの参加などを真剣に検討している自分に対して正直驚きを隠すことができない。ただ、SDGsに正解はなく、地球規模で自然や社会、経済の捉え方なども常に変化しているような環境なので、SDGsに対する考察や学びを止めることがないように強く意識しなければならないと一層強く感じている。また、SDGsが社会にもたらす効果や影響に対しても考察や学びを蔑ろにしないように注意していきたいと考えている。

SDGs 実践講座

最終レポート

①～㉛

SDGs 実践講座最終レポート①

私は今回の SDGs 講座を受けて、自身の大きな学びになったと考えています。今回の講義では『SDGs について、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学び、さらに、この学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に変化させて行く」ことで、在学中、あるいは卒業後に国内外の社会で活躍できる人材に成長する』ことが目標になっていました。私が SDGs に興味を持ったきっかけは、２年生の時に受講した小瀬先生の環境情報学の基礎でした。当時 SDGs について全く知識がなかった私は、授業を通して世界で起こっている環境問題や今後クリアにしていかなければいけない国際課題を知り、それらについて理解を深める必要があると思いました。そんな中で当講座に出会い、チャンスとして各ゴールに対する取り組みを積極的に「自分ごと」として捉えるよう努力できたように思います。また、SDGs に関連するボランティア活動に参加することで、一人一人が問題解決への意識を持ちながら、小さなことから活動に参加することの重要性を知りました。一方で一つ残念な点が、オンラインと対面のハイブリット授業ということで、オンラインの生徒が対面での授業に参加しきれなかったところです。オンライン受講者が対面受講者に比べて密なコミュニケーションを取りづらかったり、グループワークの輪に入れない事があったりしました。対面で授業を行いながらなので難しい部分ではあるものの、オンライン受講者の教室を設け、その中で対面でのグループワークを行うなど、改善できる点があると思いました。
私が最も心に残った授業回は「世界と日本の子供の貧困について考えよう」の回です。正直、受講前は世界の発展途上国でのみの問題であり、先進国は支援の側に回るだけで先進国内にはあまり関係のない問題であると思っていました。しかし、絶対的貧困の問題のほかに、先進国内での相対的貧困の問題にもフォーカスする必要があることを知りました。普段世間で目につくのは絶対的貧困に関することで、自身ができることは募金などの取り組みなど小さなことしかなく、同じ地球での問題でありながら「日常生活では縁遠い問題だ」と自分ごとにできていませんでした。しかし、先進国での問題として国内の大多数よりも困窮している人々について知ることで、今まで自分がいかに無知であったかということに気づきました。特に世界の子供の貧困率を見た時、日本の子供の貧困率は OECD の平均より高く、ひとり親世帯の貧困率も約 50%と、先進国の中でも特に日本で早急に解決すべき課題であったことに衝撃を受けました。この授業から、まずは「世界の諸問題について無知のままでいるのではなく、知る努力をしよう」と思うようになり、より SDGs への意識が高まったきっかけとなりました。
また、グループ発表で取り組んだ、SDGs2.飢餓をゼロに、SDGs6.安全な水とトイレを世界中にという二項目についても理解を深めることができたと思っています。特に SDGs6 については、日本が海洋国であることから関係のない問題に見えがちですが、世界では２０億人もの人が安全に水を使えずに感染症等のリスクに苦しんでいるという深刻な状態

で、早急に改善すべき課題で、これを改善しようと低コストで取り組めるハンディポットなどの開発が盛んに行われていることを知りました。
「SDGs について知識を深めたい」と思うメンバーが集まり、授業内で学んだことのみでなく、その他にどのような取り組みがなされているのか、今後自分たちができる取り組みはなんなのかをブラッシュアップしていくという経験はとても貴重だったと思います。今まで学生生活を送る中で、グループワークはほとんど経験した事がなくたまに行う授業内での小さなもの程度だったため、今回のグループワークを通して、大きな世界での課題に向けてできる取り組みを、時間をかけて話し合っていくことの重要性を知る事ができました。
私は現在 3 年生で就職活動をしています。企業研究をする中で企業選びの項目の一つとして「企業が行なっている SDGs への取り組みについて」です。その企業が社会問題の解決をする意思があるのか、あるとしたら SDGs のどの項目でどのような解決・貢献をしていきたいのかを、各項目への取り組みから知ることができます。それらを知ることで、自身がその企業に入って SDGs に対してどう携わっていけるのかを具体的に考えることができます。1 人で意識して変えることが出来ることは少ないですが、企業の単位で行うことで活動の幅が広がり、解決に近づくのではないかと考えました。また、日常生活の中で生活排水を減らす努力をしたり、フェアトレード認証を受けている商品を選択する、性に関してフラットな視点を持って人に接するよう心がけるなど、1 人でも出来る SDGs への取り組みもたくさんあります。日々そういった小さな心がけをすることで、今授業での学びを少しでも活かしていけたらと思います。

SDGs 実践講座最終レポート②

１）全体の概要

この講義を受けて、SDGs について考える機会は今までに何度もあったものの、それを自分事化し、実践まで結びつけようとする機会はあまりなかったように感じた。小学生の頃、小学校の授業や塾で勉強する中で、ごみ問題や海洋汚染について考える機会はあったが、どこか自分には関係ない、自分にはどうにもできないことだと思ってしまっていた。しかし、この講義を受けて、自分自身に出来ることは少なく、その小さな影響力では世界の様々な問題を解決することができないとしても、ひとりひとりが社会問題に対して何ができるかを考え、小さなことでも実践しようとすることが重要であることを学ぶことができた。

そのため、この講義には期待以上のものを得ることができたと考えている。SDGs に関して興味はあったものの、それを自分事として考え、何か実践することに意味を見出せなかったが、それを考える機会を与えてもらい、実際のボランティア活動を通して、その意味を理解できたことを大変うれしく思う。

２）心に残った授業回

私は内田先生の「第 10 回　ジェンダーギャップと学校―ジェンダーギャップを解消するために自分にできることとはー」という講義が最も印象に残った。もともと、ジェンダーやセクシャリティについて興味があり、この講義も心待ちにしていた。その中でセクシュアルマイノリティや両性具備、人間の性はグラデーションであることなど多くのことを知ることができた。このような知識は他人を差別的な目で見ないためにも、偏見を持たずに他人と接する上でも大事なことであると感じた。

ジェンダーステレオタイプをテーマとしたグループディスカッションでは、自分自身を過去にジェンダーステレオタイプを感じるような経験が多いことに気づいた。これからもし、子供を産んだり、小さい子供と関わったりするような機会があれば、このようなステレオタイプを押し付けないよう、正しい知識と様々な価値観を受け入れられるようになりたいと考えた。

ミニレポートにおいて「ジェンダー平等」という言葉を聞くと、男女は一緒であるべきと考えがちになって染むが、「男性」「女性」というジェンダー・セクシャリティに誇りを持つことも多様性の一部であるということを忘れないようにしたいと書いた。そして、それに対して内田先生から「各人に相違点が存在するという多様性を前提として受け入れなければならない。そして、本質的な点に目を向け、実質的な意味での平等とはどういうことかを考える必要がある。」と返答をいただいた。以前から私は、多様性の受け止め方に対して難しさを感じていたが、それに対するアドバイスを頂けることができたと考えている。ジェンダーギャップやセクシャリティについては Twitter などで多くの多様な意見が飛び交っており、中には受容し難い意見もあるが、それらも踏まえて多様性であり、その中で自分はどう

していくのか、さらに多くの知識や経験を得て、考えていかなければならないと考えている。
　また、アイサーチジャパンが行った「第 12 回　海の豊かさを守ろう」という講義も非常に印象に残っている。特に海の豊かさはごみ問題やジェンダー平等にもつながるという話が心に残っている。SDGs の実現を考える中で、それぞれの目標が他の目標に関わっているということを失念してしまっていることに気が付いた。私が最も興味のあるジェンダー平等を叶えるうえでも他の目標を達成することで本来の目標の達成に近づくのではないかなど、幅広い視点を持つことが大事であると考えるようになった。

３）身についたこと
　今回の SDGs 実践講座全体を通して、グループディスカッションの重要性を考えることもできた。最終発表で「パートナーシップで目標を達成しよう」のグループも述べていたが、社会問題や環境問題など大きなことを考えるうえで、自分一人で自分自身に出来ることを考えるだけでは、偏った考えになってしまったり、見解が狭く、アイデアが浮かばないことがあったりすることに気が付いた。今回の講義を通して、何かの知識を得たり、何かを考えたりする際には、周りの人と意見を交換し合ったり、専門的に学んでいる人の意見を取り入れたりすることが重要であると学んだ。
　また、SDGs 関連イベントの紹介で「コスメバンクプロジェクト　封入ボランティア」に参加したが、そこでも学ぶことが多くあった。学生の貧困問題や就職活動・労働の場面における化粧に関するジェンダーギャップなどについて考えることができた。ここでも普段関わることのなかった白山キャンパスの学生とそれらのテーマについて意見を交換し合うことができ、有意義な時間になった。

４）これからどう活かすか
　これからも他の人と意見を交換し合いながら考え抜く、そして小さくても何かできることから実践していくことを大事にしようと考えている。例えば、「ジェンダー平等」という言葉の意味についてこの講義でヒントをいただけたが、そのことを念頭にさらに多くの人の意見を聞きながら自分にできることを探っていこうと考える。
　また、他の学生のアグレッシブさにも感銘を受けた。私も自分からボランティアなどに積極的に参加し、常に自分にできることを実践し続けようと考えている。

SDGs 実践講座最終レポート③

SDGs の多くのことを学びました。各国には真似したい点や、解決すべき問題が多くあると思いました。それを、世界中の国々が良い点は真似しあって、悪い点は他の国の良い点から解決策を探すなど世界中が協力していかなければ何も解決しないのだとわかりました。SDGs の各項目は、一つ一つの項目が孤立しているのではなくて、全てが繋がっていることも分かりました。貧困、環境問題、ジェンダー、教育全てを解決し無ければ、何も達成は出来ないと思いました。SDGs について、他の人よりは、知識を深められたことが良かったと思います。自分の中で、世界中が SDGs と唱えているのにそれについてなんの知識もないことに焦りを感じていました。だから、一つ自分の中で学びを深められたのが嬉しく思いました。自分たちの発表では、自分たちが気になっていたこと、変えたいことをしっかり伝えられたと思います。私は、住み続けられる街づくりをという項目だったのですが、発表に向けて沢山のことを調べ、知らなかったことなどが多く、調べている過程でたくさんのことを知りました。また、他のグループの発表でも、ほかの項目について現状や、各班が考えた問題点についてのアクションプランを聞いて、自分が考えもしなかったアイディアなどを知れて、発想力や創造力の豊かさに驚くことが多かったです。私は、発表の際、とても緊張をしてしまったのですが、周りの方達は堂々と発表していて見習いたい所ばかりでした。先生方も、緊張感を見せるより、堂々と自信を持って発表している方のほうが説得力があると仰っていましたが、私もそう感じました。

SDGs の各回の授業をうけてみて、私の心に特に残った授業回は、3 回目の貧困の回です。この授業で、貧困のせいで、貧困によって、発展途上国は、先進国のようにはなれなかったり、十分な教育を受けられないなど、様々なものに繋がっているのだと知りました。貧困地域というと、南アフリカの地域が主に多いのかと思いましたが、中国やインド、バングラデシュなどアジア圏にもあり、人口が多い地域に多いという事実も初めて知りました。日本では、新型コロナウイルスによるもので、経済的打撃をうけ、様々な会社が倒産したり、不景気な状況になりました。それでも、新型コロナウイルスなどとは、関係なしに貧困地域はずっと貧困な状況で、コロナで打撃を受けた日本より圧倒的にコロナ前からの発展途上国のほうが貧困な事はとても深刻な状況なのだと思いました。一刻も早く貧困地域をなくしていきたいと感じました。2030 年までに貧困は無くすという目標がありますが、この授業で現在の貧困地域の状況を知って、難しいと思いました。SDGs のほかの項目の目標も達成出来ていないからです。だから、貧困の項目も難しいはずです。対策もたくさん考えても、デメリットもあるので、簡単には出来ないからです。マイクロファイナスという考えがありましたが、貧困層は、ビジネスを始める余裕がないということ、ビジネスを始めるには、知識がないと難しいため、十分な教育が受けられる環境にいないと厳しい、返済できない可能性があるなどのデメリットがあるので対策考えるにも苦労しました。私たち先進国の人々が少ないお金でも地道に募金すれば高額になるため少ないお金から募金していくこと、そし

て世界中の政府がお金を出したりして協力して行かなければ、達成は難しく、貧困のままの可能性があると思いました。このような深刻な問題を今まで私はなんとなくしか知らず、自分の国が平和で恵まれているのかも知りました。どの項目もそうですが、まずは、何事も知ってもらうのが解決の 1 歩になっていくのだと考えました。

身についたこととして、SDGs について、あまり知識がなかった為、学びたいと思い、今回、授業を履修させていただきました。元々、グループワークは得意ではなく、自分で何かを考えて発言することが苦手だったので、初回はとても緊張しました。ですが、自分がよく考えて発言したことをみんなで考えたり、共感してくれたり、違う考え方もあるのだと分かったりすることが、今までグループワークをなるべくしないように避けてきた私にとってとても新しく、グループワークの楽しさや、様々な人と意見交換ができ、創造力を養えるという発見ができました。グループワークが苦手でそれを克服したいということと、SDGs について学びたいというために履修した授業でもありましたが、自分で考えて、発言する力が身についたと共に、世界の現状、日本がいかに恵まれているかを知り、自分の行動を見つめ直す機会にもなりました。ポイ捨てを見ると、自分で拾ってゴミ箱に捨てるようになったり、履修前よりも確実に環境に対しての意識が高まりました。貧困や、環境問題についても現在の世界の現状を知ることができ、危機感も感じられ日々の行動で意識していきたいと思いました。

自分のグループで、住み続けられる街づくりをという項目を調べる際に、自分が行ったボランティア活動や、スタディツアーの参加が役に立ち、良かったと思いました。実際、私は SDGs の授業からボランティアをいくつかするようになりました。授業が終わったから、もうボランティアをしないのではなく、授業から学んだことが多くあるからそれを活かすためにボランティアが出来るといいです。学んだことを活かし、フードロスや募金、節約等多くの自分が出来ることから積極的に行っていきたいです。また、この授業から得た知識を家族や友人に広めて、この現状を知ってもらうことから始めていきたいです。

SDGs 実践講座最終レポート④

この講義を受講して、現在の SDGs の達成度や、発生している問題、それに対する解決策を知ることができた。また、それらを自ら考え、グループワークでメンバーと共有し、意見交換をすることで自分とは違う視点の考え方を学ぶことができた。

中でも心に残った授業は第 2 回の NPO の講師が来てくださった回である。この授業では「世界がもし 100 人の村だったら」という文章を読みそれについて考え意見を交わしあった。私はこの授業で初めてこの文章を読んだ。内容は世界の人口が 100 人であっても宗教や言語は様々であること。また、富や教育、住居の不平等はとても不平等であることが書かれている。そして最後にはこの文章を読めることや、深々と歌いのびやかに踊れることの幸せさ、そして愛することできっと村を救うことができるという希望が書かれている。私はこの文章を読み、世界には直接見えないだけで多様な人がいること、そして私はとても恵まれていることを知った。今まで私は旅行や大学受験などの際に自分は恵まれていると感じていた。しかし、この文章には文字が読めることや、歌えること、踊れること、それこそ幸せなことであると書かれている。このような私にとって当たり前であり身近なことが他の人から見て幸せなことであるということを知った。今まで大切にしてこなかった当たり前を自ら意識し、大切にしていきたい。また、この文章には不平等について多く書かれている。まず始めは栄養についてである。村に住む 100 人のうち 14 人は栄養が十分ではく 14 人は太りすぎ、とある。食料を 100 人で均等に分けることで全員が平等に栄養を得ることができるはずである。しかし、富のある人や立場の強い人々がそうでない人の分を食べてしまう、余分に食料を用意し食べきれない分を廃棄するなどの理由により均等に食料を分けることができなくなる。これによってこのような栄養の不平等が生まれるのだろう。また、現代でも食品ロスが問題となっている。食品ロスをなくし、平等に分配することで世界の飢餓人口を減らすことができるであろう。他にも、1 人がすべての富の 40%を持っていて、49 人が 59%を、50 人が 1 %を分け合っているなど、富やエネルギー、食べ物、住居についても同じ様な不平等がある。村人がいてそれを治める人がいる。また、そこにある会社内でも社員がいて社長がいる。このように、人がいる限り上下関係が生まれてしまう。これによりあらゆる貧富の差ができるのだろう。しかし、これは仕方のないことであると思う。もし、自分がその村の中で裕福であると思うのであればそうでない人にお金や食料を寄付することが大切であるだろう。私は宝くじがこの貧富の差に対して良い効果を与えると考える。宝くじは収益のうち約 40%を全国都道府県の公共事業等に使っている。経済的に余裕のある人々がゲーム感覚で宝くじを買い、その収益の一部を食堂や井戸を作る費用に回す。これにより、寄付している感覚なくお金を集め、貧富の差を解消することができるのではないだろうか。宝くじは当選する可能性があることや、寄付している感覚がないことによって一人の人に何度も宝くじを買ってもらうことができることが利点である。このようにゲーム感覚でお金になるビジネス政策が必要であると思う。そして、「世界がもし 100 人の村だったら」の

最後にある、愛することでこの村を救えるという文章に共感する。私たちには個々の性格があり、気の合う人と合わない人がいる。それだけでなく、物理的にもすべての人を愛することはできない。そのため、私自身と私の身の回りの人を愛することが大切である。それによって村全体を愛することができるだろう。今いる家族や友人を大切にし、新たなる良い人間関係を築いていきたいと思う。また、この授業でのグループワーク内で自分が一番心に残った文章を発表しあった。その時、グループ 5 人全員が違う個所を挙げておりとても驚いた。村は 100 人でなくてこのグループのように 5 人だけであっても一人一人個性があり、とても多様性であると感じた。

この講義 15 回全体を通して SDGs の様々な問題や、それを解決することの難しさを知った。SDGs の問題はトレードオフの関係になっており、すべてを解決するのはとても困難であることや、私たちはお金を寄付することで自分ができないような活動にも参加することができるということを知り、自分ではできないからと言ってみて見ぬふりをしてはいけないと思った。また、グループワークで他の人の考えを聞き、みんなで考えることの有意義さを知った。最近はスーパーでビニール袋を購入せずにエコバックを持って歩くことが身についた。これからも使う責任を考えて環境に良い生活を心がけていきたい。また、私は Webex を通じて授業に参加していたため、音声に障害がありとても大変だった。しかし、大学の環境を変えることはできない為、私が適応していく必要があった。この経験から、ウェブで話し合いや会議をする際に考慮すべきことを学んだ。授業で学んだこれらの知識や体験を忘れないように大切に今後の活動に生かしていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑤

半年間 SDGs 実践講座を受講して、SDGs17 の取り組みを「自分ごと」として捉える力や様々な視点が身につき、グループでの活動を通して、私たちが取り組めることを探し、行動に移すことができ、受講して良かったと考えられる。

この講座で一番心に残った授業回は、第１２回のアイサーチ・ジャパンの森さんの講義だ。私のグループ６は「海の豊かさを守ろう」に興味関心の高い人が集まっていたこともあり、心に響くものが大きかった。イルカがゴミで遊んでいる、クジラなど魚のお腹の中にプラスチックが見つかり、プラスチックを誤って食べてしまっている現状を改めて目の当たりにして、この状況は変えなければならないと考えられた。日常の中に置き換えて海洋プラスチックをなくすために、どんなに小さなことでも行動を起こすことが、意味があると学んだ。森さんはイルカ・クジラが住む海を守りたいという気持ちから、6 歳で初めてゴミ拾いをし、35 歳の今までさまざまな活動に取り組んできた。この森さんの今までの活動や考え方を知り、私も海を守りたいという気持ちが強くなった。また、SDGs14「海の豊かさを守ろう」は SDGs15「陸の豊かさを守ろう」などにも関係しているとおっしゃっていて、SDGs17 の目標はつながっているのだと気づかされ、海を守るための活動は陸の豊かさを守る活動にもつながっているのだと新たな発見だった。そして、この講義を踏まえ、グループワークで話し合い、やはり海の豊かさを守るために１番解決が必要なのは、プラスチックごみの削減だと意見がまとまった。特にマイクロプラスチック問題解決に向けて、日常生活で私たちに出来ることは何か？議論した結果、１番取り組みやすいのはペットボトルの使用を控え、水筒を持参することだという意見が出た。それと同時に、東洋大学には使用禁止となっている口をつけて水を飲むタイプであるウォータークーラー（冷水器）があることに着目した。私たちはいつでもどこでも自動販売機やコンビニなどでペットボトルを購入することができるが、同時にこれらのペットボトルは飲み終わったら、埋め立て地や海に捨てられている。このウォータークーラーを水筒への補充のみに用途を限定し、使用再開できれば、ペットボトル消費量を削減できるのではないかと考えた。これをグループで要望書を書き、大学に提出した。提案が通るかは分からないが、今後の取り組みへの第一歩となったため、SDGs17 実践講座を受講し、行動を起こすことができて良かったと考えられる。そして、今後の取り組みとして、ウォーターサーバー設置に向けて取り組むことができると考えられる。ペットボトルを使わないために水筒を持ち歩いても、中身を飲み切ってしまえば、また自動販売機やコンビニで買うしかない。給水可能な口をつけないタイプであるウォーターサーバーを設置することで、ペットボトル消費量を削減できるだけでなく、マイボトルを持つことを推奨できる。大学内には水筒よりペットボトルを購入して飲んでいる方が多くみられるが、ウォーターサーバーを設置することで、マイボトルを使う環境が当たり前になることで、使う人が増え、ペットボトル削減に向けた大きな解決策になるのではないかと考えられる。また、海外では TAP という給水スポットを検索できるアプリが使われている現状、日本でも給水スポットを探すアプリやマップがあることから、プラスチック削減に向けて、私たちにできることはあるということが分かった。そして、他大学ではすでにプラスチック削減に向けた活動が行われており、マイボトルに対応した給水機を導入している。この他大学での取り組みから、東洋大学でも導入できると考えられるため、設置実行に向けて、取り組んでいきたい。

SDGs 実践講座で、様々な学部の先生方や、外部講師の方による講義を受け、様々な視点から SDGs の問題を捉えることができるようになった。また、講義内でディスカッションの時間が設けられていたため、自分以外の人の考えを聞くことができただけでなく、その問題・課題について考える時間が多かったことで「自分ごと」として捉えることができるようになり、自分の期待した講座内容だった。また、ウォータークーラーの提案や発表に向けたグループ活動から、自分とは違った考えで意見のすれ違いがあったなか、最終的に考え・意見をまとめ、プラスチックごみ削減に向けて取り組みを提案し、発表を成功させることができたことから、他者と関わりチームとして成果を上げる力が身についたと考えられる。今回のグループ活動では、他キャンパスのメンバーもいたことや授業外での活動が多かったことで、時間を合わせて活動することは困難だったため、LINE を使って活動していたが、コミュニケーションが難しかった。他者と関わり合い、チームとして成果を上げることの大変さに気づかされた。今後は、この授業を通して始めた取り組みを、提案だけに終わらせず実現に向けて取り組みを続けていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑥

私がこの授業の開講を知ったのは夏休み中だった。既に 3 年春学期までに大半の単位を取り終え、秋学期の時間割をどう組もうか悩んでいた頃だった。「SDGs」というキーワードを生活している中で多く見聞きするようになっており、さらに 2 年次の「サステナブル・ツーリズム」や 3 年次の「Water Supply and Sanitation for Health」など、環境学関係の授業をいくつか履修し、興味を持っていたところだった。そこで、さらに環境学以外の範囲へも視野を広げ、知識を深めるためにこの実践講座を履修した。全 15 回の中では、環境学以外にも、経済学やジェンダー問題など様々な分野について学習することが出来た。今回は最終レポートということで、学びをしっかり振り返って今後に繋げていきたいと思う。

初回のマンションの修繕に関するアイスブレイクが意外と頭に残っている。当時は SDGs の何番に関連するかなど考えもしなかったが、今考えると 10 番「人や国の不平等をなくそう」にあたると考えられる。「使わないのだから一円たりとも払うつもりはない」1 階や 2 階の人の気持ちも理解できる。しかし 9 階・10 階の人だけで払うというのは負担が大きすぎるし、7 階や 8 階に住み、エレベーターを使う人にも負担してもらわないとまさに「不平等」である。修繕費を払った人だけが利用カードを持ち、そのカードをタッチしないとエレベーターが動かない仕組みをつくる、都度課金制を設ける、など様々な案が出たことを覚えているが、このように解決が一筋縄ではいかない問題が世界には多くある。何事においても全員一致での決定は難しく、多数決を選ばざるを得ないこともあるとは思うが、少数派が極端に不利益を被ることのないよう、工夫は必須となるだろう。

次に特に印象に残っているのは、第 4 回「開発途上国の生活環境改善に向けて」である。先述した「Water Supply…」と同じ北脇教授の講義であり、新たな知識の修得そして春学期の復習ともなった。我々にとっては蛇口をひねればきれいな飲み水が手に入り、簡単に下水を流せることは当たり前である。実際、日本の上水道普及率はほぼ 100%、下水道普及率も全国平均 8 割、都市部ではほぼ 100%(地方でも下水管を張り巡らせる代わりに個別の浄化槽で下水処理を行っている)である。しかし一方、発展途上国を中心に諸外国では水は遠く離れた水源まで歩いて汲みに行き、さらにその水も枯れ葉や虫が浮いているような到底きれいとは言えない水。それを飲んだり、生活用水として使ったりしており、結果多くの子どもたちが下痢や感染症で命を落としている。これは 6 番「安全な水とトイレを世界中に」はもちろんのこと、3 番「すべての人に健康と福祉を」や 11 番「住み続けられるまちづくりを」など、様々な Goal にかかわる大変重要な問題である。我々にできることとしては、現地への井戸の建設を行う団体への寄付などが挙げられるだろう。そして、安全な水がいつでも手に入ることが当たり前だと思わず、感謝をして生きることが必要だろう。

そして少し話題が変わって、第 11 回「人工知能と人間社会」も印象に残っている回の一つである。これは 9 番「産業と技術革新の基盤をつくろう」と 12 番「つくる責任 つかう

責任」に関連する。この問題は先ほどの水問題とは異なり、先進国などを中心に技術が発達したからこそ生まれた問題である。今では家電など、人工知能を搭載した商品も珍しくない。温度や人の動きなどを検知して自動で運転を制御するエアコン、周辺や前後を走るヒトやモノ(自動車)を検知して自動運転を行う自動車など、最近は JR 山手線でも ATO(自動列車運転装置)の実証実験が乗客を乗せた営業列車で行われた。このように技術が発達すると、将来的には AI によって人の仕事が奪われるとも言われており、三菱 UFJ 信託銀行のコラム(https://magazine.tr.mufg.jp/90529)によると、運転手だけでなく接客業や清掃業、調理人、警備員なども AI に取って代わられると推測されている。逆に音楽家や映画監督など創造性が問われる仕事や、医師や美容師といった細かい作業+知識やセンスが問われる仕事は無くなる可能性は低いとされており、AI 技術の発達によって人間の生き方が変わりかねなくなってきている。将来的にロボットが意思を持ち、人間と戦争になるという都市伝説があるように、技術が発達しすぎた結果、逆に我々の命を脅かす可能性が出てきている。実際にアルフレッド・ノーベルがダイナマイトをはじめ爆薬や兵器を多く開発・生産した結果、多くの人が戦争で命を落とし、「死の商人」とまで言われるようになってしまったという。地球温暖化も同様に考えられるだろう。豊かな暮らしを求めて化石燃料を燃やし続けた結果、海洋上昇などが見られるようになった。我々は賢く技術や資源を使い、未来にこの地球を引き継いでいくことも考えなければならない。

この授業を履修して以来、私は様々な SDGs 関連イベントに参加してきた。11 月には「コスメバンクプロジェクト」及び「Hands to Hands」の配布ボランティアに参加した。各所から提供された化粧品や食品などを学生に渡すだけだったが、それでも多くの学生とコミュニケーションをとる機会となった。ボランティアは社会貢献となるだけでなく、普段会わない人と会える機会でもあるのだと感じた。そして 2 月には災害救援ボランティアに参加する。この国は災害大国と呼ぶにふさわしく、地震・台風・大雨…、毎年のように何らかの自然災害が日本のどこかに大きなダメージを与えている。そんな中でも地震は近いうちに南海トラフ巨大地震が予想されるなど、備えておいて損はない。浅く広く様々な知識を学び、いざという時に少しでも周りの人の手助けができる人間でありたいと思う。

SDGs 実践講座最終レポート⑦

【全体の概要】

私は、全 15 回の講義を経て、この講義を受講して良かったと強く感じている。その理由は主に 2 つある。

1 番の理由は、講義内で仲間ができたこと、そして同じ考えをもつ仲間がいることを知ることが出来たからだ。この講義を受講すると決めたときから、私は常に一人で行動をしていて、教室内でも知人や友人は誰一人としていなかった。しかしながら、講義での活動を通して、最後の授業内でも強く協調していた「パートナーシップ」を築くことが出来たと思う。一般の講義では、他キャンパスに通う学生はもちろん、他学部・他学年の学生と交流する機会は一切設けられていない。この講義には、さまざまな学生がいる中で、学年や学部の壁を越えて意見を言い合える環境が整っていると感じた。また、講義の最終回の終盤には、教室内に SDGs アンバサダーとしてすでに活躍している学生が 3 名いると紹介されていた。毎度、学生の環境問題に対する意識の高さや知識量に刺激を受けていた私は、教室で講義を受ける学生の多くが SDGs アンバサダーであると思い込んでいたため、実際の人数を知ったときは非常に驚かされた。

２つ目の理由は、毎回異なる分野の専門的な知識を学ぶことが可能だからである。一般の講義では毎回、同じ教授が講義を担当することが多い。本講義では、SDGs の目標をまんべんなく網羅するため、他キャンパスからお越しいただいた先生方や講師の方を含め、毎回異なる分野を専門の方から学ぶことが出来た。実体験を踏まえてお話をして下さる先生方ばかりであり、興味深いお話を聞くことが出来たと感じている。

【心に残った授業回】

私にとって最も心に残った授業回は、第 8 回（2022 年 11 月 18 日）の授業である。その日は、事前に行った「どの SDGs の目標の項目に興味があるか」を問うアンケート結果をもとに、初めてグループワークを行った日であった。なぜ心に残ったのかというと、同じ問題意識をもつ学生に初めて出会い、自分の意見に共感してもらえたことに喜びを感じたからである。私は「SDGs 12. つくる責任、つかう責任」の担当になり、そのグループには、私と同様にファストファッションへの問題意識をもっている学生がもう一人いた。ファストファッションは、安価であることから利用する大学生も多く、私の仲の良い友人たちもよく利用していた。劣悪な労働環境というネガティブな背景があることをニュースで知って以来、私はファストファッションの利用を控えたが、未だ利用し続ける友人たちに対して、内心もどかしさを感じていた。自分がファストファッションを問題視していることすらも、人に話したことはなかったのである。しかし、第 8 回の講義で初めて自分の意見を周りに共有したとき、同じ考えをもつ学生が共感をしてくれたため、「自分だけで

はなかったのだ」と気づくことが出来たのだ。

【身についたこと】

私は、この講義を通して、一つの行動や動作においても、より持続可能に行う方法を選択肢として身につけることが出来たと感じている。ペットボトルの代わりにマイボトルを持ち運ぶことや、マイバッグを買い物に持参することは以前から話題になっていたが、そのほかにも私が知らない取り組みに多く触れることが出来た。特に、海外での持続可能なアクションについて学んだ際には、日本と比較を行い、日本には何が足りないのか、そして、日本にどのように活かすことができるかということを意識するようになったと思う。私にとって印象的な取り組みは、飲料のペットボトルを有料販売し、飲み終わったボトルを回収する際に一部または全額返金されるというものである。このように、持続可能なアクションを起こすために必要な知識を得ることが出来たと思う。また、それらの知識を踏まえ、より広い視野をもって物事に接するスキルが身についたと感じている。

【これからどう活かすか】

これまで学んできたことをどのように活かすかという点において、私は、重要な点が２つあると考える。

１つ目は、情報収集を続けることである。本講義への参加を通して、幅広い分野にわたって知識を吸収することが出来たと同時に、アクションの原点は知ることにあると強く実感した。社会情勢の変化や技術の進化に伴い、データは今後も変化し続けると考える。学び続けることにより、より具体的なアクションプランを立てることが出来ると予想し、今後も情報収集を続けたい。

２つ目は、就職活動に活かしたい。私は現在、３年生であり、企業のインターンシップや説明会に参加する機会が多くなった。企業の話を聞いている限り、近年はどの企業も、持続可能な社会に向けた取り組みを掲げているように感じる。企業分析を行う上で、その企業がどのように持続可能な社会に寄与できるのかに着目したい。また、就職後も職場の環境においてどのような取り組みが行えるかを考え、積極的に発信していきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑧

今回、赤羽キャンパスに通う自分がなぜこの講義に参加したのかというと、過去の講義や今学期履修した講義などで話されていた SDGs や、ネットの企業などが取り組んでいる記事などを見て関心を持ったので受けた。本来、本講義の申込期限は過ぎていたが履修期間に特別許可をしてくださったエクステンション課の青木さんをはじめとする多くの皆様に大変感謝したいです。

まず初めに全体の概要についてですが、この講義を受講して大変良い機会になった。元々そんなに SDGs に意欲関心がある方ではなかったのですが、今後の就職などのことを考えた際に自分が入りたい企業にアピールできるようになりたい思いで履修した。自分の知らない情報があまりにも多く、こんなにも気にせず生きてきたのかと少し悲観的になりそうだった。他の受講生は知っていても自分は知らない単語や活動を今回知ることができたので大変勉強になった。赤羽キャンパスでは実際にグループ活動で話し合い、アンバサダーの方々などとの意見交換などはやっていないので白山に通ってまでいった価値は大いにあると感じている。

心に残った授業回は特にこれといった授業はない。だがしかしどの授業もとても関心のあるものばかりで自分の知っていた見識を広げることができた。また、自分の知らなかったジェンダーなどの関心すらなかった内容も講義を聞いて重要なのだと改めて気づかされた。本大学の教授や准教授の先生方、外部のボランティア団体の皆様には大変感謝している。今回の子の講義があったからこそ SDGs について関心を持つことができ、
今回は SDGs11 について特に焦点を当て調べ、発表したが他の番号の発表や講義を聞いて他の番号についても知らべて発表してみたいとも思った。

身についたことは今回学んだ知識とエクステンション課の方々や SDGs アンバサダーの方々によって開いていただいたイベントに参加した経験と知識、今後への SDGs に対する関心意欲である。今回の講義を通して SDGs についての意欲関心、知識を得ることができ、身につくことができた。だがしかしこれだけで終わっては今回の講義の本来の目標ではないと考えている。この知識をどうアウトプットし、どのように行動して社会に貢献、還元するかが重要だと私は考えている。まず初めに既に何人かあの教室にいたが SDGs アンバサダーに入って実際にイベントを開くことで講義内で学んだ知識を他の生徒や人に知ってもらう。機会を増やすことで講義内でグループ発表の際に発言した「知ってもらう機会を増やすにつながる」又本講義の目的である「SDGs を知り、ひとりひとりが自分事として捉え目的達成のための行動へと昇華させる」につながるのではないかと考えている。その手始めにもし来年度もこのような授業があったらぜひ受講して知識を深めていきたいと思った。来年度のアンバサダーはやってみようかなと関心があるのでぜひそちらも参加してみようかなとも思っている。加えて災害救援ボランティア講座に参加し、実際に体験して万が一起きた場合行動できる人材になりたいので知識として学んだあとはそれをアウ

トプットする必要があると考えている。いくら知識として取り組んでいたしても、行動に移さなければ学んだ意味があまりないと考えている。なのでワークショップなどに参加して見識を広める活動、行動に移せたら学んだ意味が出てくると考えている。自分は情報連携学部なので他の学部と比べやや SDGs に対して向き合う分野が少なく、他の学部のように多くの知識を講義などで得る機会は比較すると劣ってしまうと思っている。ですが今回の講義で学んだ知識を自分の学部で学んだプログラミングやインフラ事業に活かすことで学部内でも使うことができるのではないかと考えている。３年の授業でコース合同でチーム演習を行う予定だがそこで今回学んだ知識を取り入れることでこの講義を唯一赤羽キャンパスから受講している自分だけの優位性を活かすことで他の人になかった視点から物事を捉えることができる能力を使えることができるのではないかと考えている。この講義はとても為になったと思うのでぜひ赤羽キャンパスでも実施してほしいと思った。赤羽キャンパスで自分のような人間は意外と多くいると思っている。この講義を学ぶことができれば赤羽にも将来的にアンバサダーを増やし、赤羽支部のような形でできるのではないかと考えている。こちらにはライフデザイン学部、情報連携学部、社会福祉学部の３学部が揃うのでそれなりに人数も増やせるのではないかとこの講義とワークショップやアンバサダーの活動報告を通して思った。実際に川越でも森林活動も行っていると川越キャンパスの教授も発言なさっていたので実現可能な範囲ではないかと考えている。

SDGs 実践講座最終レポート⑨

1. 全体の概要について

この講義は SDGs の各ターゲットに対して、その分野を主に研究されている先生から一歩踏み込んだ内容のお話を伺った上でグループワークを行い、理解を深めるという流れでした。特にこの講義の特徴としては学部学科やキャンパスの垣根を超えた学生が受講していたということだと思います。私は国際学部ですが、ほかの分野に特化した勉強をしているメンバーは、より深い話まで聞かせていただくことができましたし、白山キャンパスでは経験しないような活動を行っている方もいらっしゃいました。もちろん講義をしてくださった先生も白山の方だけではなかったので印象に残る部分はありますが、それ以上に同年代の全く異なる生活、経験をしているメンバーの話を聞けたことは非常に良かったと思います。

2. 心に残った授業回について

私がこの講義で最も心に残っている授業回は、水村先生のコレクティブハウスについてのお話です。私はまちづくりに興味があり、最終回のプレゼンテーションでも SDGs11「住み続けられるまちづくりを」を取り上げました。しかし講義を受けるまでコレクティブハウスというもの自体全く知りませんでした。実際に話を聞くと学生時代に経験したような共同生活のようなスタイルであるように感じました。日本人は協調性を強く求めない人が一般的に多いように感じるので、日本に導入して発展させるのはなかなか難しいと思いますし、私自身も現状は入りたいとは思いません。しかしスウェーデンでも高齢の方の入居が多く、コモンミール活動の感想でも「人生の後半になって自分をこんなに向上させて、他人と同調することができるようになりました」や「性別や年齢にあったそれぞれの仕事」という文面もあることから、孤独を感じたタイミングで入居をすることは非常に効果的なのではないかと感じました。また年齢にかかわらず、孤独でいるよりも親しい人と近くにいることがより一層その人の幸福度を上げるということも暗に示しているのではないかと感じました。

3. 身に着いたこと

この講義を通して身についてと感じることは、一見問題点が大きく 1 つなど少なく見えるようなことも、詳しく見てみると付随する様々な問題が現れるということです。例えば貧困地域で病院を作ったとしても、食糧不足による栄養失調が頻発してしまえば意味を成しません。SDGs の 17 のゴールは全てほかの課題と繋がっており、もちろんできる部分から始めるべきではありますが、最終的にはすべてのゴールを達成する必要があると思います。また SDGs のみならず、日常生活などの疑問点についても「こうすれば解決する」と思い込まずに、一歩立ち止まって熟考することが完全な問題の解決への近道になるのではないかと感じました。

4. これからどう活かすか

今回の講義を通して私は視野を広くし、一歩立ち止まって考えるということを意識しよ

うと考えています。そのためにもまずは多くの経験を積むことが大切だと考えています。例えば 12 月、1 月ともに参加することは叶いませんでしたが、こもれびの森・里山支援隊のような先生方ともかかわることのできるイベントに積極的に参加をすることは非常に有意義なものになるのではないかと思います。私の場合、夏にガクチカにて募集のあった湯河原の居場所支援活動「ゆがわらっこ」に参加をし、実際に活動をしている方や興味を持って一緒に参加をした学生と話し合いや子供たちとの触れ合いを経験しました。これらの経験は今までの人生経験において全く考えもしなかったことであるとともに、改めて「こどもを好きである」「人が好きである」という感情を再確認できたように感じます。その後も居場所支援活動には興味を抱いており、授業内で会った学生の中にも当時いたメンバーがいたので、再度訪問できるよう時間を作れればいいなと考えています。また行ったことのない友人にも活動への参加を促すことで、より人と人が支えあうという循環を大きくしていけたらいいなと考えています。

5. 今後の課題

最後に私が感じている課題について記述しようと思います。それは「情報を得ることが難しい」ということです。この講義では SDGs 関連イベントとして常時情報が更新されていましたが、授業期間が終わった後も同等の情報を得続けるのは難しいのではないかと思います。SDGs アンバサダーの方もいますが、今まで何をしてきたのか等についてはほとんど内容を知りませんでした。また湯河原に行った際も私は一人で参加をし、ほかの友人も一人で参加をしていたので安心をしましたが、行く前までは一人になって浮かないかなど不安に感じる場面もありました。実際に友人も同様の不安を感じていたようなので、水族館などでやっている「おひとり様限定イベント」のような形で募集をかけてもらうのも面白いのではないかなと感じます。また信頼している友人や先生方から誘われるものは、より参加に対しての意欲がわくため、全体ではなく個人的に興味のありそうなものをシェアできる相手を見つけられたらいいなと思っています。

SDGs 実践講座最終レポート⑩

今回私は SDGs 実践講座を受けて、SDGs17 の目標の 1 つ 1 つについて詳しく知ることができました。私は高校 3 年生の夏休みにオンラインで SDGs 海外ボランティア研修を受けて、SDGs アンバサダーに認定していただきました。その研修では、SDGs17 の目標が何を懸念してどのような対策をとっているのかなど、表面的な部分を学びましたが、今回は実践ということで自分たちで考え、具体的なアクションプランを立てることができたので、SDGs について深掘りする良い機会になりました。そのような中で、私は第 10 回の内田先生の授業が心に残りました。以前から、17 の目標のうち、5 番目の「ジェンダー平等を実現しよう」というテーマに関心があって、高校 3 年生の研修でも、ジェンダーをテーマにした小論文を作成していました。なぜこの授業が心に残ったかというと、個人的に、ジェンダー問題というのは 17 の目標のどの問題よりも繊細で、考え方も人それぞれなため、解決が難しいものだと思っているのですが、この授業では分かりやすくなにが問題なのか、どのような考え方を持つことが大事なのか、という導入と本質を誰もが理解できるようにまとめてあったからです。まず生物という視点から、色の見え方は生物によって違うということを知り、性別区分について詳しく教えていただきました。私は、一般的に知られている LGBTQ については知っていましたが、その他のセクシュアル・マイノリティについては知らなかったので、このようなジェンダーの区分の方が少数であろうとも、知ることができて良かったです。私は、身体と心の性が一致していると認識しているので、特に「クエスチョニング」、「X ジェンダー」というジェンダーの区分の方の気持ちを理解することは難しいと思います。しかし、まずは知ることが大事なのであって、ジェンダーの区分が少数者の方の気持ちを知った気になって、自分の考えを押し付けることはあってはならないと思います。セクシュアリティとは身体、心、対象の個人的要因だけではなく、役割、環境、関係の社会的要因も関係していると学んだことで、一人一人がこの問題を自分事として考え、分かり合うことが大事だと思います。このように考えると、性は無限大であり、決めつけることなどできないと分かりました。「性はグラデーションである」という多様性を理解した考えを持つことが私たちには必要なのです。私たちは小さい頃から、「男の子なんだから」「女の子なんだから」という言葉を耳にしたり、学校や公共施設で性が定義されていたと思います。しかし、これはジェンダーの区分が多数者からしたら当たり前のことであり、疑問を持つことも無かったのではないかと思います。しかし、当たり前なのは私たちだけであって、これを周りの人に押し付けることによって、どこかで誰かが傷ついているのだと分かりました。自身の固定概念だけで行動するのではなく、他者の気持ちになって行動することが必要だと分かりました。

また、男女平等についても改めて考えることができました。日本では戦後から「女子差別撤廃条約」や「男女雇用機会均等法」などが制定され、生物学的な性として、女性の社会的地位が低くならないように対策が練られています。そのため、今の日本では直接的に性差別を

感じることは少ないかもしれませんが、まだ完全に平等にはなっていません。世界的な規模で考えると、性差別が顕著に現れている行動がとられている国も多くあります。私たちは、他の国に比べると、ジェンダー問題は数多くある問題のうちの 1 つだと思うかもしれませんが、今こそ自分事と捉えて考え直すことが必要だと思いました。
私の住んでいる地域では、お祭りのときに SDGs 活動が行われていて、老若男女問わずにゴミ拾いをしていました。ゴミの分別によって解決できる問題は多く、たくさんの人が協力することによって、問題を解決できる日が近づいてくると思います。また、学校内で行われた「SDGs ランタンで照らす夜の図書館探索 “Lantern Labyrinth”」という
活動に参加しました。この活動ではグループのメンバーと楽しく SDGs について学ぶことができました。地域の活動や学校内での活動、今回の授業を通して、どのような形でも良いから SDGs 問題について広めることが大事なのだと分かりました。SDGs17 の目標は、解決するには多くの人々の協力と日時を要するかもしれません。とても大きな問題であり、世界規模で取り組まなければいけません。その取り組みの始まりは私たちで良いのです。誰が始めても解決すれば良いのです。
この大きな問題も、全員が自分事として捉えればすぐに解決できると思います。この綺麗で素晴らしい世界を持続させるために、今日も少しずつ SDGs 問題を解決に近づけたいです。

SDGs 実践講座最終レポート⑪

・全体の概要

全体を通して、SDGs のそれぞれの項目ごとに変わるがわる専門の教授や講師の方にお越しいただいて講義してもらえるという環境がまず新鮮で毎回楽しみにしていた。授業の一環で少し SDGs に触れたことはあったが、ここまでどっぷり深くこれだけをテーマに学んだことはなかったので、実態や新たな知見を知ることができてより一層 SDGs を身近なものとして認識するきっかけにすることができた。

・心に残った授業回

特に心に残った授業回は、第 7 回と第 12 回の 2 回ある。

まず、誰もが第 7 回の講義といえばうまい棒を思い出すだろう。うまい棒をたくさんいただき、大学の講義としては異例の“授業中にうまい棒を食べる”ということをしたのだ。あそこで学んだうまい棒をきれいに 4 等分する方法は目から鱗だった。そして、なんと太っ腹なことに、帰りの際に追加でたくさんのうまい棒を持って帰って良いということだった。皆で好きな味の争奪戦をしたことが記憶に新しい。僕はあまりうまい棒を食べる機会がなかったので、こんな味もあるのかと驚いて色々な不思議な味を堪能させて頂いたのを覚えている。

さて、この回で学んだのはうまい棒だけではない。今まで理解どころか耳馴染みもほぼなかった SDGs の目標 17 の「パートナーシップで目標達成しよう」について理解を深めることができたのだ。

我々の住むこの青く美しい星は、ときに宇宙船地球号と称されることがある。皆も一度は聞いたことがあろう。これは、地球に住む全人類一人ひとりがこの大きな宇宙船のクルーだと認識ないしは、自覚させることで普段の自分の行動に責任と重みを持たせることができる。なぜこのようなことを言うかというと、この宇宙船は、我々人間の大きさからするとあまりにも広大な故に一人や二人の行動でどうにかなるようなものではないからだ。SDGs を達成するためには少なからず皆の協力が必要だろう。そんな時にパートナーシップを有効活用しなければならないというふうに繋がってくるのだ。そのためにはまず、大学生である僕たち一人ひとりに何ができるのか考える必要があると思った。

そこでお越しいただいた高田様からは様々なことをご教授頂いた。まず「6 次の隔たり」というものだ。これは知人を通してそのまた知人と繋がる方法で、6 回それを繋げれば、全世界の人と間接的に知り合いになれるということで、いかに人間同士の距離が近いかが実感できるだろう。このつながりは、就職してからさらに重要になるとのことだった。次に、国連難民高等弁務官を務めた緒方貞子さんの言葉である「大切なのはカンと想像力である」が印象的だった。さらに、このカンには「感・勘・観」と 3 ステップあるのが、すばらしいと思った。個人的には勘が特に欠けていると思ったのでこれから養っていきたい。そして最後に「人生は人・本・旅である」が紹介された。これらのことが自然に実行できるようになれば、自ずとパートナーシップも成功に導いてくれると感じた。

次は第 12 回の学びを書き留めたい。

第 12 回は、アイサーチ・ジャパンの方にお越しいただき、SDGs の目標 14 の「海の豊かさを守ろう」について講義をしてもらった。この回の何が一番印象に残ったかというと、SDGs14 の項目について普段の

授業のように淡々と語るのではなくて、海の音を想像し、聴いて、海の豊かさを感じさせるという人間の感性に訴えかけてくるという新たな体験型の授業で新鮮な気持ちになることができたからだ。
我々人間は海からたくさんの恩恵を受けているにもかかわらず、知らず知らずのうちに自らの手で海を汚してしまっているのだ。そこで、生物多様性条約、COP、MSC 認証（海のエコラベル）とさまざまな取り組みがなされていることを知った。この時、先生が「知らないことは悪いことではない、これから知っていけば良いだけ、知っている人は広めてあげることが大切。」とおっしゃっていたのがとても印象的だったのを覚えている。しかし、2020,2025 までに～などの達成目標も達成できていないのが現状だ。これからの海の豊かさを守るためには、まずは多くの人に海の恵みと現状を伝え、砂浜にゴミ（特にプラスチック製品）を残さないなどの多くの人の協力が必要不可欠だと強く思った。

・身に着いたこと
宇宙船地球号のクルーの一員という自覚が出たのか、この授業を受講してからしばらくすると、普段の何気ない生活の中でゴミの分別や水・電気・食品の節約、果てはプラスチックストローなのか紙ストローなのか、プラスチックスプーンなのか紙スプーンなのかというような細かいところまで意識するようになっていた。もはやこれが習慣になっていたのだ。

・これからどう活かすか
上記のようなこの授業を通して身についた習慣に変にこだわりを持ちすぎて気難しい人になるのは避けたいが、せめて自分だけでも普段から SDGs を意識した生活を心がけていきたいと思う。もしかしたら自分が変わることによって、家族や身近な人など周りが良い方向に変わっていくかもしれない。僕は、この望みに賭けて今日も宇宙船地球号を明るい光へと導くのだ。

SDGs 実践講座最終レポート⑫

１　全体の概要

本講座を受講するまで、私は SDGs という名前こそ聞いたことはあったが、実際にどのようなことを目指すものなのか、何のために行われているものなのかを全くもって理解していなかった。そのような、いわゆる SDGs の「初心者」たる自分にとって、この講座を通して得られた学びは非常に濃く深いものであった。

SDGs は１７の目標が設定されていることから専門性がなければいけない、というような堅苦しいイメージを抱きやすい。実際私もそうであり、何となく難しい、という印象を持っていたことは事実である。

しかし本講座を通して、実際は決して専門性のみが求められるようなハードルが高いものではなく、誰もが「自分ごと」として関わることこそ求められるものだということを理解した。そもそも SDGs は２０１５年に、開発途上国支援を念頭に設定されていた MDGs（ミレニアム開発目標）を拡大・発展させる形で、先進国、開発途上国関わらず「誰もが」取り組む目標として開始されたということは既知の通りであるが、自分は様々な課題が蔓延る現代に対し、「誰も取り残さない」ことこそ、この SDGs の最大の特徴はであるという考えに至った。そして「誰も取り残さない」ことを目指す上では、どのステークホルダーであっても「自分ごと」として捉えること、それを周りに広めて「パートナーシップ」を発揮することが非常に重要なことであることを気付かされた。また、行動を起こす上での指針として１７個のターゲットが存在するという、ターゲットそのものが持つ意味についてもイメージを掴むことができた。

このようなことを踏まえると、本講義の授業の展開が持つ意味も理解できる。各 SDGs のターゲットを専門とする講師の方々のオムニバス形式で展開される授業では、各ターゲットの内容をただ理解するだけでなく、その内容からいかに「自分ごと」として捉えるのかが常に問われるものであった。また、どう「自分ごと」として捉えたかを小レポートにて言語化することも求められた。その過程で SDGs それぞれのターゲットへの興味や関心を「自分ごと」として強く抱くことができた。そして「自分ごと」として捉えた内容を周りに繋ぎ、広めるという過程においては、班別のグループワーク等を通して意見交換を行い、意見をまとめて昇華させ、発表するなど「パートナーシップ」を発揮する機会が数多く用意されていた。そのため、SDGs への「関わり方」を強く叩き込まれることとなった。この点は非常に満足している。

これからこの講座をもっと良くしていくという意味では、自分は「実践」という意味合いを強くするべく、何かしらの形に残るワークを行っても良いのではないかと感じている。

例えば、本学に存在する「SDGs アンバサダー」と共催で展示やワークショップを開催する、SDGs のアクションを訴えかけるコンテンツを制作してみるなど、本講座で得た見

解や知識を活かす場を設けることもぜひ検討していただきたいと要望する。

２　心に残った授業回

本講座は各ターゲットに精通した講師が行うオムニバス形式ということもあり、各回が非常に学び深いものであるため、正直に言えば各回全てが心に残っている。ただ、自分が特に強く学び得たと感じることに関連させるのであれば、第６回 小瀬先生による授業回が印象深い。SDG7,13,15 を中心にした授業回であったが、東洋大学川越キャンパスこもれびの森・里山支援隊の事例や NPO 法人かわごえ里山イニシアチブの事例からは、森の保全や田んぼの保全などを、「みんなで行っている」ことを強く教わった。その中で、参加者それぞれが「自分ごと」として捉え、活動に関連する SDG ターゲットに興味を持つこと、「みんな」で行うこととして「パートナーシップ」を発揮していることなど、まさに SDGs を実践する上で求められることがまとまって現れていたと感じた。そして、「好きこそものの上手なれ」という言葉から、自分の持った関心を大事に深めていくことの重要さも学び取ることができた。

また、個人的な興味関心からは第４回の廣津先生による授業回、第１３回の水村先生による授業回も印象に強く残っている。

第４回の廣津先生による授業回では、飢餓を先端技術で解決しようとしてきたからこそ見える本当の飢餓の姿や、理系・文系の枠組みを超えて課題に対処することの重要性について深く理解することができた。また、普段文系科目を中心に履修している身として、先端技術がどう開発されているかというテーマが非常に新鮮で面白く感じた。

第１３回の水村先生による授業回では、コレクティブハウスやコモンミールという、暮らしの選択肢を新たに知ることができた。私が所属する国際学部国際地域学科の学びも上でも、住まいのあり方、暮らしのあり方、コミュニティのあり方というテーマは非常に興味があるが、その中でも特に現代の日本人の特性と本来の日本人の特性を比較して、コレクティブハウスやコモンミールを日本で取り入れることは可能かという問いに対して考察できたことは大変貴重な学びの経験となったように感じている。

３　身についたこと

日常に存在する課題においても、「自分ごと」として捉えてどう対処すべきか考えることを習得できた。そのためより一層身近なことから国際的なものまで、あらゆることに関心が向くようになった。その中で日常に目にする「SDGs」という文字の意味合いも変化してきたと感じている。例えば、「SDGs のターゲット〇〇に準拠しています」というような表記を見かけた際は、どのようなアクションを SDGs に結びつけているのかに非常に興味を持つようになった。他にも各 SDGs のターゲットに関するテーマを見かけた際は「自

分だったらどう捉えて行動すべきか、どのような方法を持って周りに広めていくべきか」というように考察する機会が圧倒的に増えたと感じる。

また、各授業回で得た学びを繋げて新たなアイディアを生み出せないかと思考することも身についた。特に第4回の廣津先生による授業回にて、理系・文系の枠組みを越えることの重要さを知って以降は理系分野の情報を収集する機会も増えた。

このようなことから、「自分ごと」として興味関心を持つ力、アクティブに思考・考察し、そのために情報を収集する力が強く身に付いたと言える。

4　これからどう活かすか

本講座の掲げる「実践」という意味合いからすれば、実際にSDGsにまつわるアクティビティを行うことは重要であると考えている。

その上では、例えば本講座にて「SDGs関連イベント」が何度もアナウンスされてきたが、このようなイベントに自分から参加し、ワークショップや体験型学習会で学びを深めることや、ボランティアなどに実際に参加して「実践」することはこれからも引き続き行っていきたい。また、何かしらの形でSDGsの輪を広めてみたいと感じている。特にZ世代と言われる我々は情報社会の中で日々を過ごしている。その中でSNSやブログ、Vlogといった形で情報発信をしてみるということも有効な手立てかもしれない。他にも、学外のアクティビティに参加し、SDGsに関するパートナーシップを発揮できるグループやコミュニティを開拓することも行ってみたい。その上で自分は、本講座の関連イベントで知った、「ウォーターエイドジャパン」の「ウォーターエイド・スピーカークラブ」に参加し、水の問題をSDG-6の観点から問いかけるような活動に参加することを検討している。

そして、本学の「SDGsアンバサダー」への参加は真剣に検討している。自分がSDGsに関わるアクティビティとしてやってみたいことを一緒に行ってくれる仲間や時間を確保し、大学が応援してくれるというこのアンバサダーは「実践」として活かす上ではこれ以上ないチャンスだと感じている。

また、SDGsを日常の生活や、大学での学習などでも意識することこそ大切なアクションではないかと考えている。将来の社会をより良い社会として築き上げるために、学生たる我々の日々の学びや経験があるという捉え方をするならば、その「より良い社会へと築き上げる」ための最大のヒントこそこのSDGsであろう。大学を出て、実際に社会を構築する「実践」の場で力を発揮するためにも、SDGsを日常で意識する、大学での学びに結びつけるというような意識づけをすることを一番大切にしていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑬

この授業は SDGs の各ゴールに着目して、様々な視点で問題を捉え、それについてグループで討論し解決案をつくるものだ。第一回目はジェンダーについてだった。東洋大学は私立大学で初めて女子生徒を受け入れた。大学は男女平等に教育を受けられるべき場所であるということはこのジェンダーの平等性を強く示している。第二回目は、SDGｓ自体についての理解度を深めるものだった。５０年前からＣＯ２削減の警鐘がならされていた。しかし、人々はそれに注目せずに、自分たちが過ごしやすい社会に変えようと努力した結果、見事素晴らしい技術が生まれ、私たちの生活がより豊かになった。その一方で、人類が止めることができないほど地球の環境を破壊してしまっている。５０年前に少しでも地球の環境を改善する手立てがあったのかもしれないのに、昔の人々は何もしなかった。この事実は変えることができないので、今現代の私たちが少しでもこの地球温暖化を抑制する方法を模索し実行しなければならないことを再確認した。第三回は、貧困をなくそうに作目したものだった。さらにこのゴールの詳細は多くの人に読まれてないことが現実で起こっている。この貧困層には二つの種類があり、貧困層と極度貧困層に分かれる。極度貧困層にはおもにバングラデシュやブータンであったが、現在は脱出方向に向かっている。さらにほかの国も極度貧困層から脱出する傾向が見れる。第四回は感染症を題材に進めていく講座であった。感染症は水との関係がかなり深い。感染症が多く起こっている地域はアジアが多い。その原因として国の経済力の低下が大きくかかわっているだろう。下水道の設置などは金銭にまつわることなので経済と密接である。さらにごみ問題もまた大きい問題だ。ゴミは放置すると虫や寄生虫が発生し、私たちがそれに接触することでさらに感染症が広がってしまうだろう。第六回目は陸の自然を守ることが目標であるＳＤＧｓのゴールについてだ。川越では環境保護活動を大学で多く行われている。第七回目はパートナーシップに関する講座だ。「うまい棒」を用いて、様々な会社や企業が協力し合って製造されていることをまなんだ。これはビジネスにはもちろん、人間関係の構築にもかなり役立つであろう。「人、旅、本」は人がかかわっていく上で必ず必要となるものである。これはパートナーシップを構築する要素である。第八回目は、話し合いの大切さの再確認であった。日本では多数のいけんが多く取り上げられやすい傾向にある。しかし、少数派の意見は通りにくくなっている。そこで、意見を聞くよりも相手の意見に対して、質問を多くすることで理解度を深め、多数はもしくは少数派に分けて考えることが少なくなるだろう。などそれぞれのＳＤＧｓの項目について焦点をしぼって講義をされていた。

私が一番関心を深くもった授業は「うまい棒」を使ったパートナーシップであった。うまい棒は安くておいしいが売りである。そのバックグラウンドには、段ボールの会社がかかわっている。そこでは段ボールを無駄に余らせることなく、うまい棒を箱詰めにしたときにぴったりなるようなサイズで製造している。このように無駄をなくすことで低価格で顧客にう

まい棒を提供できる。つまり、うまい棒だけを製造している会社ではこの低価格は実現されなかった。それには、段ボール業者や包装会社とともに話し合いをし、お互いが満足のいく結果になるように妥協したり、助け合ったりなどをしてきた。この構図は、会社だけではないことを教えてくれた。私たちが生きていく上で、人間関係は切っても切れないものである。それにはパートナーシップが深く結びついていて、そこからいろんな可能性や仕事のいらいなどが生まれてくる。パートナーシップは自生活であまりかかわっていないようで密接にかかわっているものである。さらに、私は本を通じて友達ができた。ハリー・ポッターの本が大好きでよく小さいころから読んできた。だから、それが話のタネとなり、やがて友達関係まで発展することができた。旅では、アメリカの女の子と仲良くなれた。小学生の時、家族でハワイ旅行に行ってた時のことであった。ホテルのプールサイドにその女の子がいた。そこで私は一緒に遊びたかったのでその子に話しかけてみることにした。それから、親が訳してくれたりなど助けてくれたが、子供ながらなんとか仲良くすることができた。このように、振り返ってみると旅というものは人と出会う機会がたくさんあるのだと再び気づけた。そして、現在東洋大学では友達ができ、そのうちの一人の中国人と仲良くなった。彼女は寮に住んでいるので、寮にいるいろんな国の友達の話を私に聞かせてくれる。彼女は私にたくさんの外人を私に紹介し、みんなで食事会にもいった。そこで、今の彼氏と出会うことになる。人を通じて、人とであう。これは当たり前だが、なかなか気づけない点だと感じた。今後、人、旅、本を通してたくさんの人とつながり、いろんな考えも同時に吸収出来たらなと感じる。それをビジネスに活用すればさらにパートナーシップが発展するだろう。

SDGs実践講座最終レポート⑭

・全体の概要
半年間このSDGs講座を受け、初めは漠然とどうにかしたいと考えるばかりであったが、実際にどう行動に移せるか考える力を身につけることができた。
講座の内容に関しては一方向からSDGs について考えるのではなく、様々な分野について学ぶことができ、それぞれの考え方や関連などを学ぶことができたのでとても良かった。
発表に関しては準備時間を授業内である程度取ってあると嬉しかった。
オンラインでなかなか難しい部分もあったけれど最後まで楽しみながら参加することができてよかった。
・心に残った授業回
私は第６回の小瀬博之先生の授業が１番印象に残っている。この講義では気候変動対策と陸域生態系の関係について詳しく学ぶことができたとともに、持続可能社会を作ってはいけない大切さを学びとても考えさせられた。私はボーイスカウト活動を通して長年フィールドワークを続けて来たので、先生の話は共感する部分が多かった。地球環境を変えるのには今の環境を保全修復するだけでなく、未来を生きる子供たちの意識をSDGs などにフォーカスできるようなイベントに参加してもらい、環境をいつくしめるような心を育てていくことが大切だと思った。最近ではコロナによってこれらのボランティア活動やフィールドワークがめっきり減ってしまったがここで流れを止めるのではなく、すこしずつであっても、絶やすことなく続けていくことが大切であると思った。
・身に着いたこと
この講義では川越キャンパスであったため、オンラインでの参加だった。画面越しであると対面に比べ、自分から発言しないとグループワークにうまくついていけない場面が多かったので、積極的に発言をしていくことの大切さを学んだ。また、逆の立場になりオンラインの人と授業や交流をするとき話題を振ったり意見を聞いたりすること重要さに気づくことができた。
勘を鍛えることの重要性についても学んだ。そもそも、勘を鍛えるということについて今まで考えたことがなかったので驚かされたが、様々な経験や場数を踏むことですこしずつ得られていくということだった。また、想像力の限界というものにも驚かされた。様々な作品を書かれていた作家の方たちでさえ現実問題に対する考えが足りていなかったという話だ。私は、日ごろから本を読みいろんな人の成功論失敗論、考え方、感じ方など様々なものを学んだ気になっていた。しかし、本を通して学べることは経験であっても追体験に過ぎないものなので、実際の現場で経験を積み自分の中に落とし込んでいくことが必要だと思った。今まではコロナであるということで参加を控えていたが、チャンスがあればいろんなイベントや企画などに参加して勘を鍛えていきたいと思った。
他には、今までは食料をどのように必要としている人に届けられるのだろうか、と援助の

手段ばかり考えていたが届けるものの内容もしっかりと考えておかないといけないことを知った。栄養面が足りていないことや取れていたとしていても偏った物ばかりであると、ビタミンや鉄分が不足し見えない飢餓として体を蝕んでいくことを初めて知ったとともにその恐ろしさを感じた。貧困国や紛争地域などの話を聞き、自分がとても恵まれた環境で生活していることを自覚させられたため、改めて自分の状況や環境について見つめ直させられた。
活動の普及についても学んだ。COP の種類は今いくつもあり最近ではこの会議の数が多くある。しかし、人気があまりない分野であると放送局に認識され報道されないのが現状だ。持続可能な水産資源を守るためにMSC があるがこれらも知名度が伸び悩みあまり知られていない。このように、様々な活動を今現在も行っているというのに知られていない現状は、興味を持ってもらえる人が減り新規参入者が入ってこない悪循環になりかねないので、すぐにでも解決しなくてはならない大きな問題だ。SDGsをこれからも持続させて行くためには多くの人々に認知してもらうことや実際に行動に移すことだけでなく、企業や大学間の表彰やランキングなどによってSDGs を行うことへの付加価値をつけ、ビジネスと深く密接させ流ことで企業によって行われる長期的かつ大規模な活動を誘致していくことの大切さを学んだ。
・これからどう活かすか
これからは、SDGsについて考えるだけでなく、これからどのように実践していくかという考えを念頭に置き活動していきたいと思った。今までは授業を受けて知識をつけ現状を理解するにとどまり、学んだことをまだ実践に移せていないのが現状になっていた。このように、SDGs問題に対して受け身になっているのではなく、自分自身の力で解決の糸口を見つけて行こうと思う。現在もなお様々な国が協力してSDGs を目標とし、対策をしているのにもかかわらずなかなか好転しない現状に不安に思うだけでなく、個人であってもでもできることがないか模索していこうと思った。東洋大学では様々なSDGs 関連イベントが行われているので実際に参加していきたいと思う。また、SDGsの集まりがあるとも聞いたのでそれにも参加していきたい。このような活動をする際には健康第一、環境第二というように環境を守る前に人間の健康についてしっかり考えることが大切だというお話を忘れずにしたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑮

このSDGs 実践講座では17 の目標それぞれについて学ぶだけでなく、学んだことを自分事として捉えて目標達成のための行動につなげるという学習目標があった。私は全体を通してこの学習目標を達成できたのではないかと思う。特に自分事して捉えるということを意識的にできた。学んだことを自分事として捉えることで、日常生活において身近にある様々な問題について気づくようになった。そして最も身近にあった「作る責任、使う責任」についてビジネスコンテストという場を通して、ある一つの行動につなげることができた。どんな問題に着目したかというと、アルバイト先での食品ロス問題である。私がアルバイトをするコンビニでは毎日約10 キロもの食品が捨てられている。こういった事業系食品ロスは日本だけで年間275 万トンもあり、資源の浪費や環境汚染問題に大きく関係している。そこで私はこの課題を解決する簡易的なアプリを作り、ビジネスコンテストで発表した。学内だけでなく学外でもSDGs に関する活動に参加したことで、SDGs の目標達成のために自分にできることは何かについて考える時間が増え、とても深い学びができた。
この講座を受講した中で私の心に残った授業が二つあった。一つは第四回の飢餓問題に関する授業である。気候に恵まれていてインフラも整備されている日本に住んでいる私たちにとって、飢餓はそこまで身近なものではない。そのため、私はこの授業を受けるまで飢餓に苦しむ人が世界で7 億人もいることを知らなかった。飢餓と戦っている人が世界中にたくさんいるのに、私はアルバイト先で大量の食品を捨てていると思うととても申し訳ない気持ちになった。そして何より、教育を受けた者の責任とはという問いかけが今でも心に残っている。今まで当たり前のように生活してきたが、今の自分があるのも膨大な資源を消費してきたからである。この当たり前じゃないことを当たり前のようにやってきたからこそ、ボランティアに参加して環境を改善する責任があるし、苦しんでいる人を助ける必要があると気づかされた。そして、SDGs とは何か興味があってこの講座を受講することにしただけであったが、SDGs とは本当は皆が真剣に向き合って何か行動を起こさなければいけないものだと学んだ。
もう一つは第十二回の海の豊かさに関する授業である。この授業では主に海洋ごみについて触れ、海洋ごみのほとんどが陸地からの流入によるものである。そのため海洋ごみを減らすためには普段からごみを出さないようにする必要があると知った。そしてこの授業で一番の学びになったのは、小さな事を持続的にやることが大切ということだ。私はよく、張り切って高い目標のもと行動しようとするときがあるが、やはりこれでは長続きするどころか実現する前にあきらめてしまう。しかしSDGs の目標達成を達成するには持続的に行動することが必要である。ボランティアに参加することはもちろん良いことだが、たまにしか参加できない活動をやるだけでは何も変わらないということに気づかされた。さらに、ごみをできるだけ出さないようにするためにマイバックやマイボトルを持ち歩くようにするといったような、自分の行動次第で変えられる小さなことが身近にたくさんあることに気づいた。そのため、時間がないから行動できなかったと言い訳するのではなく、日頃の自分の些細な行動を変えていこうと思ったし、習慣化するために今継続して変えている最中である。
全15 回の講義を終えて、私は前より広い視野で物事を捉えられるようになったと思う。SDGs の達成目標は17 個あるが似たようなことをターゲットにしているものもある。そのため、すべての目標を達成するためには一つのターゲットに着目した対策をとるのではなく、様々なターゲットに着目して取り組む必要がある。こういった取り組みを授業で学び、自分で考えてグループ内で意見交換したことで、どういった有用性があるのか様々な観点から考えることができるようになり、実際にビジコンという場で様々なターゲットに着目した一つの解決策を提案することができた。しかし私はこの秋学期、目標達成のために少しは行動につなげることはできたがボランティア活動には一回も参加できなかった。学んだことを今後活かすためにはまず、ボランティアに参加して課題解決のために活動する当事者となることが重要だと講師の方からさんざん言われてきたし、私もそう思う。まずは身近な人だけでも動かせるように3 年の春学期はいろんなボランティアに参加し、課題解決に取り組む当事者となって、この実践講座が自分にとって意味のあるものだったと思えるように頑張りたい。

また、そのはじめの一歩として春休みにオーストラリアに短期研修に行く。
この研修は異文化融合をテーマにしていて、SDGs でいうところの目標3,10,16 番に近い関りがあると思う。日本とは異なって多民族国家であるオーストラリアに実際に行き、現地で学ぶことで今まで気づかなかったたくさんの発見があると思うし、それを第五回に学んだことと絡めて、共生社会実現に向けて今の日本はどうしていくべきなのかについて自分の意見を持てるようになりたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑯

・全体の概要

この授業の構成については、SDGs17 のターゲットについて、それぞれ目標に向かい動いている企業や専門分野とする教授のお話を聞くことができ、とても充実した内容であった。また、講義内容や日本の課題について、自分ごととして考えるために、グループワークがあり、他者の意見から気付かされた視点があり、面白かった。

しかし、問題点として、オンラインと対面参加者の相互の話し合いが難しいと感じたことが挙げられる。都合上、オンラインで参加することになった際、オンライン上で対面授業者の会話が聞きづらく、会話の輪に入りづらいと感じた。それを考慮した上で、グループ編成を行うか、対面とオンラインのどちらかに統一した方が、グループディスカッションやワークが行いやすいと思った。

・心に残った授業回

全ての講義に学びや発見があった。その中でも特に心に残った回は、2 つある。

1 つ目は、自分自身興味のある分野であった「学校の中ジェンダーと子どもの権利」である。この授業回の中でも、性の多様さについて、『心・体・対象×役割・環境・関係＝性の種類は無限大』という公式が印象に残った。実際に、私も性別を判断するとき外見から判断していることが多く、授業内で例にあった世界陸上金メダルリストのセメイヤさんは、外見から判断しにくいインターセックス（男女どちらの性器を持つ人）であることを知り、主観だけで性別を判断するのは良いことではないことに気づかされた。

また、それら性に関する固定概念が髪型や服装、進路にまで大きく影響しているという事実も踏まえ、セクシャルマイノリティにとっても生きやすい社会を育む必要があると感じた。

2 つ目は、第 13 回目「住み続けられる街づくりを」のスウェーデンのコレクティブハウスについてです。私は、北欧の暮らしや働き方に興味があったのですが、このような共同生活の様式について、はじめて知ったため、発見が多くあった。実際にシェアハウスなどは日本でも聞きなじみがあり、イメージがわきやすいが、コレクティブハウスでは、世帯ごとの交流や協働により、家事や食事を分担することに驚きました。ただ、授業内でも論点

とされていたように、日本に同じ様式の共同住宅が合うかといわれると、就業時間や生活時間に個人差がありすぎて、難しいと思います。しかし、子どもや高齢者など年代を超えての交流が少ない世代に、助け合いの人との関わりを持てる素敵な機会なのではないかと感じた。

・身に着いたこと

この講義を通し、最も身についた力は、行動力である。この講義の名称にもある「実践」という言葉通り、実践に移すことが重要であった。そのため、私は授業外でも、SDGs についてのセミナーや展示会に積極的に参加させていただいた。

その中でも、私が印象に残っていることは、SDGs ポスター制作、ボランティア参加である。

まず、ポスター制作に関して、私は視覚的に危機を訴えることで、自分ごととしての意識をより多くの人に発信したいという思いがきっかけだった。デジタル上でポスターを作るのは、初めての取り組みであり、挑戦だった。作り方に関する知識がなかったため、デザインを専攻している友人に教えてもらいながら、協力し作り上げた。この活動を通して、自分だけでなく、人を巻き込んで行動に移すことの楽しさを知ることもできた。

ボランティア活動について、私は秋学期に２つのボランティアに参加させていただいた。

１つ目は、コスメプロジェクトの配布ボランティアである。配布当日は、学生の多くが、長蛇の列を作り、並んでくれたことから、無償支援を求めていると感じた。そして、「ありがとう」という言葉がとても暖かく、やりがいとなった。

２つ目は、福島レスパイトの子ども支援ボランティアである。この活動では、福島の子ども達と尻尾取りやカードゲーム、雪遊びを通し、交流することで、子どもとの距離の縮めることができた。初日の反省会で引率の森田先生が「子どもは自分から寄り添わないと心を開いてくれない」とおっしゃっており、とても心に響いた。教育学を専攻しているため、今後、小学校での教育実習がある。その際、このアドバイスを胸に、子どもの心に寄り添うことを意識していきたい。

・これからどう活かすか。

SDGs は、社会との関連がとても深く、この講座の受講生として、教育を受けた者として、今度は、それを社会に還元していかなくてはならないと思う。そのために、大きな行動と小さな行動の双方からアプローチを行う。

まず、大きな行動として、私は社会に出た際、働く女性のロールモデルになりたいと考えている。この講座で、私は、ジェンダー平等について、新しい考え方や働き方を考えるきっかけとなった。そのため、まず、就職活動の企業選びの際、女性が働き続けられる会社を選択したい。そして、入社後は、自分が働く女性の見本として、ジェンダー平等の観点はもちろん、それ以外の SDGs の目標に対し、社内変革を起こしたい。

次に、小さな行動として、フェアトレードや環境に配慮した製品を買う。大好きな服も古着を買うことや、リユースショップを利用するなど、今ある資源に感謝し、大切に使うことを心がけていきたい。

これらの意識の変化は、この講義を受けなくては絶対に得られなかったことである。だからこそ、ここで得た知識や経験から、持続可能な社会に必要不可欠なことを自分ごととして考え、貢献する機会を、大学生のうちに多く活用していきたいと思う。今回は、このような貴重な機会を頂き、ありがとうございました。

SDGs 実践講座最終レポート⑰

今回の SDGs 講座は、全体を通してゴールに基づき、講義が行われた。各回では、グループワークが必ず行われ、そのたびに授業のメンバーと議論を深めることができた。通常の講義では、そこまでグループワークがゼミナールを除いては行われることは少ない。しかし、この講義は必ず毎回のようにグールプワークが行われて、授業の講義を受けてそれに基づき議論をメンバーとしたことは、自然と講義の内容振り返る機会となっていた。

心に残った授業回としては、自分は 2 つある。一つ目は、もちろん自分の今回の講座のテーマとして選択し、現在、東洋大学の SDGs アンバサダーとして最も自分が大事に活動しているパートナーシップで目標を達成しようを取り扱った回である。最終プレゼンの発表につながる部分も多く、パートナーシップでの分野での日本における達成度があまりにも低いことを通し、自分ごととして SDGs の問題をいかに捉え、取り組んでいけるかについてものすごく考える機会となっていた。講義の中で、出てきた想像力と勘というキーワードが心に残っており、後者のことに関しては、自分も勘で行動することは良くあるので、非常に共感できる部分もあった。そもそも、勘が成立しなければ、世の中はもっと不便になっていたと思うし、だいたいのチャレンジは諦められていたと思う。自分がこの授業で最も注目したのは想像力というキーワードの方である。なぜなら、自分が思うに人間は想像力があるからこそ、未来に向かって目標立てたり、お互いに協力したり、言葉を通じてコミュニケーションを取ったり、するだけでなく目に見えないものに概念を与え名前を付けてきたと思うからだ。実際に、かつて有名な歴史学者が人間と他の生物の違いは何かということを述べていた。人間は、細胞レベル、能力値を考えるとチンパンジーと大して変わらない。しかし、人間はこの地球上を支配することに成功した。それは、なぜか？想像力があったからだったのだ。チンパンジーは、人間の持つような社会や法律、制度システムは今のところ持っているとはされていない。ましては、グローバルに活動するなんてましては考えられない。想像力の象徴が貨幣であり、人間は貨幣のものに対して意味と価値づけを行うことができ、合理的に社会を動かすことができたからこそここまで発展してきたのである。それと、同時に社会の中で協力しあい、共に生きてきたのである。ここで思うに、SDGs も同じで、おそらくこの目標を掲げて、達成しようとしている唯一の生物だと考えられる。地球の未来を想像し、行動できるのは人間しかおらず、地球を変えようとしてできるのも人間しかいない。つまり、きっかけは常に想像力のある人間であり、我々人間が地球の運命を握っているといっても過言ではない。他の生物を守るという発想も人間特有の発想であり、あったことのない人のために行動できるのも人間特有のものである。だからこそ、社会問題に取り組むということも人間にしかできない。そういう意味で自分たちができることを考え、行動することがいかに重要かわかる講義と自分にとってなったのである。自分はこの講義を通して人間の締めというところに注目したのである。2 つ目は、講義を通して新しい企画を生み出すことにつながった第 12 回のアイサーチ様による講義の回である。実際、この講義の後、自分はアイ

サーチによるビーチクリーンに参加している。この講義は、内容ということもそうだが、今後のアクションにつながったということで心に残っている。

この講義で身についたことは、いかに世の中にあることを自分ごととして捉えることができるかについて考えることができるようになったことである。想像力を使って、未来にこのまま突っ走るとどうなるか考えられるようになったことである。自分は、かつて自分が社会問題ついて、考え、行動したところで意味なんかないのではと考えていた。しかし、アンバサダーなどの活動を通じて、自分の力が届かなくても端の端くらいにはなれるのではないかと思えるようになった。自分の活動が、自分によって達成することができなかったとしても、やがて積もり積もって社会へインパクトを与えられるのではないかと思えるようになった。実は、自分の社会から遠く離れた事象について、自分事のように捉えていくのは難しいのではないかと思う。なぜなら、すぐそこで起きていることではなく、自分から遠いことについてだいたいの人間は自分のことで精一杯で考える余地がないからだ。世の中の社会人が地球レベルの問題をどれだけ考えているのか、それを自分事として考えているのか。そんな余裕はないだろう。すぐそこで起きている問題に対して取り組むことで自分も含め精一杯である。そんな中で、大学生といううちに考えることができたのは非常にいい経験であったと思う。

自分は、この講義は、通過点であり、きっかけであると考えている。今後のアクションとしては引き続きパートナーシップを推進するための活動より一層強く進めていきたいと考えていきたいと考えている。この講義を通して考えて考えたことはたくさんある。しかし、この講義は、受けること、考えることが目的ではなく、その先への行動へつなげることが重要だと思うので、それを意識しながら活動していきたいと考えている。まずは、アンバサダーの活動知ってもらうことから行動していきたいと考えている。

SDGs 実践講座最終レポート⑱

経済学における、社会は合理的だ。完全競争市場と不完全競争市場に限らず、経済学の中では利潤最大化が大前提となっている。それをもとに考えれば、政府や企業、そして消費者の行動を予測することができるし、各経済主体の選択を変更することだってできる。環境に配慮するために、ピグー税をかければ企業の行動を変えることができるし、関税をかければ貿易量を変更することだってできる。大学 1 年生の頃、学びたての経済学というものは私にとって最強のツールであった。魔術やオカルトではない。論理的に証明できる信頼できるような経済学を使えば、社会を思った通りに動かせるのではないかと思った。しかし、私の中の経済学絶対感がなくなったのもまた、大学 1 年生だった。かねてから知ってはいたものの、その全貌は知らなかったラナ・プラザの悲劇が起こった背景について知ったからだ。経済性を求める、できるだけ安いものを提供しようとする裏側で人々の生活が犠牲にされていた。悪の経済学の存在を知った瞬間だった。

確かに、経済学は時として社会に最悪の状態をもたらすこともあるが、その論理性を持って社会を悪い方向にではなく良い方向に導くことができるのではないか。ではいい方向とはなんだろうか。これが、SDGs 実践講座に参加しようと考えたきっかけであった。

SDGs 講座の中では、普段は考えたこともないような問題が、考えたこともないようなさまざまな視点から考えられ、克服されようとしていた。スウェーデンで取り入れられているコレクティブハウスを研究すること。以前の私であったら、それが日本の少子高齢化が抱える問題を解決できるかもしれないなんて考えなかっただろう。私の考えている社会に良いことが、全世界にとって良いこととなるとは言えない。生活することにもはやなんの不便もない、日本に住む私だからこそ、世界にはいまだにゴミを漁って生活している人がいることを忘れてしまう。新たな新兵器、AI だってまだまだ完璧ではない。Twitter でバズる、どんなに素晴らしい絵を描くことができたとしても、AI はコンピュータであり、問題を認識できない。知らなかったことも、もっと知ってみたかったことも、ほんの少しだが、知ることができて、私の世界が広がった。

社会の中で私が認識していた問題だけでなく、多くの他の問題。ジャンルは違うかもしれないが、一つの社会で起きているだけに、似ている点もある。一方向だけで考えられてきたということだ。一方向から考えられた策には課題がある。ラナ・プラザの悲劇もそうだ。経済性からのみ考えられて、実行されたことが問題だ。働く人の文化や、精神面、環境面、多くの観点を考慮すべきだった。少子高齢化が進むと、孤独死が増える。核家族化が当たり前という前提があるからこの問題が起こる。コレクティブハウスの観点からはどうだろうか。SDGs は地球が抱える問題を明確に分類したという点に成果があると初回の授業で学んだ。それぞれの問題にはプロフェッショナルとなるべき専門家がいるはずで、17 この目標が分類されていることは有益であるが、さまざまなつながりがあることは忘れてはならない。

私のこれからの人生設計にも SDGs は潜んでいた。なんとなく外資系が良いと思っていたが、実際そうではないのかもしれない。労働経済学に関する講義でふと頭をよぎった。成長力。私が大学卒業後の最初のキャリアに臨む上での基準に気づかせてくれた。

SDGs と聞くと、どこか世界規模の話や日本ではないどこか遠くのことのお話のように聞こえてしまう。私が SDGs 講座を受講しようと考えたきっかけもそうであった。しかし、実際の SDGs は、目の前にある。この講座が自分の考え事にまで浸透してくるとは思わなかった。本講座でよく言われる「自分ごととして考える」というのは、SDGs の目標達成のための行動を普段の生活に取り入れるというだけでなく、目標を自分と比べてみることも一つなのではないだろうか。

一つの問題を多方面から。SDGs を自分のなかに置き換える。より良い社会とは何か。より良い社会にするための第一歩を踏み出した私は、今後、広い世界を広い視点から見つめていきたいと思った。今、私がみている世界は、私がいる世界であって、本当に私がいる世界ではないかもしれない。ポイ捨てをする人がいることはわかっていても、実際に行ってみないとそのイメージは掴めない。富士山麓で国道沿いのゴミ拾いのボランティアに参加した時、初めて、ポイ捨ては歩いている人が飲んでいたペットボトルを捨てる感覚ではなく、車の中にあったゴミを山に投げ捨てるイメージが適当であることを知った。社会の問題のためにボランティアがあるのだとすれば、今後も私にできるボランティアから参加して、今までになかった考え方や現実を知っていきたいと思った。また、学び続けることも私にできることだ。冒頭にあったように経済学は確かに負の側面もあるかもしれないが、文化や環境などさまざまな点が考慮されたモデルで、その論理性を活かせばきっと社会を自然と良い方向に導いていけるはずだ。私は、もっと学んで、より良い社会を作る一員となることを願っている。

SDGs 実践講座最終レポート⑲

このレポートでは、全体の概要・心に残った授業回・身に着いたこと・これからどう活かすかについて述べていきます。

【全体の概要】
SDGs 講座－17 日ゴールへの目標－では、SDGs に特化した内容について毎回違う講師の方からお話をお聞きして学びました。貧困、水資源の観点から見た途上国と日本の違い、移民・難民との共生、気候変動対策とエネルギー、パートナーシップ、飢餓、ジェンダーと子どもの権利、人工知能と人間社会、海の豊かさ、住み続ける社会のデザイン、日本人の働き方と働きがいの授業を受けて、SDGs に関する知識を深めました。

【心に残った授業回】
心に残った授業は、目標 14「海の豊かさを守ろう」についてです。海については、高校生の時に一枚の衝撃的な画像を見たことがきっかけで関心を持ちました。海に打ち上げられたクジラが、口からは大量のごみが溢れ、腹部は切り裂かれ、苦しそうに死んでいるというオブジェです。これを見てから海洋ごみとそれが海の生き物に与える影響についてより深く知りたいと思っていました。
海の豊かさについての授業では、海洋ごみや富栄養化による海洋汚染についてと、持続可能な水産資源についてのお話がありました。海洋汚染に関しては、今までに生物多様性条約、ワシントン条約などで自然を守る動きがあり、今もこれに関連する COP という国際会議が開かれているそうです。今はテレビを視聴する若者が少なくなってきているため、テレビなどのメディアでこのトピックがあげられることがあまりありませんが、多くの人の関心を得なければメディアに取り上げられることがないため、認知度を上げていく必要があると思いました。また、持続可能な水産資源については、海にいる動物をこのままのペースで捕り続けていると、生態系が崩れてしまい、もう捕れなくなってしまうと言われているそうです。そのため、環境にやさしい魚の漁獲方法をしている印である、MSC 認証のついた魚の製品を買うとよいと聞きました。一部のエリア一部の魚しか捕らないとなると、自然を壊してしまいます。自然と向き合うときは、人間軸のみで考えず、海の中の生き物のことや暮らしている地球にも配慮しながらでないと、知らない間に恐ろしいことになってしまうんだなと感じました。
私はこの授業で、砂浜にあるプラスチックはどのようにして海へと流れ着いたのかということを疑問に思いました。海洋ごみは陸地からの流入が 8 割を占めていて、直接海に捨てられたのが 2 割を占めているそうです。また、砂浜に流れ着いたごみや海に浮かぶごみなどが多く、海の中の生き物はただ泳いでいるだけで体の中にごみが入ってしまいます。2050 年には魚の数よりごみの数のほうが上回ると予測されています。さらに、プラスチックには有

毒物質を付着させる恐れもあるため、魚の体内にゴミが入ると、それを食べた人間までも健康に悪影響が出てきてしまいます。陸地から流入するごみは町にある排水溝から流れて、川へ行き最終的に海にたどり着きます。つまり、排水溝にどれだけごみや有害物質が入らないかが重要だと考えられます。よって、ポイ捨てを行わない、プラスチックごみをしっかりとごみ箱に捨てるなどの、ひとりひとりが気を付けるべきことをどんなに小さなことでも続けることが持続可能な未来につながると考えます。細く長く、気楽にやるほうが続けられるのではないかと思いました。
講師の方の、「海は命の源であり、人間の身勝手な行動が自然を破壊してしまう」という言葉が印象に残りました。この目標を達成できれば、目標 17「パートナーシップで目標を達成しよう」と、目標 12「つくる責任 つかう責任」と、目標 5「ジェンダー平等を実現しよう」の 3 つも同時に達成できるそうです。

【身についたと思うこと・これからどう活かすか】
この授業を通して身についたと思うことは、問題を解決するにあたってチームで協力する力です。最後にグループで自分たちが選択した目標についてのプレゼンテーションを行いました。話し合いをするときに難しいと感じたのは、メンバーの中でそれぞれ考えている、認識していることが違った場面です。すべて話し合いは LINE を通して行われましたが、それぞれの生活スタイルがあるため進行がスムーズでなかったり、相手が言ったことを理解できたりしていないまま進んでいくことがありました。しかしそれでも、全員が考えていることを言ったり積極的に議論に参加し、お互いを励ましあいながら話し合いを重ねたりできたため、最終的にはしっかりと準備をすることができました。
また、普段からはあまり意識していなかった何気ない行動を意識するようになりました。例えば、物を購入した際にビニール袋をもらわないことや、お手洗いを利用した後は便座の蓋を閉めてから流すことなどです。このように身近なもので自分にもできることはなるべく実践しようという気持ちを持つようになりましたが、貧困や飢餓、ジェンダーについてなどの、現在日本にいる一人の人間である自分にとって、少し離れていて身近に感じづらい問題に関するアクションはまだ起こせていない状況です。この授業で学んだことをもう一度復習し、まずは SNS で発信していくことや他にもどういうアクションを起こせばいいかを知ることを目標に、この授業で学んだことを活かしていきたいです。

SDGs 実践講座最終レポート⑳

・全体の概要

この 15 回の講義で、私たちは SDGs における全体的な知識を学び、そこから挙がった課題や解決策をグループで話し合いを行ってきた。私はこの 15 回の講義を受けたことで、自分の本当にやりたいことを明白にすることができ、それに対する具体的な行動を計画し、1 部実行に移すことができた。

特に「パートナーシップ」というキーワードは、私が今まで無意識に重視してきたことであり、パートナーシップの構築を私が仲介役となっていきたいとわかった。この授業では毎回必ずグループワークがあったが、そこで 1 人では出てこなかったようなアイディアが出てきたことがあり、そこからパートナーシップの重要性について気づき始めていた。毎回のグループワークの中で、ある課題に対する解決策や私たちにできることというのは、現状を周りに知ってもらう、周りを巻き込んでやるというように、必ず 17 番目の目標に関連しているアイディアが出ていたと感じた。そのため、目標を達成するためにはまずはパートナーシップを築くことが必要だということに気づいた。それから特にグループワークを中心に取り組んでいくうちに、私は人のアイディアを活かすこと、リーダーシップを取っていくことが好きだということがわかり、「パートナーシップを築くこと、すなわち人と人をつなぐことで人の第 1 歩となる挑戦をサポートしていきたい」という自分の軸が定まった。以降は授業外の時間でも、私のネットワークの広さを活かして、学内外にボランティアや SDGs の活動を広めていけるようになった。

SDGs はこの講義が終わったから一緒に活動も終わりという訳では無い。むしろこの講義で得た、自分のやりたいことと SDGs をかけあわせて、これから実行に移していくべきである。そのためには、この授業自体が築いたパートナーシップを壊さないことが必要である。授業内で、グループワークで話し合った仲間と今後も交流し、一緒にアクションを起こしていく枠組みが必要である。まずは SDGs アンバサダーへの加入を促し、来年度以降一緒に SDGs アクションをつくっていくことは今後の第 1 の目標である。また、最終プレゼンテーションを一緒に発表したグループ仲間とは、実際にプレゼンテーションの中で提言したワークショップをなるべく期間の空かないうちに開催したい。

・心に残った授業回

私はこの 15 回の講義で特に印象に残っていた回が 2 つある。

ひとつは、うまい棒から考える SDGs17 というテーマで講演していただいた、高田様の第 7 回講義である。私はこの講義を受けて 17 番目の目標に興味を持つようになった。この回の前から私はパートナーシップの重要性については気づいていたが、それをどのように構築していくか、構築したものを如何にして継続させていくか、普段の SDGs アンバサダーの活動の中で課題となっていた。ちょうどこの講義を受けた時期にアンバサダーの活動

も活発化してきていたが、どうしても活動メンバーが固定化され、偏ったコミュニティで進めてしまうことに危機感を持ち始めていた。また、ひとつのプロジェクトが終わったあとにできたパートナーシップをどのように振り返り、それを持続していくか、分からない状態にあった。その 2 つの悩みについて講師の方に相談してみると、まずは活動も終わった後も SNS 等を活用し、世間話でも良いので会話を切らさないこと、自分からメンバーの偏りを作らないため新しいメンバーを常に入れ、直接あなたが必要だということを伝えれば良いとアドバイスをいただいた。このアドバイスが私にとってとても参考になり、それ以来アンバサダーやその他の活動を行う際はこの言葉を意識するようになった。

もうひとつ印象に残っていた授業回が、スウェーデンのコレクティブハウスにおける共食活動の運営と環境というテーマで講演をいただいた、水村先生の第 13 回講義である。もともと SDGs11「住み続けられるまちづくりを」には関心があり、その目標に関する私の活動の経験から共感できる部分が多くあった。学外で関わっている湯河原の居場所づくりの活動もコレクティブハウスと共通する部分が多くあると思っている。子ども食堂などコモンミールの例は、食費を賄えるというメリットだけではなく、地域の孤独を解消し、コミュニティづくりに貢献するということに気づいた。また、私は全ての人に自宅、学校や職場とは別の第 3 の居場所が必要だと考えているため、その入りとしてコモンミールはとても有効な手段だということに気づいた。これからの活動にも活かしていきたい。

・身に着いたこと

私はこの 15 回の講義を受けて、大きく 2 つの力が身についたと感じた。

1 つ目は、「やりたいと思ったことをすぐに実行に移す力」である。12/16 の第 12 回講義、アイサーチさんのお話を聞いた際、海の豊かさを守るためにできることをグループワークであげた。その時に、ゴミ拾いのボランティアは誰でも参加しやすく、楽しく参加できるということを、グループワークを通じてわかり、すぐに参加したいと思った。そして講師の方から、ビーチクリーンのボランティアの紹介を受け、授業終了後に講師の方に話しかけ、直接参加を申し込み、実際に 1/7 に鎌倉で行われたビーチクリーンのボランティアに参加することができた。さらに、その時に出会った多摩大学や日本大学の学生ともつながりを築くことができ、多摩大学との学生とは合同でビーチクリーンのボランティアを企画することになった。1 度興味を持ったことが、その後の継続的なつながりの発展を実現することができた、良い例だと思う。

2 つ目は「グループでひとつのことをやり遂げる力」である。この授業では第 8 回からグループメンバーが固定化され、最終プレゼンテーションまで同じメンバーでグループワークなどを行った。私たちのグループは SDGs17 の「パートナーシップで目標を達成しよう」というテーマで発表を行うことになった。この 17 番目の目標は 16 番目までの他の目標とは異なり、それらの目標を達成するための手段をそのまま目標にしたものである。そのため、どのようなアクションにつなげるか考えることが非常に難しかった。しかし、グループで授

業時間外に何度も話を積み重ねていくうちに、「パートナーシップを築くことでどのような世界を実現したいか」ということを考えると、結果的にパートナーシップの構築が他の目標達成にもつながってくるという考えが一致し、ひとりひとり考えを述べていった。その結果、皆で SDGs に取り組むからこそ楽しく達成に向けて取り組むことができ、感謝や笑顔の溢れる世界を実現できるという結論に至った。まさにこの結論に至るまでのプロセスもパートナーシップがあってこそ、生み出されたアイディアである。私はこの授業を通して、パートナーシップを築き、皆でものごとに取り組んでいく大切さを知ることができた。

・これからどう活かすか

私はこの授業を通して、「パートナーシップ」というキーワードを大切にし、これからも人と人をつなげる役割を担いたいと思った。そのため、学内外で SDGs アクションを自分なりに楽しく起こすことができるということを発信していきたいと考えた。

具体的には、来年度以降も SDGs アンバサダーとして、SDGs を広めていくことに取り組みたい。現在アンバサダー内で SDGs のやりたいことを自らの「好き」とかけあわせてできることを考えるワークショップを行っているため、これを東洋大学内全てに対象を広げ、東洋大学生のやりたいことを見つけるサポートをしていきたい。

また、ボランティア支援室のサポートスタッフとして、ボランティアの魅力を他学生に広める活動をしている。今後も東洋大学生にボランティアに参加してもらい、そこから新たなつながりを築いていきたい。私自身も自分のフィールドを広げるため、今まで経験したことのなかった分野のボランティアに挑戦していきたい。

学外では湯河原町の居場所づくりに関わっていて、来年度から休学し本格的に関わろうと考えている。今年度夏にも行った課外活動育成会のボランティア企画を、コミュニティづくりやまちづくりの要素を追加しさらにパワーアップして、定期的な企画にしていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート㉑

半年間この SDGs 実践講座を受けてきて、自分がする些細な行動が良くも悪くも地球環境に影響することを実感した。一人暮らしであるため節水や節電には気を付けている一方で、忙しい期間になると水筒を持っていくことが億劫に感じ、ペットボトル飲料を買ってしまうことが多々あった。この講座を受けていく中で少しずつのその意識が変化し、できるだけ環境に良いとされる行動を意識して取れるようになったと感じる。

この SDGs 実践講座の内容は、履修登録時に期待していた内容そのものだった。各分野の先生、特に他キャンパスや外部講師の先生の講義を聞ける機会は非常に貴重で勉強になった。もし次もまた履修できると仮定するならば、その時は他キャンパスからオンライン参加してくれていたメンバーと一緒になってどこかのキャンパスで対面授業を受けたい。14 回目の講義をオンラインで参加したが、グループワークの時には話に入りづらかったり、メンバーの表情が見えなかったりなど苦労する点が多かった。対面で受けている時にはオンライン参加者に多めに話を振るなどして調整していたが、満足のいくようなグループワークができたことは数回しかなく、なかなか難しいと感じる。もし機会があれば、同じチームで活動していたメンバーを 1 つのキャンパスに集めて話してみたい。

SDGs 実践講座のなかで、心に残った授業は 2 つあり、 1 つ目は第 12 回実施のアイサーチ・ジャパンの授業、 2 つ目は第 13 回実施の「スウェーデンのコレクティブハウスにおける共食活動の運営と環境」の授業である。

第 12 回に実施されたアイサーチ・ジャパンによる海の豊かさ、特に海洋ごみに関する話題は、筆者の所属グループのテーマでもあったため、とても心に残っている。一番心を打たれたのは、菜央先生の授業を通して伝わってくるイルカへの愛だ。水族館や海の生き物が大好きな筆者には、愛を語っている先生がキラキラ輝いて見えた。海の生き物の写真などを見ていく中で、海洋ごみの深刻さを実感した。この授業を履修する前から海洋ごみの存在は知っていたし、小学生時代には地元の海岸清掃活動とウミガメの放流を行っていたため、ある程度の知識は備えていたが、大学生になった現在でこれほど深刻な問題に発展していることにはとても驚いた。陸上にあるプラスチックごみが海に流れているため、海洋ごみの大部分の原因は陸上で適切なごみの処分をしない人間たちの行為であり、そのせいで魚たちがプラスチックを食べてしまうという今まで知らなかった現実を知り、何か行動できないかとグループワークで必死に考えた。するとグループワークでは海洋ごみ問題解決の一歩になりそうな大学で取り組める案が生まれた。この案が実現するかは分からないが、少しでも実現に向けて授業期間中に行動に移せたのは、大きな一歩だったと感じる。

2 つ目の、第 13 回に実施された「スウェーデンのコレクティブハウスにおける共食活動の運営と環境」の授業は、筆者が不動産に関する法律を学ぶゼミに所属しており今年宅建に合格したことで住宅への興味関心が高まっていたために心に残ったと思われる。この授業を通して、スウェーデンにおけるコレクティブハウスの存在は特に高齢者を中心に重要な

意義を持つことが理解できた。日本も超高齢社会であるため、今後コレクティブハウスが普及するのかを考えてみたが、やはり難しいのではないかと考える。日本の国民性を考えると内向的で忙しい人が多く、今や隣人との接点も少ないため、共同作業を好む人は少ないと思うからである。しかし一回普及すればそれに順応できると考えることもできるため、現時点で東京に存在するコレクティブハウスの成功例がもっと周知されれば、日本にもコレクティブハウスが近い将来普及されるかもしれないと予想する。特に共食活動（コモンミール）で感じている意義・効果（授業内資料では、住民同士の結びつきを強める・互いをよく知るために共に作業できる、という内容がアンケート上位の回答だった）を周知することで、今の日本に足りない部分を補うことができる制度があるから入居してみようなどと考える人が出てくるかもしれない。

このSDGs実践講座で身についたことは、SDGsに関する基礎的な知識と各国の現状や、自分達が取り組める内容について、自分達が取り組む行動がたとえ小さくてもその積み重ねで必ず現状は変わるという知識と、どうやったら解決できるか・自分達が取り組める行動を考える力などである。また授業内容と直接の関係はないかもしれないが、オンライン参加者と対面参加者が共に快適にグループワークができるようなファシリテーションのスキルも身につけることが出来た。発表までの打ち合わせ等は LINE を使ってコミュニケーションを取っており、計画的に発表への準備をメンバー全員で進めることができたため、グループで行動し何かを成し遂げる力も身についたといえる。

これら身についたことをどのように活かすかについて、まず、心に残った授業１つ目の部分で少し触れた話題である、海洋ごみ問題解決の一歩になりそうな大学で取り組める案(ウォーターサーバーに関する提案)の行方を最後まで見届けたい。残念ながら大学では取り組むことができないという結末になったとしても、友人等に講義で学習したごみ問題の知識を広めることは可能であるし、他にもそれをもとに取れる行動はいくらでも存在するはずだと考える。まずはみんなに知ってもらえるようにここで学んだ知識を活かしていきたい。そして、SDGs アンバサダーとなって他の分野の SDGs 活動をすることも視野に入れながら、自分自身の行動が SDGs へ貢献できる行動につながっているかを意識して日常生活を送っていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート㉒

講座を受講し SDGs の 17 のゴールについて幅広く学ぶことができ、その上で自身が最も関心を持っていることや問題意識を感じていることを再認識することができた。しかしながらディカッションについては、毎回時間が 10 分ほどしかなく、グループ内で各自簡単な感想を共有するに留まった。ディスカッション内容の共有の時間を短縮（各グループ 1 分以内にする、数グループのみ共有しそれ以外のグループは授業後 ACE のスレッドにまとめるなど）したり、ディスカッションのテーマを 1 つだけにしたりしてディスカッションの時間を増やすと議論が深まるのではないか。また、グループでの最終発表は非常に学びが多かった。講座内で発表の準備をする時間がなかったため自分たちで時間を捻出し準備を進めていく必要があり、それが大変でもあったが発表に対するやる気やグループの士気が高まった要因でもあった。学年も学んでいることも異なる人々が発表という 1 つの目標に向かって準備をしていくことに難しさも感じたが、発表を終えたあとには達成感を感じることができ非常に良い機会となった。

心に残った授業回は第 10 回内田先生による「ジェンダーギャップと学校」である。例えば、この講座で扱った貧困や気候変動などの問題は「貧困に陥る人が増えるべきだ」「気候変動が進行するべきだ」と感じている人は少なく、多くの人が課題感を持っており、行動に起こすことはしなくとも解決したほうが良いと感じている問題であろう。しかし、ジェンダーの問題は、そもそも解決すべきだと問題意識を感じている人も多くはなく、先述の問題と比較して、明確な正解はなく、ジェンダー平等が推進されることが正解なのかすらも分からない、非常にその人個人の価値観や社会背景に左右される問題である。また、問題意識を持っていても行動を起こすリスクが大きく次のアクションに繋がりにくい問題でもある。例えば、「企業における女性の管理職割合が低い」という問題については、筆者は管理職になりたい女性が自分ではどうしようもできない理由（環境など）で管理職に就くことができない場合や、女性のロールモデルになるような上司がおらず不安・男性ばかりの環境で不安などの理由で管理職に就くことを諦めている場合、問題であると考えている。しかし、すべての女性が管理職に就きたい・昇進したいと思っているわけではなく、女性だからといって、すべての女性が女性の問題に問題意識を持っているわけではない。さらに、問題意識を持った人が女性管理職を増やそうとアクションを起こしても、社内で理解を得られず孤立したりその場に居づらくなってしまったりすることもあるだろう。しかし、そのような難しい問題だからこそ、考えることを諦めてはいけない重要な問題だと感じ印象に残っている。

身についたことは、これまで触れることのなかった理系分野の知識や知っていた課題に対する新しい取り組みに関する知識、多様な考えや価値観を受け入れる姿勢である。植物やエネルギー、AI などの理系分野について専門の方から学ぶ機会は今回が初めてであり、勉強になった。初めて学ぶことだけでなくすでに学んでいたり関心を持っていたりしたことでも、初めて知る取り組みがあり課題の再確認などもできた。ディスカッションとその共有

では、グループのメンバーと意見交換する際は言うまでもなく、他のグループの意見や発表の仕方においても、「自身と異なる」という場面に遭遇することが多かった。だからこそ異なる他者を受け入れる姿勢が必然的に必要となり、他者の異なる意見を聞いて自分の意見に対する想いを強めたりすることができた。

講義での学びを活かして、今後は次の 2 つのことを実践したいと考えている。1 つ目に、自分の価値観を大事にすることである。筆者は 4 月から社会人となり企業の一員として勤めることになるが、社内には多様な価値観を持った人が働いており、特にジェンダー観については自身と価値観が合わないと感じることが多いのではないかと危惧している。企業の目標を達成するために社員として働く上で、社内の規則はもちろん、価値観や規範に従わなければならないことばかりであろう。しかしながら、この講座の受講生として、当たり前を疑う社会学を学んだ者として、おかしいと感じたことに蓋をせず、常に疑問を持つ姿勢を大切にしていきたい。社内のルールに従い尊重しようとする気持ちを持ちつつ、自分の価値観を捻じ曲げず大事に持っていたい。2 つ目に、アクションを起こし続けることである。社会人になると自由に使える時間が少なくなるが、ボランティアに参加したり仕事以外で人と関わったりする時間を持ち続けたい。学生時代に様々なボランティアやインターンに参加し経験と人脈を増やすことができたため、社会人になってもそれらを大切に積極的に社会と関わっていきたいと考えている。入社後は接客業であるため現在よりも多くの人と関わることになる。様々な背景や課題を抱えた人と関わる上で、この講座で学んだことが活きてくるのではないかと考えている。

SDGs 実践講座最終レポート㉓

・全体の概要

授業全体を通して、SDGs の何が問題であり、どのような実践がなされているのか、自分の専門域を超え理解する事が出来た。講義を受ける前は漠然と SDGs を知っている程度だった為、なぜ重要なのか理解できていない状態で話題だから、周りがやっているからエコバッグを持つなどの行為をしていた。しかし全体を通して何が問題なのか、なぜ SDGs が重要だと言われているのかを学び、根本から理解出来た事で他人事ではなくなり自分の考えを持って語り、更に行動に繋げることができるようになった。

・心に残った授業回、身についたこと

心に残った授業回はまず第 7 回の高田さんの講義である。はじめは漠然としていたパートナーシップへの理解が深まり、自ら行動していこうと思う事が出来た。また「6 次の隔たり」や「シチュエーションリーダー」「想像力の限界」などのお話は、今後社会人になるにあたり意識していこうと思い、かなり印象に残っている。特に 6 次の隔たりについては就職先の社長からも同じような話をされた事があり、人との繋がりが自分自身の生活だけでなく仕事にも影響してくる為、面倒がらずに積極的に広げていきたいと感じた。自分に出来ている事と出来ていない事に分けながら高田さんのお話を聞き、「行動」というキーワードが自分の中で挙がり、自分自身の課題も見出すことが出来た為多くの収穫があった回だと感じる。行動に繋げる為に第一に意欲が必要であり、この講義以降今まで以上に人間関係の大切さを意識するようになり、積極的に他人を知ろうという感情を抱けるようになったと感じる。

次に廣津先生の講義にて、視点を変えることで貧困・食糧問題の幅広さに気付くことが出来、印象に残っている。貧困、飢餓と聞くと、目に見える物質的な食糧不足が真っ先に思いつくが、それに伴う栄養失調、栄養素の欠乏という見えない飢餓の存在を学ぶことが出来た。それにより、よりミクロな視点を持つ事は新たな問題が見え具体的な対策を考える際に役立つ為、重要であると感じた。またそのミクロな視点を持つためにも自分自身の専門分野に閉じこもって満足するのではなく、まずは興味を持ち情報収集していきたいと感じた。

最後に全体を通して身についたこととして、行動力が身に付き、視点を増やす事が出来た。一つ目の行動力については、講義を通して自らの頭で考えた事で自分の考えが確立し、加えて他人の考えに興味を持ち意見を交わしたいと思うようになり、色々なコミュニティで SDGs に対する意見を聞いてみるようになった。また活動家である長坂真護氏の展示会に足を運び講演を聞いた際に、自分なりに考えを持ち講演後直接本人とお話をするなど、本講義を受ける前では足を運ばなかっただろう展示会に行き、活動家本人とお話をするまでの行動力が身に付き、自分自身も驚きであった。このように興味を少しでも持ったら積極的に行動することを今後も習慣化させて知識を増やしていきたい。視点を増やすという事に関しては、15 回の講義のほとんどでグループワークがあったことから自分で考える癖がついたこともあり、日常生活の中で「これは環境に良いことなのか…」「日本では当たり前だが途上国では…」と考えるようになった。このことからも自分事として考えるというのは、思考の癖付けに繋がり良い効果があったと感じた。多角的に物事を見る事を当たり前に出来るようになりたい為、今回得た視点を忘れずに今後も日々意識していきたい。

・これからどう活かすか

これから活かす事として、まずは日常生活の中で出来ることからアクションを起こしていきたいと考える。特に今回グループ発表に向けて「目標 12：つくる責任つかう責任」について調べ、グループでアクションプランを話し合った際、実践できるアクションプランがかなり多くあった。中でも例えば「ものを大切に長く使う」というアクションについては実際に買い物に行く頻度が減り、安いものを多く早いサイクルで消費するのではなく、良いものを長く使う意識を持つようになった。またフードロス問題に対してはマイボトルを持つ事が当たり前になり、野菜の葉や茎まで使えるところまで使う事も当たり前になった。つくる側の責任という面では、アルバイト先のアップルパイ専門店で形の悪いパイを多く廃棄していたことに気付き、社員に割引で販売する事を提案することが出来た。卒業後は食品メーカーに勤める為、このように消費者という視点だけではなく生産者の視点でフードロス問題に対してアクションを積極的に起こしていきたい。またアクションを提案する際講義で学んだことを活かし、なぜ重要なのかうまく言語化して説明することで、ただ行動を起こすだけでなく、関わる人々に根本的な問題から理解してもらい輪を広めていきたいと考える。これは目標 12 だけでなく、目標 17 のパートナーシップとも関連していると考える。

SDGs 実践講座最終レポート㉔

【全体の概要】
最終で今までを振り返った際にいつの間にか数個しか SDG s について知らなかった自分が前よりも多く知っていることに驚いている。SDGs という言葉に最初は大まかなイメージしか浮かばなかったが、授業を受講してみると個人、起業、政府といった 1 つの組織同士が複雑に絡み合い取り組みをしていることが分かった。各講義に出演してくださっている講師の方の取り組みはそれぞれ異なるものの最終的にはみんなが同じ目標に辿り着く、そして組織に限らず、一見繋がりがなさそうなカテゴリー同士でも学ぶとそれぞれがどこかしらと結びついており、SDGs はカテゴリー1 つを達成するのではなく全体のカテゴリーを取り組むものだと感じた。SDGs には 17 個の目標を掲げており、貧困や飢餓、ジェンダは普段耳にするがパートナーシップや海の豊かさ気候変動といったことは知識が浅くどんなことをしているのかも知らなかったのでこの授業を通して個人・企業が実際どのように取り組みを行っているのか学べたのが良かった。そして、取り組みや行動を起こしている張本人の方から貴重なお話しを聴けたので、インターネット等で手に入れる中身が薄い知識ではなく、現地にいる人しか知らないことや問題を知ることができたため想像し易く共感しやすかった。そう思うとこの授業はとても貴重でありがたい授業中だったと感じた。
【心に残った授業回】
うまい棒の回。美味しいうまい棒を沢山貰えたからという理由もあるが SDGs と企業と考えた際に企業の取り組みや政策といったイメージがあるがまさかお菓子のうまい棒が SDGs と結びついていると思わなかったので、衝撃が残った回である。うまい棒は味の種類が多く小袋になっているので友達や家族とシェアしやすく、シェアから人とのつながりが作られるのでお菓子といった手軽なものでそのようにコミュニティが築かれるのはいいと思った。もちろん消費者に定価格で提供できるように製造面での行程を整備し、印刷・包装面でのコスト削減といった SDG s の取り組みに終わらず、消費者にも安く美味しいうまい棒を長年売り続けているのはすごいと思った。企業以外にも人生観について教えをいただき、“人生は人・本・旅だ”で、生きていく上で人とのつながりは絶っても絶てないもの、6 次の隔たりから人との関係を持つことは簡単だから目の前の出会いを大切にすること、本を読んで知識を蓄積しても外に出て経験しないと知識は役に立たないし、始まらないといった言葉を聴いて確かにと納得し改めて気づかされた。知識だけではやはり物事を捉えるのには限界があり、現地体験を積み上げることで経験も勘も上がり自分が当事者になることで分かることもあるから、スチュエーショナル・リーダーに積極的に挑戦したいと思った。
【身に付いたこと】
今まで SDGs について学ぶ機会は確かに多くはなかったものの毎回 SDGs 関連のことを個人や全体で調べて発表する形やそもそも調べるだけで終わることが多かった。大学で SDGs 関連を何かやってみたいと思い、この授業を見つけ参加したがこの授業ではグループワー

クといったディスカッションが多く個人の思いや意見に留まらず他の人の意見も知ることができたので自分では思いつかなかった考え方を知る回数が多く、多様面で物事を捉えられるようになった気がする。毎回の講義について感想を書くので自分の考えや意見を文章にまとめることは大変だったが、いつも人の意見に合わせていた部分から考えると物事に対してきちんとした自分の意見を持てるようになったのは成長したのではないかと思った。また、個人、全体で学ぶ形だけで終わらずそこからどうするべきかと学びから発展させた学習だったので自分には実際何ができるのかをより現実的に考えさせられ難しかった反面、SDGs に限らず問題等に対して自分ならどうするかという部分まで考えられるようになった。また、この講義以外の時間で SDG s について考える時間が増え自分自身で YouTube といった SNS やニュース等のメディアを使い、SDG s に取り組んでいるお店や講演会に足を踏み入れることが多くなり、自己サーチの機会が増えたことで結果的に学びが深くなった。SDG s に踏み込んだ側になったことで、日々の生活の取り組み、例えば私の家庭では賞味期限の食べ物といったフードロスが多かったから極力自炊してお弁当を持参するようになった生活環境の変化やこのお店は SDGs のどの問題点からどのように解決しようとしているのかと視界に入る景色も変わり、それ自体を探すのが習慣となった。

【これからどう活かすか】

今度は学ぶ側だけで終わらせるのではなく、行動する側になりたいと思った。行動を起こすのは難しく失敗するのではないかと感じるものだが、失敗したとしてもこの失敗はどこかに繋がる成功の導きと思い、何事にも SDGs に限らず挑戦してみたいと思ったことにはアクションを起こそうと思った。また、自身の生活と SDGs を照らし合わせ、自分が実行できることに取り組みさらに学んだことを実際の現地で体験したいと思った。最後の授業の回で実際に自分が体験して良かったことを人に話すとより信憑性があり、相手に上手く伝えられるのではないかと先生がおっしゃっていた部分に自分もなるほどと感じ、やはり、SDGs のイベントや行動に参加するのは人によっては案外勇気のいることではないのではないかと思っていて、インターネットで得た情報よりも体験者が実態を語ることによって、身近に感じ、じゃあ自分もやってみようかなと背中を押すことができるのではないかと考えた。なので、自身も身の回りの人たちに発信していきたいと思った。

SDGs 実践講座最終レポート㉕

初めに、講座の全体的な概要についてである。この講座は「SDGs 講座−１７ゴールへの第一歩」というタイトル通り SDGs の１７つの目標について毎週新しいテーマで、その分野の先生からの話を聞き、グループごとに話し合える、講義とグループワークが合わせた形で講座が行われた。SDGs の１番目のゴールである‘貧困を無くそう’から 17 番目のゴールである‘パートナーシップで目標を達成しよう’まで秋学期で１７つの目標について学ぶことができる貴重な講座であった。

筆者が考える心に残った授業について述べたいと思うのである。まず、全ての授業を受ける度に感じたこととしては、多くの学生は大学生以上のレベルで話をしていて、アイデアも溢れていることであった。最終発表のグループが決められる前には、毎回新しいグループで話し合うことができて、授業が終わる頃には、‘こんなことも考えられるんだ’と感じ、みんなの話をメモしながら新しい知識を得るなど、いい影響が与えられたと思うようになったと言える。その中で、特に心に残った授業としては、第５回の「移民・難民と私たち：共生社会へのカギ」という講座で気づくことが多かったと思う講座である。その理由としては、筆者も日本に住んでいる外国人であり、日本にきた目的は違うかもしれないが、外国人として住んでいる立場から見て彼らの気持ちや生活の苦しみなどがよく感じられたからである。日本は多文化共生を訴えているが、現実はまだ外国人への偏見や差別が残っていることに多様な感情があったと思う。その現実をどう変えていくのかが我々の課題ではないかと思うのである。

そして、第１０回の SDGs ゴールの５番である‘ジェンダー平等を実現しよう’の授業も印象に残った講義である。普段 SDGs のゴールで一番興味を持っていた目標であったが、詳しくは知らなかったところが多かったので講義でもっと詳しく勉強できる機会になったのである。中でも一番興味深かったことはグループワークで、男女間の差について話し合ったり、男女に持っているイメージや偏見について、いつも一人で考えていたことをみんなで共有できて非常に意味のある授業になったと思うのである。特に、日本には‘女子力’という言葉があって、韓国にはない表現であったので、なぜそういう表現を使うのか気になったが、グループのみんなに聞いて、褒め言葉としても使われる表現であったことを新しく知ることになった。このように、グループワークを通して知らなかったことに気づき、質問しながら学んだことが非常に多くあって、秋学期で受けた講義で一番印象的な講義だと思うのである。

そして、最後の発表もジェンダー平等に関するテーマであったので、第１０回の講義で学んだ知識などを生けすことができたと思うのである。

最終発表の時には、いつも興味を持っていたジェンダー問題について資料を調査、収集し、一つの発表にまとめることができた。この過程においては、自分の意見を出して、みんなにアイデアを提示するなど、今までは積極的ではなかったが、発表の準備を通して意見を出し、

みんなに伝えられる能力ができたと思う。
次に、本講座を通して身についたことについて述べたいと思うのである。
まず、筆者は SDGs について日本に来て初めて知り、思ったより実生活の中で SDGs の目標が掲げていることに気づいた。その中で、もっと知りたい気持ちから、この講座を受けることになった。講座を受ける前には、日本人学生とのコミュニケーションが多いこと、日本語の実力の問題で自分の意見を正確に伝えられるかなどの心配でいっぱいであったが、そういった心配は、自分の意見を伝えるなどの経験なしには解決できないことであって、自分の意見を伝えながら自信をつけたと感じた。つまり、筆者は本講座を通して、間違って心配せず意見を伝える自信と SDGs に関する知識を得たと思う。
最後に、本講座を通して学んだ知識などをこれからどのように生かしていきたいかについて述べたいと思う。まず、SDGs のマークは日本では食品や飲食店、工事場などでよく見られるほど広く普及されている。例えば、第１２回の講義で海の豊かさ、環境を守ろうということで魚などに MSC 認証マークがついてることを初めて知った。しかも、マクドナルドのバーガーのパッケージにもマークがついていることを見たことがあるので、日本のように MSC 認証制度を広げる必要があるのではないかと思うようになった。
しかしながら、筆者の国である韓国では SDGs についてあまり知っている人が多くはないのが現状である。なので、もっと SDGs について知らせる人になりたいと本講座を通して感じるようになったのである。
特に、環境の問題がどんどん深刻になっているので、各種の企業や国家機関などで SDGs をもっと活用し、広く普及したいと思う。本講座を通して SDGs を知らせたいという夢ができたので、その夢を向けてこれからも勉強し続け、社会に貢献できる人材として活躍したいと思うのである。

SDGs 実践講座最終レポート㉖

１． 序論

本レポートは SDGs 実践講座 ―17 ゴールへの第一歩―の最終レポートとして、講義全体の概要、心に残った授業回、身に着いたことやこれからどう活かすかについて論じる。

２． 本論

本講義では SDGs について課題の現状や各ゴールに対する具体的な取り組みについて学ぶ。SDGs 持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)とは、ミレニアム開発目標の後継として、2015 年 9 月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された，2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である。17 のゴール・169 のターゲットから構成され，地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind)」ことが掲げられている。前身の MDGs との最大の違いは政府や国といった大きな単位で行動を起こすのではなく、企業や個人といったより小さな単位の人々も課題解決に向けて行動する点であると考えられる。学生同士で目標を達成するにはどのような行動が必要なのかなどディスカッションをすることで学びを自分ごととして理解し、自分にできることは何かを具体的に考え、行動することがもとめられた。また、講義期間中には Toyonet-Ace にて SDGs の関連イベントが知らされ、講義での学びを積極的にボランティア活動に参加し、実践することが求められた。授業後の毎回のレポートには担当の講師からのフィードバックが得られ、課題に対する考えを深めることができる。

次に心に残った授業回について述べる。私は第 5 回の南野奈津子先生の「移民・難民と私たち：共生社会へのカギ」という授業回が最も心に残った。この授業で取り扱った移民・難民・共生問題には、SDGs の 3.すべての人に保険と福祉を、10.人や国の不平等をなくそう、16.平和と公正をすべての人にといった3つのターゲットが掲げられている。日本では少子高齢化による労働力が不足し、技能実習生など海外からの安い労働力に依存している。日本の在留外国人は平成 23 年末の 205 万人から、令和 3 年末には 1.5 倍の 280 万人を超えた。近所のファストフード店やコンビニエンスストアなど、町を見渡すと多くの外国人労働者がおり、日本の労働力を支える必要不可欠な存在になっているのだと感じる。一方で日本における在留外国人の人口が増えるにつれて、トラブルや犯罪が増えるのではないかといったイメージを持つ人がいる現状を知った。授業で取り扱った NHK の電話調査では日本に外国人が増えることについて賛成する人が 70%を越えたのに対して、自分の住む地域に外国人が増えることに賛成する人は 57%にとどまると発表された。自分の地域に住むことにより、治安が悪化するといった声があげられている。言葉や文化が違うため不安が生じてしまうことに対しては仕方がないことである。私は、この結果が生み出されたのは日本のメディアによる過剰な報道が人々の意識に影響を与えているのではないかと考えた。韓（2015）は「日本の犯罪報道では、容疑者や犯人の国籍が「日本以外」だった場合、その国籍がことさら強調される傾向が強い。」と述べる。日本人が犯罪を起こした際、日本人がといった内容は報道されず、外国人が犯罪を起こした際には、外国人がと強調して報道される。私たち日本人は無意識のうちにそのような報道に影響され、外国人に対する偏見や嫌悪が形成されてしまったのだと考えられる。私たち学生のように外国

人について学ぶ機会、知る機会を持った人はこの現状におかしい、寛容な精神でサポートすべきだと言葉では容易に表現出来る。しかし、そういった現状に触れる機会を持たない人が大多数を占めるからこそ、アンケートのような結果が生み出されているのだとわかる。ゆえに一緒に暮らすことに不安を覚えてしまうのも否定できない。しかし、ベトナム人だから怖いなど国籍を１まとめに偏見や嫌悪感を抱いてしまうのは差別につながるのではないかと考えた。日本で暮らす私たちは日本人がマジョリティである、という意識で暮らしてきた。マイノリティである外国人に対して、まずは国というよりもその人自身を知ることが大切なのではないかと考えた。文化の違いから、その人の行動に違和感を抱くことは自然なことであるが、相手を知ることで受け入れることが共生への第１歩であると講義を通して考えることができた。

最後に身についたこと、これからどう活かすかについて述べる。私は、目に見えない困難を想像する力、察する能力が身についたのではないかと考える。１.貧困をなくそうというターゲットに興味を持ち、コスメバンクプロジェクトに参加した。貧困は絶対的貧困、相対的貧困に分けられる。絶対的貧困は生きる上での必要最低限の生活水準が満たされていない状態を指し、相対的貧困とは地域社会の大多数よりも貧しい状態を指す。発展途上国に住む人々などに対して、貧困状態にあると推測できる。しかし、日本では生活保護など最低限の生活を守るためのサポートがある。そのため、貧困を抱えている人を実際に目で見て推測することが難しい。そのため、講義を通して自分にできることは何かイメージを持つことが困難であった。コスメバンクプロジェクトではアットコスメの社員の方に話を聞く機会があった。子供の卒業式でつける口紅を買うことができず、コスメバンクプロジェクトに救われたという話を聞くことができた。確かに化粧品は嗜好品であるかもしれない。しかし同時に女性にとってなくてはならない必需品となっているのだと感じた。コスメバンクプロジェクト参加することで目には見えない貧困を抱える人の背景やどのような困難を抱えているのか感じる力、行動を起こすことで当事者に寄り添う力が身についた。私は講義やボランティア活動を通して培った他者に対する想像力を忘れず、ボランティアに参加する。知識をもって完結するのではなく、得た知識を他者に発信し、SDGs の課題解決に向けて他者をまきこめるような存在になりたいと考えた。

［参考文献］

SDGs とは？―Ministry of Foreign Affairs of Japan(最終閲覧日 2023 年 1 月 27 日)

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html

韓東賢「外国人への偏見を助長しかねない「〇〇人」連呼の犯罪報道――熊谷 6 人殺害事件」『YAHOO!JAPAN　ニュース』2015 月 9 月 21 日（最終閲覧日 2023 年 1 月 27 日）

SDGs 実践講座最終レポート㉗

1. 全体の概要

全体の概要としては、まず 1-14 回目の講義では主に先生のお話を聞き理解を深めながら、グループディスカッションをすることだ。各講義で 17 のうち 1 つまたは複数の SDGs 達成目標を扱い、学ぶ目標の内容や現状、今後の発展などについて講義を受け、ディスカッションで広げていくというものである。第 8 回目以降は、同じ関心を持つ仲間同士でグループを固定し、第 15 回の最終発表に向けて互いに仲を深めながら学んだ。第 1-7 回のランダムでのグループ分けでは、各回で異なる学生とグループになることで、自分になかった考えを知る機会や、共通の意見を深める場となった。第 8 回目以降のチームごとでの学びは、各回の扱う達成目標について学ぶのはもちろんのこと、複数回同じメンバーでディスカッションを行うことにより、より話し合いが円滑に進み発展的なことまで話せるようになったと思う。

そして、この講座は対面では白山キャンパスで行われるが、川越や赤羽台、板倉キャンパスへ通う学生ともオンラインで繋ぎ、対面で講義を受けている学生と共に学ぶ形である。

2. 心に残った授業回

心に残った授業回は第 10 回である。ジャムボードを使ったグループディスカッションは初めての経験だったためとても興味深く、そしていつもより更にディスカッションが弾んだと思う。私のグループは、女性は私 1 人で男性が 3 人のグループだった。全体の受講者が、女性が多いこともあり女性だけのグループや女性が多いグループもいくつかあった。そんな状況ということもあり、私達のグループは他班と比較し少々特殊だったように感じる。

第 10 回は「4.質の高い教育をみんなに」と「5.ジェンダー平等を実現しよう」の 2 つの目標を主に扱う授業だった。そして、ジェンダーに関するテーマを扱うときは、女性の社会的地位や LGBTQ の問題が多いように感じる。しかし私のグループでは男性が多いことにより、他の班よりも男性側からの意見を反映していた。私自身女性側の意見を持っているし、先述した通り、女性のフォーカスが当てられやすい話題でもあるため、男性の意見を多く扱えるディスカッションは新鮮で有意義なものだった。この授業では学校の中のジェンダーと子供の権利というテーマだったため、小学校から大学までの学生生活を、ジェンダーを絡めて振り返る形でジャムボードを進めていった。私は女性の立場から「女の子なのに野球好きなんだ」と言われたことや、部活動で「女の子ならトランペットよりクラリネットの方が似合うね」と言われた経験を話した。男性側からの意見は「男なら泣くな！」と言われたことや、男性というだけで学歴を求められたり、それで差別されたりした経験があるというものだった。

以上から、私はディスカッションや話し合いの場に性別や年齢といった枠組みで偏りがあるのは問題だと感じた。今日の日本ではたしかに、男性に比べて女性の社会的立場が低い

ため、地位向上運動を起こすのは至極当然だと思う。しかし、そういった運動の中で女性の意見ばかりを取り入れ、逆に男性差別の世の中になってしまうのは本末転倒である。私達は同じ志、興味を持ち集まっている仲間であるため、話し合いが円滑に進みやすいが、そうでない話し合いもあると思う。自分の持つ意見を持つ人々の声を聞くことの大切さを改めて学んだ授業回だったため、心に強く残っている。

3. 身についたこと

最も身についたと感じる力はディスカッションの力である。まずは、毎授業のグループディスカッションについてだ。年齢も性別も、所属学部学科もそれぞれ異なる学生と 1 つの議題を話し合っていくことは、最初から上手くいくものではなかった。回を重ねていくうちに気づいたことは、司会役と各自の発言である。意見は 1 つでないことがほとんどのため、役割をある程度決め発言を聞き、記録を取りながら話し合いを進めることも大切だ。第 15 回のグループ発表に向けて、zoom やジャムボードを使って話し合いをしたこともあった。対面とは違う難しさがあり、上手くディスカッションが進まないこともあったがそこで身についたと感じたことは、発言することである。一見単調で当たり前のことのように感じることだと思うが、誰かが、そして一人ひとりが何かしら意見を述べない限り、話し合いは進まないものである。どんな些細な事でも積極的に発言し、話し合いを進めようとする力がついたように感じる。

4. これからどう活かすか

この講義を受け始めた 9 月当初は、17 の達成目標全てを知っているわけでもなければ、自分の関心の薄い分野に関しては、あまり興味が湧いていなかった。しかし、14 回の様々な目標の講義を聞いて、興味がないというより無知な自分に気付かされた。自分が今までの人生で触れてきた学習の範疇で判断せず、自分のよく知らない学びにこそ魅力があるということを学んだ。国際社会学科の長津先生のお言葉をお借りするならば、「コンフォートゾーンから出る」ということだ。自分が心地よいと感じる範囲にばかり身をおくのではなく、一歩外の世界に出てみることを大切にしていきたいと思う。グループにいた 2 人のアンバサダーの先輩から聞いた今までやってきた活動や様子、授業の最後にあった告知を聞いて学生ならではのアンバサダーの活動をとても魅力的に感じたため、この講義で学んだ力をアンバサダーとして活動して活かしていくことや、他にもあるボランティア活動や SDGs を推進していく活動に活かしていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート㉘

【全体の概要】
初めてこの授業に応募したきっかけは、GIFT さんと東洋大学のコミュニケーションファシリテーターに参加したことで、SDGs についてより詳しく学びたくなったためです。
そのイベントでは、同じ学部であると価値観や課題観も似て多様性に欠けると学んだため、学科の教授からの授業や、他学科の生徒から、生命科学的な視点以外の知識や価値観を知ろうと応募を決めました。
私たち大学生がソロで活動するには、学校内と企業連携は難しく、大学内か学校外での活動に限られると思っています。実際に板倉キャンパスで SDGs についてトイレや掲示板にポスターを張り出せるか事務課に相談しましたが、優先順位が低いことで断られたため、板倉キャンパスがそのような活動に積極的でない面と、規則が厳しいと判断し努力をする前に諦めてしまいました。
たった 2 年しか過ごせないこのキャンパスで、規則改革をする暇も根気も私にはないため、この授業を履修する生徒がもし私と同じ立場ならどんな選択をするだろうかと、自分自身を後押しする気持ちや、インスピレーションを受けたいという半分受け身の気持ちで、今回の講義を履修していました。
【心に残った授業回】
私が心に残った授業は第 4 回目の北脇先生による水供給分野・排泄水処理分野・廃棄物処理分野の適正技術（途上国の問題点）についてです。
水にかかわる病原体や健康被害や日本をはじめとする発展途上国が自国の技術をもって水道を設置していることなどもなんとなく知っていたし、そんな授業なのだろうと思っていたが、もっとも興味を持ったのは途上国の若者が日本で学び故郷にその学んだ技術や知識を持ち帰り、環境を改善する活動をしているということです。
日本の少子化問題は、日本人のほとんどが知っていることだが、私は無知であるがゆえに、外国人留学生と外国人労働者は同じ軸にある感覚でいました。しかし外国人留学生は日本で学び故郷をより良くするためのかけ橋であることが良く理解できた。
第 11 回目この講義で簡単に AI がどのように働いてヒトに影響を与えているのか学ぶことができた。学んだあとに思う私の AI 像は、外界から刺激を受ける情報がないと応答しないという、まるで生物学の生物が共通して持つ、恒常性と環境応答の観点にとても似ているなと感じた。生物も外界が変化することで学び次世代につなげることで数千年もかけて進化していった。AI はそれを 1 年か 1 か月か 1 週間与えられた仕事の内容によっては 1 日で習得するのだとすると生物では到底まねできないだろうと思った。
初め全く専門分野ではない授業だと思ったが、生物学との共通点を見つけることでわからない講義が一気にわかる・わかりそうに変わる瞬間に、多様な視点の大切さを感じた。
講義でも佐野教授がおっしゃっていたように、AI には倫理観が欠如している、たとえ技術

があってもデータが十分でない AI は完ぺきとは言えないのだろうと学べた。
人間が与えたデータ量でカバーできるだろうが、問題が起きた時誰が責任を取るのかも考えさせられる講義だったと印象深い。
【身についたこと】
この実践講座から身についたことは、以下の 5 個です。
・オンデマンド型講義の受け方改善案
・他学科とのコミュニケーション実績
・本校の SDGs 活動と実態
・発言への責任感
・協調性
[オンデマンド型講義の受け方改善案]
今回初めてリアルタイムでのオンデマンド型講義を履修しましたが、私の学ぶ環境は効率が悪く対面型よりも、学びきれていないと実感しました。
例えばウェベックスではパソコンの半画面設定ができません。そのためテキストにメモを書き込みたくてもスペースがなく紙媒体に書き込むしかなくなってしまっていました。そうでなくても、カメラがオンの時にパソコンに書き込むことはできなかったので、この授業からタブレットの導入を検討することができました。
[他学科とのコミュニケーション実績]
板倉キャンパスは他とは離れており他学科とのコミュニケーションは皆無と言ってもいいでしょう。それが原因なのか文系と理系の壁であるのかはわかりませんが、学部ごとにどんな雰囲気なのか、偏見で話すことがほとんどで、とても良い会話とは言えないものです。SDGs でいう、だれ一人取り残さないためには、大学内で互いに尊重しあう必要がありますが、そのためにはまず知ることからだと思っていました。
今回私は周りよりも一足先にコミュニケーションを取り、ともに学んだ事が自分の自信につながり、次にチャレンジする壁が低くなったと感じられたし、板倉キャンパス以外での学びにおいて選択肢も増えたと思います。
[本校の SDGs 活動と実態]
東洋大学公式サイトを開けばどの教授がどんな研究をしているかは明らかですが、当人に講義をしてもらうことで私の中ですべての講義の研究や活動への価値が一気に高まったような気がしました。すべてにおいて他人事ではない私の身近にある問題なのだと学んだため、最近では生活から学習時間のいろんな場面で選択的知覚が働くようになりました人の行動選択にはまず知識からなのだとわかったので、情報拡散の大切さもともに学ぶことができました。
【これからどう活かすか】
学外活動やイベントに参加することが多いのだが、本校で似た研究や学問の教授を知っておくことでその場の学びが、もっと面白くなるのではないかと感じたため予習してから

イベントに参加するようにする。
プラスチック使用量を減らしたり、生ごみの量を減らしたり、マイボトルや再利用できるものの用意など生活基盤を整えることで、実践することから始める。
自分のできる範囲から行い、正しい情報を自分からも発信することを心がける。

SDGs 実践講座最終レポート㉙

他学部他学科の先生方の講義や、外部講師の方の講演など、この講座を受講したことで多くの知見を得ることができた。「1 講義(1 講演)あたり 1 Goal」の構成だったため、SDGs のそれぞれの項目について、どのような問題がその Goal に該当しているのか、それを解決するためにどのような研究・活動が進められているのか等、1 つ 1 つを深く学ぶことができた。私自身、高校生の時に海外のパートナー校と協働学習し、世界に向けたメッセージを込めた壁画を共同制作する活動(主催：JAPAN ART MILE「アートマイル国際協働学習プロジェクト」)に参加したことがあるため、SDGs についてある程度は理解しているつもりだったが、新たに学ぶことも多くあった。

SDGs は「項目同士に相互関係がある 17 の目標」である。1 つについて深く学ぶことができる「1 講義(1 講演)あたり 1 Goal」の構成は、SDGs についての理解度が異なる人々に伝える上でとても合理的な手法だが、各 Goal の関連性が少し分かりにくいように感じられた。先生によっては「この項目とも関連がある」と補足で付け加えてくださる方、付け加えずとも自分の知識で関連付けやすい方もいたが、そのように感じることが少なかった回もあったように感じられた。1 回 90 分の講義の中で、1 つの Goal の概要と関連のある項目についてまとめることはなかなか難易度の高いことだとは理解しているが、もう少し、Goal 横断型の要素が加わると SDGs についてより理解が深まると考えた。

心に残った授業回は、第 4 回「開発途上国の生活環境改善に向けて(北脇 秀敏　国際学部教授)」である。「MDGs と SDGs の比較」から始まり、SDG6「安全な水とトイレを世界中に」を中心に、他の Goal と関連付け、様々な視点(「発展途上国の問題点 1-水供給分野」「発展途上国の問題点 2-し尿・雑排水処理分野」「発展途上国の問題点 3-廃棄物処理分野」)から考えることができた。資料が多く、次々情報が出てくるため、私自身、受講者としてとてもエネルギーを使ったと感じたことを覚えている。しかし、SDGs の特徴である「項目同士に相互関係がある(17 の目標)」ことを一番理解できた回であり、私の思い描いていた理想的な講座と合致していると感じた。

このように感じることができた要因として、先生の授業構成の他に、テーマが「水」だったこともあると考える。「水」は生命にとって必要不可欠な物質である。地球に生命が誕生したのは「(液体の)水」が存在したためだと言われている。古代ギリシャではタレスが「万物の根源(アルケー)は水」といい、エンペドクレスは四大元素の 1 つに「水」を入れている。「世界四大文明(別名：四大河文明)」は名前の通り大河のほとりで起こった。海と陸の比率は 7：3 で、内陸国を除く世界中に海は繋がっている。このように「水」は生命にとって、なくてはならないものであるが故に、多くの(複雑な)問題が発生しうるものでもあるため、「水」一つをとっても様々な視点から考えることができるのだと考えた。

この講座を受講して身についたことは、「SDGs についての理解を深め、これまで以上に行動に移すようになったこと」である。学修到達目標である「SDGs の理念と具体的な取り組

みを“自分ごと”として理解する力」については、各講義・講演を受講した後、リアクションペーパーで講義・講演を振り返りながら自分の意見を書き出し、得たもの・感じたことを整理することで自分の中に落とし込むことができた。「“自分ごと”として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力」については、講義・講演を踏まえて興味のある項目(解決したいと感じる SDGs の項目)を選び、発表グループを決めた際に達成できたと考える。「課題・問題を発見する力」については、SDG14「海の豊かさを守ろう」に関してグループで話し合ったことで達成できたと考える。(海だとテーマが大きすぎるため)マイクロプラスチックに焦点を当て、第 12 回「海の豊かさを守ろう～イルカ・クジラの世界から見つめる SDGs～」と、東洋大学トップリーダー連携教育支援プログラム 特別講演「地球規模で広がるプラスチック汚染」の内容も踏まえてどのような課題・問題があるのか、また、発見した課題・問題をどのようにして解決するかを考えることができた。「他者と関わりチームとして成果をあげる力」については、グループ発表や要望書の作成等、提案し、行動に移すことはできたが、実現に至っていないため、成果があげられていない状況で講座は終了してしまったが、要望書を提出し、やり始めたからには実現まできちんとやり遂げたいと考える。この他の SDGs の項目についても講義・講演や、最終発表から、自分にできる小さなアクションをたくさん見つけられた。まずは身の回りの小さなことからから始め、友達や教職員の方々にも協力してもらい、ゆくゆくは SDGs に関するプロジェクトを 1 つ以上は実現・実行させ、この講座で得た知識を活用して、卒業後に国内外の社会で活躍できる人材になりたい。

SDG s 実践講座最終レポート㉚

SDGs 実践講座を受けて、初めに全体の概要として、非常にグループディスカッションを積極的に行っていた印象がとても強かったのである。今回は各回で講師の先生が異なっていたが、先生方の問や、生徒同士で思っていることを話し合うことで、私自身も今まで考え付かなかったことを違憲として言う生徒が多かったからである。第１回から１４回まで、ＳＤＧｓに関わる様々な視点から教わり、例えば小野先生の回では、ＳＤＧｓ目標１の貧困をなくそうが取り上げられ、主に貧困に関しての知識だけでなく、その知識からどう考えていくかを生徒同士で話し合ったことで、応用を利かせるかつ、より内容の入りやすい講義であったのである。また、アイサーチジャパンの講師の方からの回では、海の豊かさについてより知識を深めるために、プリントのポイントは自分たちで記入させることで、理解しやすい内容でありつつ、重要性について学びやすかったのだ。そして最後にＳＤＧｓの発表会ということで、準備には相当な時間を費やしたが、いざやってみると自然にグループの中で意見がでてきて、順調に発表を終えることができたのである。

そんな毎回グループディスカッションが多かった講義の中で、印象に残っている授業の回は、高田さんの講義である。なぜなら、高田さんの仰っていた内容が、私生活の身近にあることが多く、考えさせられることも多かったし、今後の自分自身の課題にもなったからである。まず、高田さんのお話の１つに６次の隔たりというものがあったのだ。これは各友人の知り合いを辿っていくと、有名人や、意外な人物に行きつくというものなのである。私は４次目の隔たりで俳優の佐藤浩市さんがいることにこの講義の回で思い出したのである。ただこれはただの意外な知り合いを見つけようというわけでは全くなく、人とのつながりを大事にすべきであることを教えてくれたのだ。そもそも様々な新しいことや、何かをする中で、必ず自分１人だけでは限界がきて、誰かの支えがなければやっていけないのである。そういった中で、周りの助けてくれる人を大事にし、続けていけば多くの人の存在に気づくことも可能となるのだ。このお話を聞けたことで、改めて周りの人を大切にしていきたいなと思うのと同時に、出会いそのものに感謝をして生きていきたいと感じたのである。また、6 次の隔たりだけでなく、緒方貞子の「大切なことは、カンと想像力です」という言葉も心に刺さったし、「望ましい偶然に幸運が起きる人の５つの行動」という話もこれから生活していく上で自分自身にとても重要なことであると感じたのである。緒方さんの言葉の内容には３つのカンがあり、直感、勘、観で、直感には時代感覚や情報感度などの意味があり、勘には行動においての意味や、人生観の観なのだが、私自身には特にこの観というのに欠点がある。というのも、人生をあまり振り返ることがないため、欠落しているのだが、これから就活をしていく上で、この観は非常に重要なので、すこしずつ自分観察というのも大事にしていきたいのである。また「望ましい偶然に幸運が起きる人の５つの行動」の中で、思い当たることは多かったが、その中で柔軟性に大きくかけ離れているため、今回の講義のようなグループディスカッションで、柔軟性のある人の考え方や、どうすればその考えに行きつくのかを学べた良いきっかけにもなったのである。そうい

った様々な点において、私自身の課題が多く見つかった講義であったことから1番印象に残った回なのである。

この講義で身に付いたことは、自分の身近でSDGsに対してやれることが多いことに気づき、行動を少しずつ起こせるようになったことである。私は去年の10月に、里子の子供たちと触れ合うボランティア活動に参加してきたのだが、そこで学べたことが非常に多かったのと、もっと自分にできたり、やらなければいけない幅広さに気づけたからである。そのボランティア活動は小野先生に勧められたこともあり、始めたのがきっかけの1つでもあったのだが、実際に現地で里子とその里親に会ってみて、何かをしなければと考えこんでいた私であったが、むしろ元気を子供たちからもらえたり、ボランティア活動であることを忘れるぐらいに楽しんでたりして、もちろん勉強で来たのだが、それ以上にボランティアの大切さや、私にもっと誰かの助けになってあげられるような活動に携わっていきたいと思うようになったのだ。そもそもこの講義をとっていなければ、ボランティア活動になんて参加することも絶対なかったし、触れる事すらなかったため、講義で学んだことはもちろんであるが、それ以外のところでもたくさん身につけられたため、ボランティアはこれからも参加していくし、そこで様々なことを学べたらいいなと考えている。

最後に、これからどう活かしていくかについてだが、先ほども述べたように、ボランティア活動には一層力を注いでいき、学ぶ幅を広げつつ、SDGsの理解も同時に深めていけたらいいなと思うのである。さらに活かしていきたいと考えているのが、積極的にメモを取ることである。高田さんの講義の内容は、スマートフォンでメモを取り、日常的に見ることが可能なため、度々見ては思い出す作業をしていたこともあり、印象に残っていたのである。今回のSDGsの講義では、多くの事柄を講師の方々から学べたが、その一方で忘れることもあったため、貴重なお話を今後忘れないようにも、メモを取っていくことで、たまに見返し、脳にインプットしていけたら、さらに成長できるのではないかと思うのである。

SDGs 実践講座最終レポート㉛

SDG s 実践講座を受講して、まず自分は SDG s についてまだ全然知らない初学者でしたが、各回でそれぞれの目標とその課題・世界の現状や取り組みを知ることができました。全体の授業の流れとして、グループワークが多く、他学部・他学年の方とも交流できたのが良かったです。最初は知り合いが誰もいない状態で授業についていけるか心配な部分もありましたが、特に後半は同じ目標に興味を持つグループメンバーと意見や情報交換できて良い刺激をもらうことができました。実践講座ということもあり他の授業と比べてもレベルは高めで課題やグループワーク等自主性が求められると感じましたが、「SDGs に興味はあるけど何から始めればいいのかわからない」という状態だった自分にとってはとても満足度の高い内容でした。課題へのフィードバックが毎回もらえるのも、自分の気づかない視点からのアドバイスが多くて深い学びに繋がりました。あと授業が金曜の 5 限で、２部生でも参加しやすかったのがありがたかったです。

特に印象に残ったのは、第７回のうまい棒とパートナーシップのお話です。パートナーシップと聞くと国家間の連携のような難しいものを考えていましたが、私たちが目の前の人と一緒に何かを成し遂げていくという身近なところにもパートナーシップが生まれているということが分かりました。また「六次の紐帯」という言葉を初めて知り、人間関係は狭く深い付き合いが良いと思っていたけど、思いもよらぬつながりから自分の興味や可能性が広がっていくかもしれないというのが面白くて、せっかく大学にきたのだからいろんな人と積極的に関わって自分の世界を広げたいと考えるようになりました。この回は特に SDGs だけでなく、これからどう生きていくのか？といったヒントをもらえた気がしています。

今回私たち６グループでは、SDG１４「海の豊かさを守ろう」の実現に向けて、自分たちが取り組めることについて考えてきました。海の豊かさや海洋生物の多様性を守るためにまず思い浮かんだのは、やはり海洋ゴミの問題ということでグループ内で意見が一致し、そこからプラスチックゴミの影響やその廃棄方法の現状などを調べ、特に身近なペットボトルが飲み終わったら必ずしもきちんと循環されているわけではないということを知りました。第１２回の授業でアイサーチジャパンの講師の方が、せっかくなら大学で何か取り組める提案ができたら良いねと話していて、私たちのグループでは給水機に着目しました。大学に設置されている給水機は現在コロナウイルスの感染拡大防止で使用禁止になっていますが、マイボトルへの詰め替え専用にして使用再開できるようにする案や、衛生面に考慮してそもそも口をつけることができないウォーターサーバーを新たに設置してもらう案を実際に要望書にまとめて提出しました。自分ひとりだったら思いついたとしても実際に提案することは絶対になかったです。実現するかはわからないけど、声をあげて現状を変えていけるよう行動するというプロセスを体験できたのはいい経験になりました。もちろん大変な面やうまくいかないこともありました。具体的には、白山キャンパス以外のメンバーが置いていかれないように LINE で連絡を取り合っていたのですが、やはり文字でのコミュニケ

ーションだとうまく伝わっていなくて勘違いが生じてしまったり、みんなの足並みがそろっていないと感じることがありました。それでもチームで一つの目標に向かって行動する協調性や企画実行力はこの授業で大きく伸ばすことができたと感じています。このようなプロジェクトっぽいことを今までほとんどやったことがなかったので反省点も多いですが、将来就職してからも求められる力だと思うので今後生かしていきたいです。

これから取り組みたいこととしては、SDGｓを学び続けること、SDGｓアクションへの積極的な参加です。勉強して自分ゴトとして捉えることができたとしてもそれだけでは現実は変わらないので、小さなことでも自分にできることを見つけていきます。特に最終グループ発表では、興味のある目標以外でも取り組めそうなことが身近にあると気づくことができました。環境や労働者のことを考えた製品を選んだり、SDGｓに取り組んでいる企業や団体を応援したり、一つ一つは小さな行動でも私たちの選択によって意思を表明できると考えています。

最後に感想です。私はSDGｓの初学者なので、実践講座という意識高い授業に参加していいのか正直迷っていましたが、一歩踏み出して参加してみて本当に良かったです。グループでの活動でパートナーシップを実感することができ、メンバーそれぞれの学部の知識や行動力にたくさん刺激を受けました。また、SDGｓは通過点に過ぎないと言っていた方がいたのが印象に残っていて、それがすごく共感できました。2030年までに達成できたらそこでおしまいではなく、持続可能な未来のために生涯少しずつでもSDGｓを意識して行動することが大切だと感じました。自己満足になってしまう部分もあるかもしれませんが、何もしないよりは絶対良いので今後もSDGｓアクションに関わっていきたいと思います。この授業を運営してくださったスタッフや講師の方々ありがとうございました。